



江戸名所圖會

西垣文庫
文庫10
6556
2



文庫10
6556
2



連ね燈の光ハ玲掩とく流ハ映中樓船扁舟所せくともひつと
一時ハ水面を覆ひかへてあつても陸地ハ異ならず
耳ハ満く薫く実ハ大江戸の盛衰なり

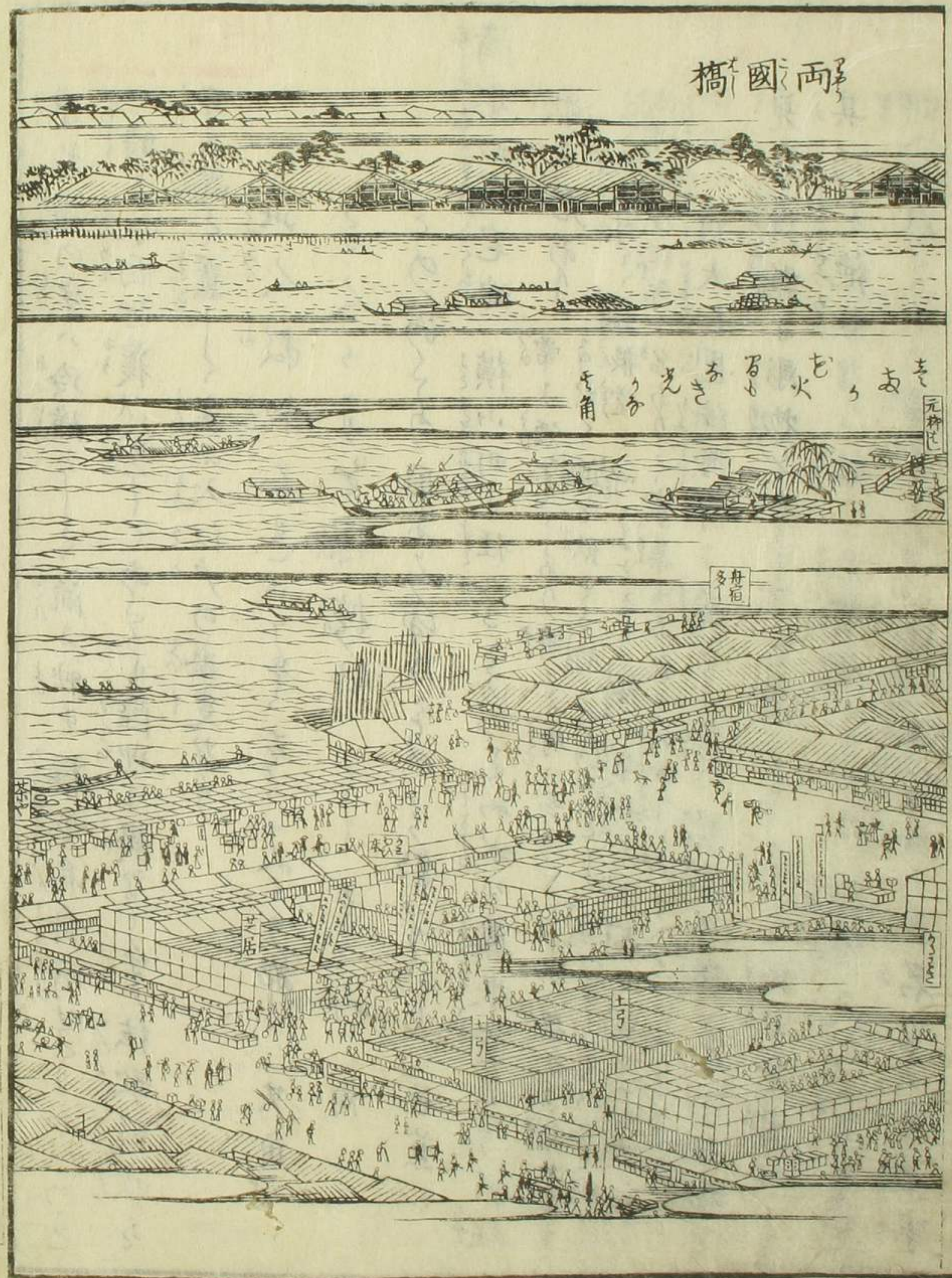
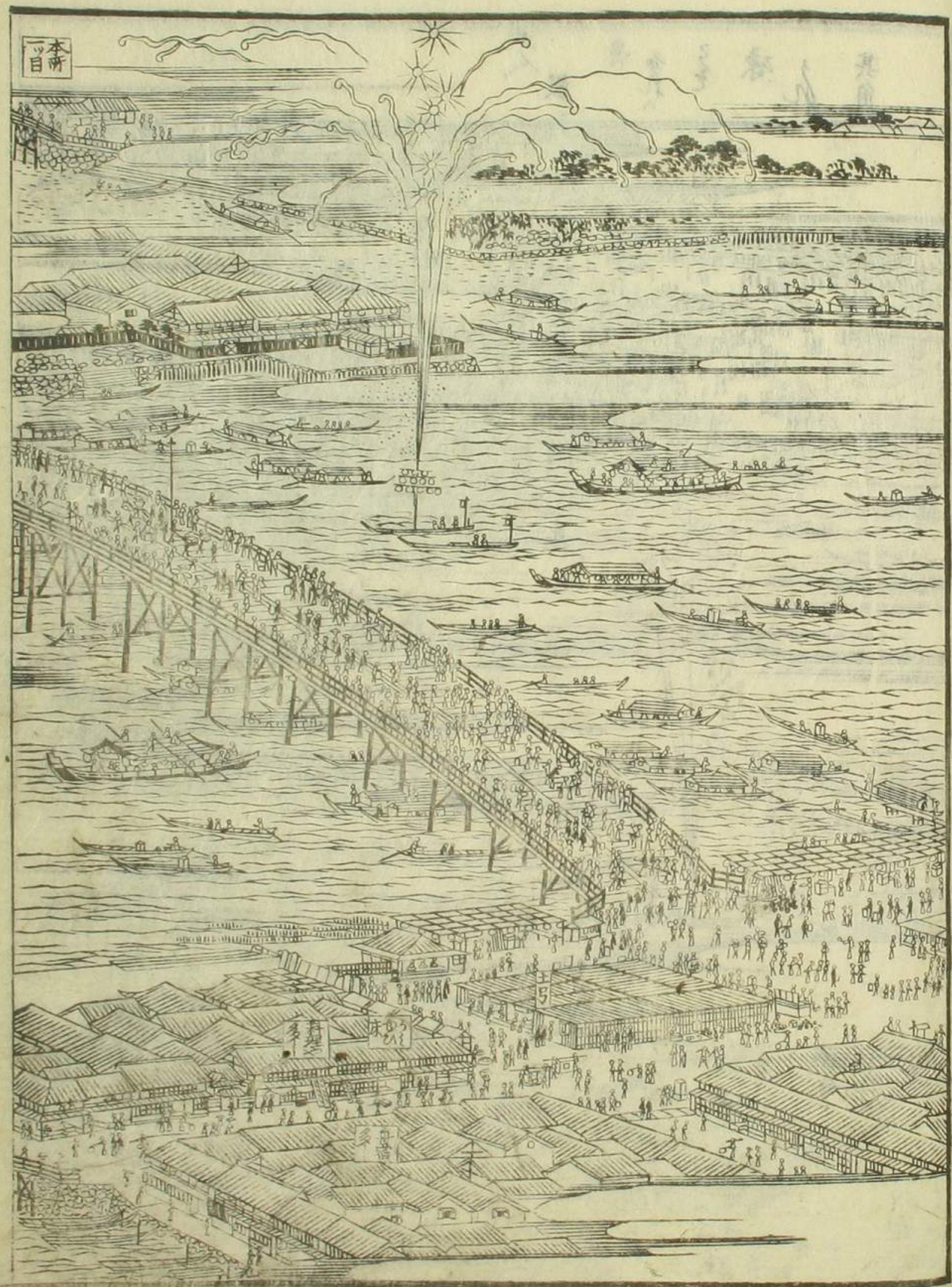
此人救船ふきハ丁をささみその那ハ
子人々多を操櫂やそそみ同
この河より因ふみゆるものぞ船すし 芭蕉

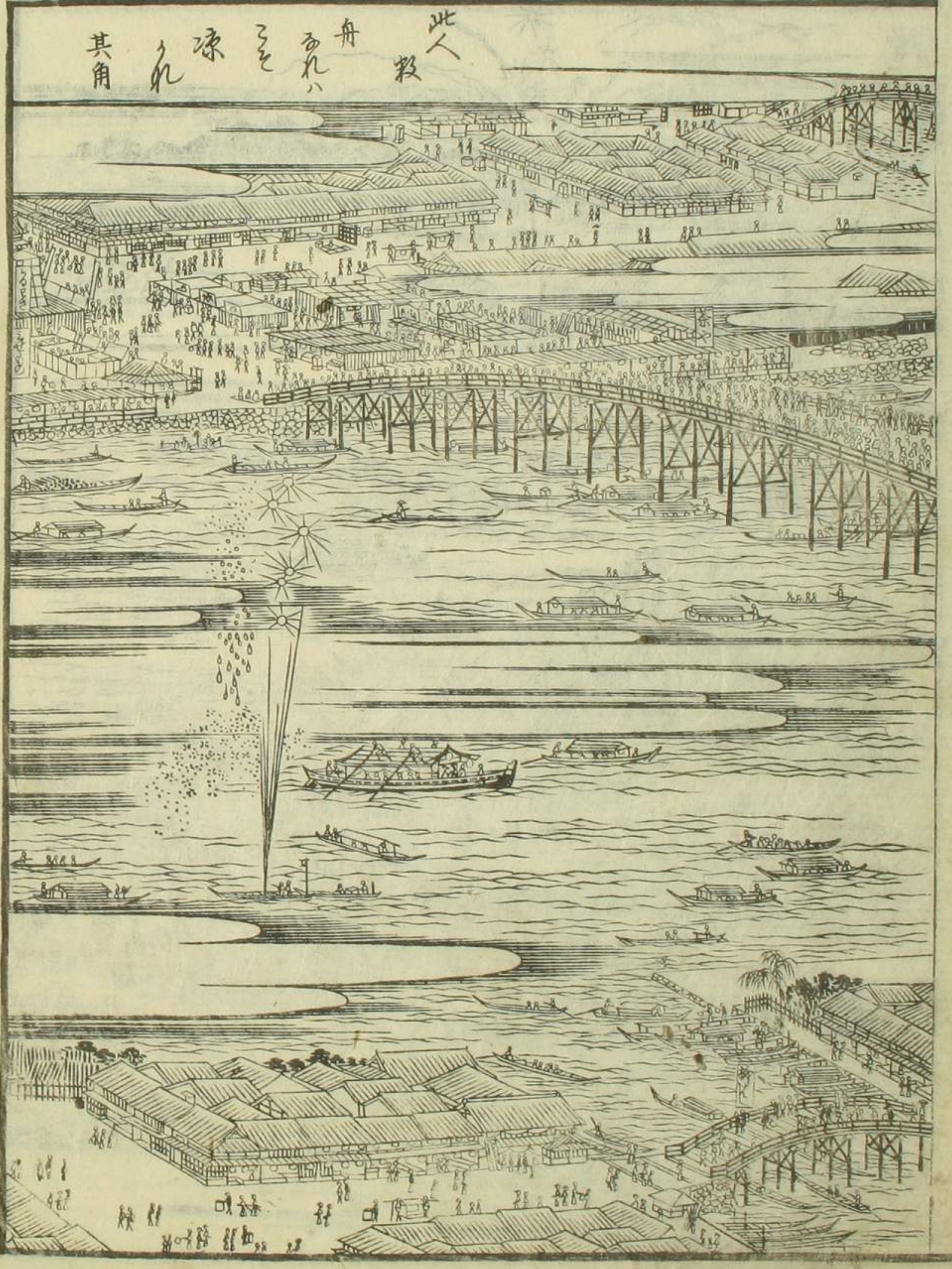
清水如水宅地 横山町は住るるとつと水ハ藤根堂と号は狂

歌ハ名あり 常ハ酒をこりり酔る時ハ名ハ藤根堂と号は狂

如水一時大和國法隆寺ハ藏をさす所の賢聖の瓢とて器物を
見ろ後瓢ハ彫物をさするを得るなりあるも鈍刀を用ひて
其巧尤絶妙なり依て所需多りなれば此匏瓜のあふ身を
押へられりとの意あり自ら迷淵蟠鯨候とそ名のりなる住家







此人 舟 其角 涼 ぬれ

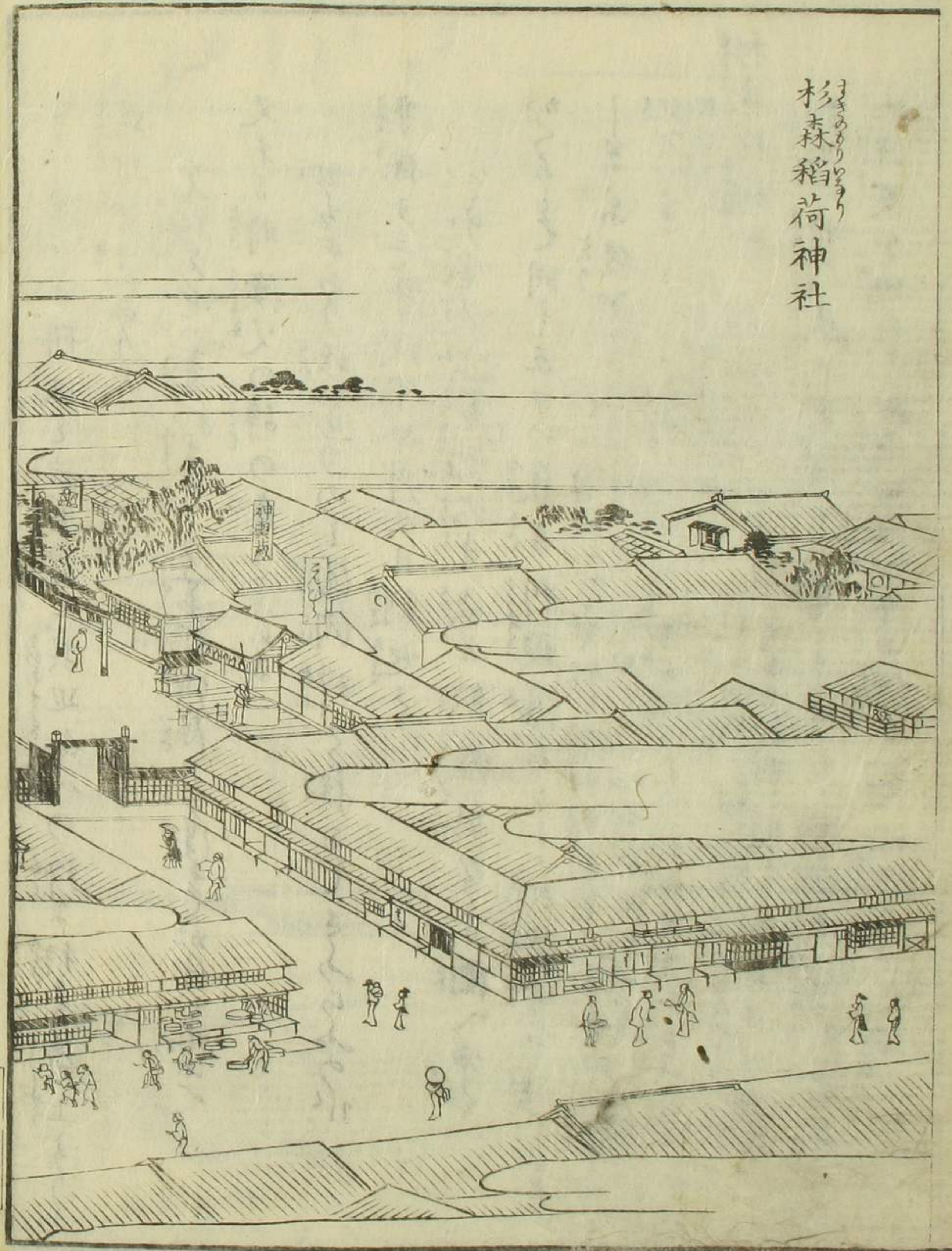
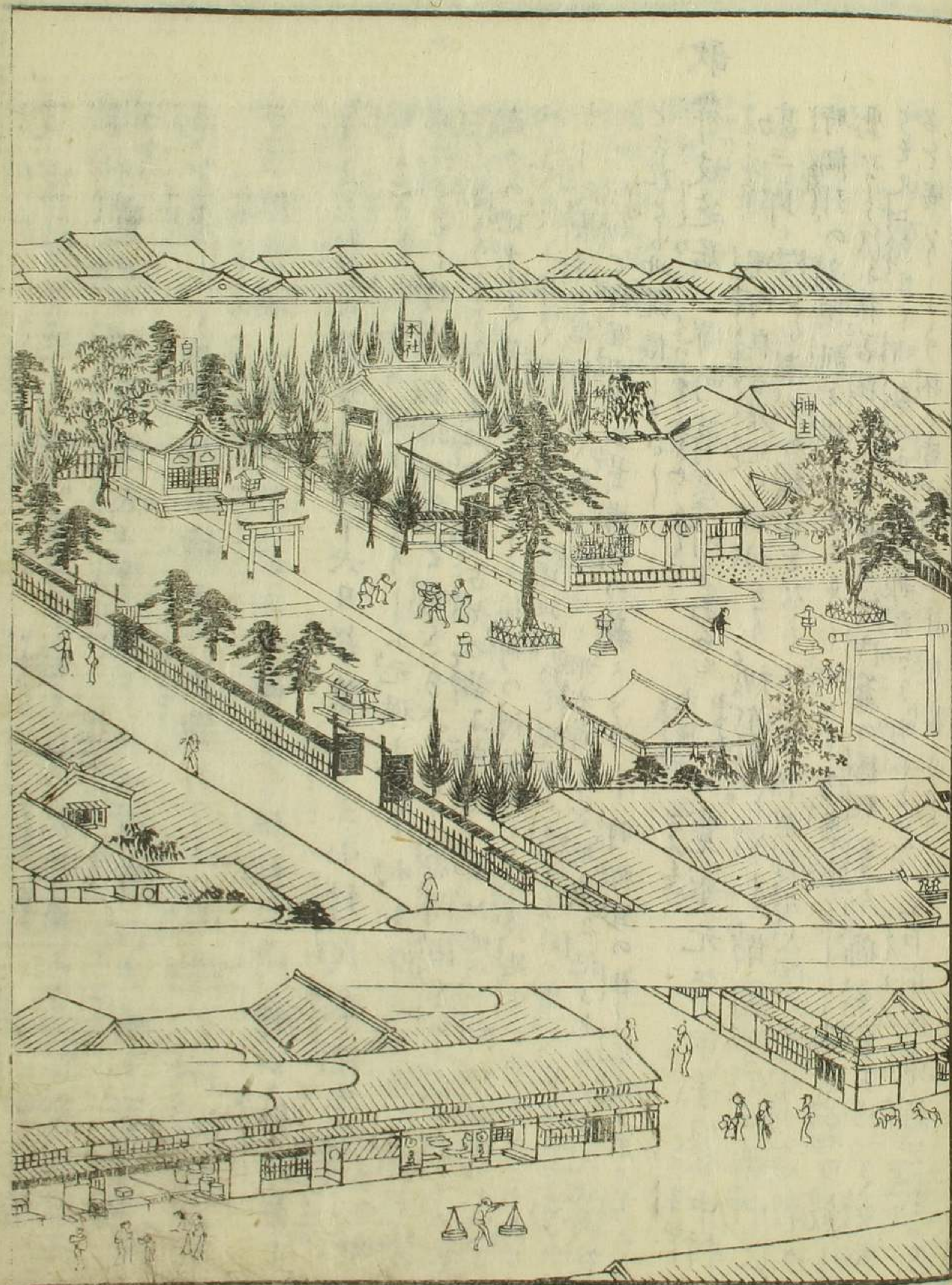
あり東は茶研堀と云ふあり其地知人の許より行く樓上より
遠近を見せり

又ある時漢父の辞の意をいめる
世をせり後世のの濁河畔を渡りてさらふの水

享保十三年戊申正月三日朝起り

かゝるく同く五日の暮方利頭湯あり太神宮を拜し

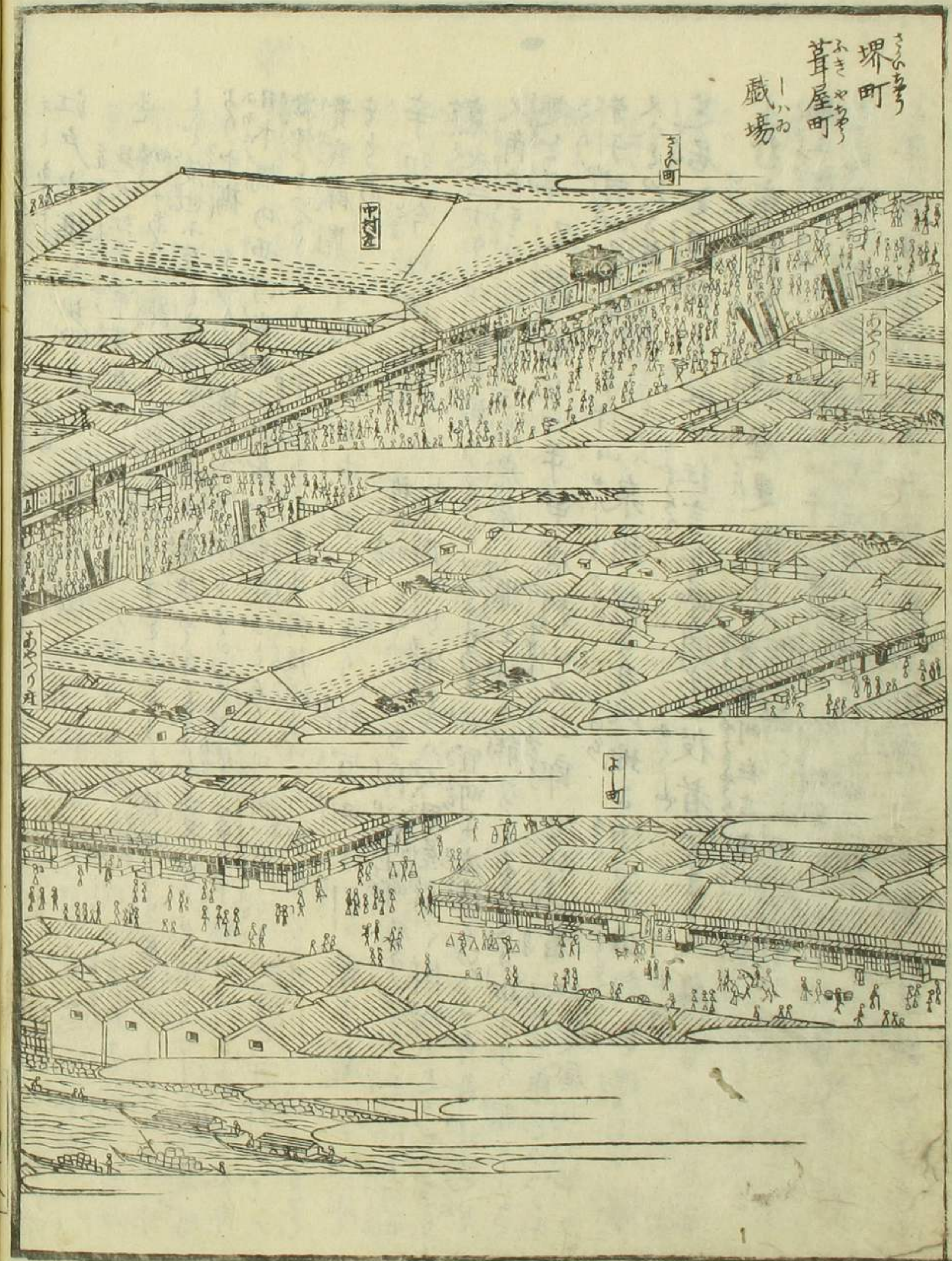
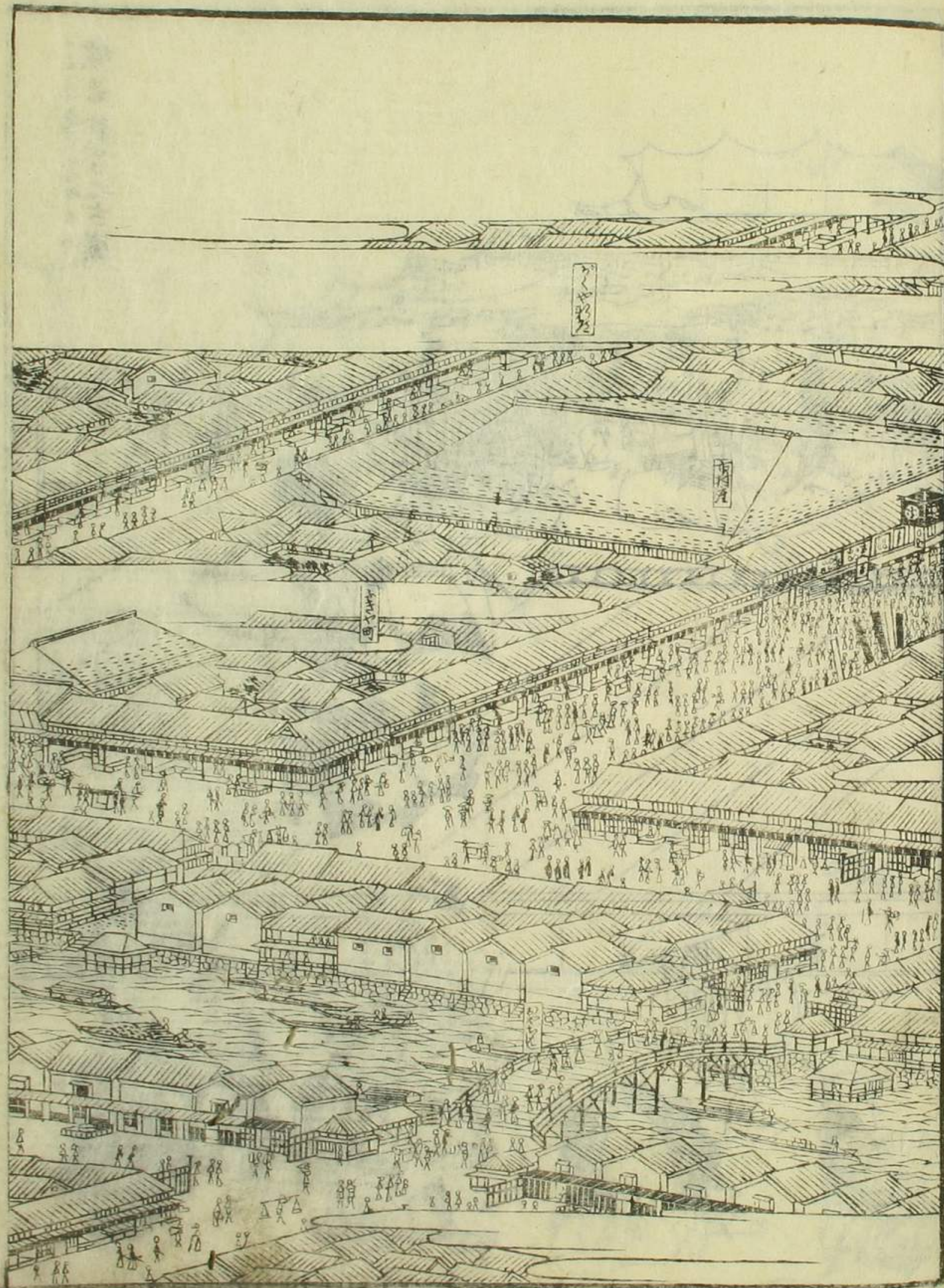
杉森稻荷社 新林木町あり
相馬の将門威を東國へ逞しうせし頃藤原秀郷朝敵誅伐
の計策を廻りし此神の加護に依り遂に将門を亡し

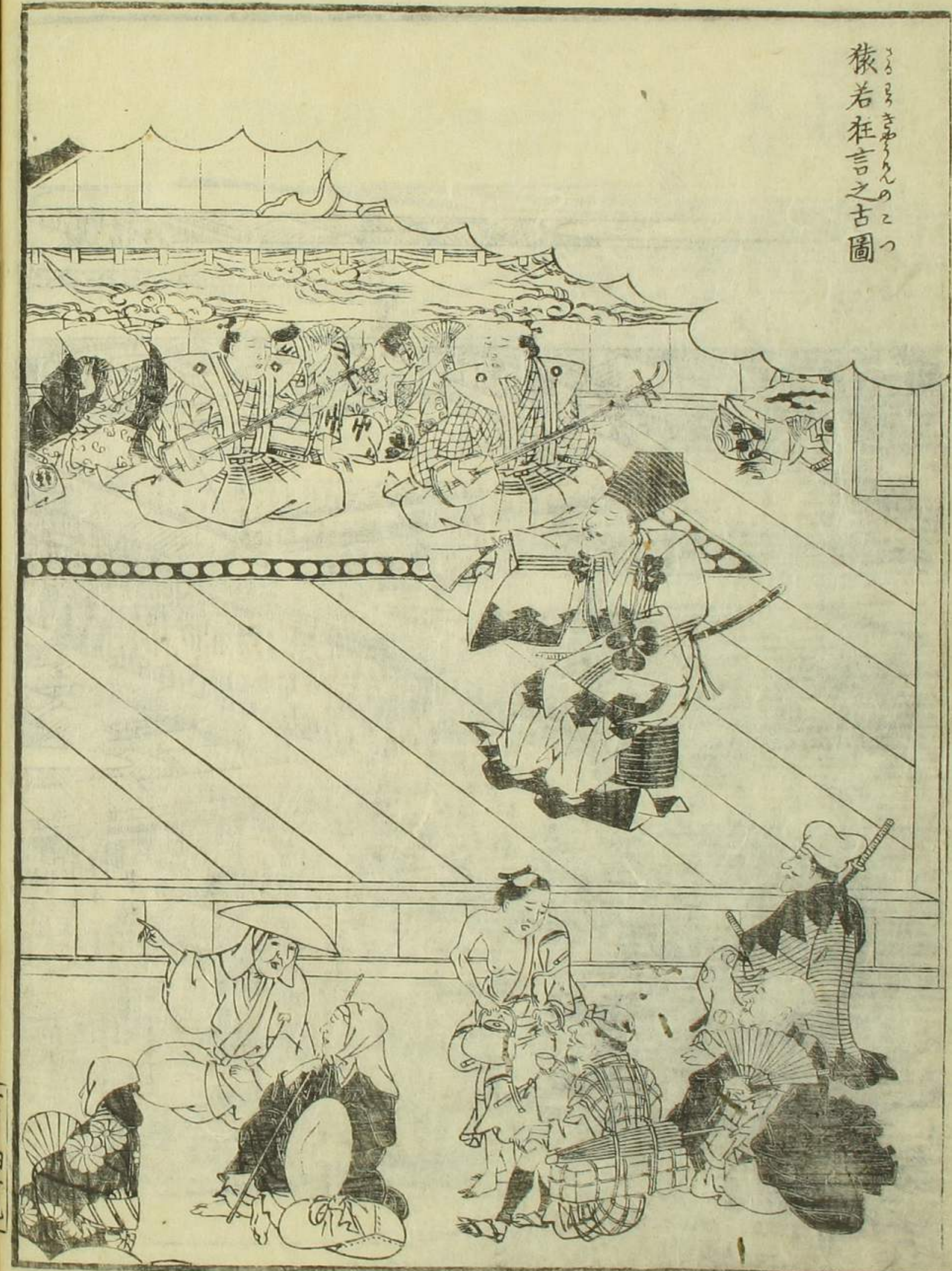
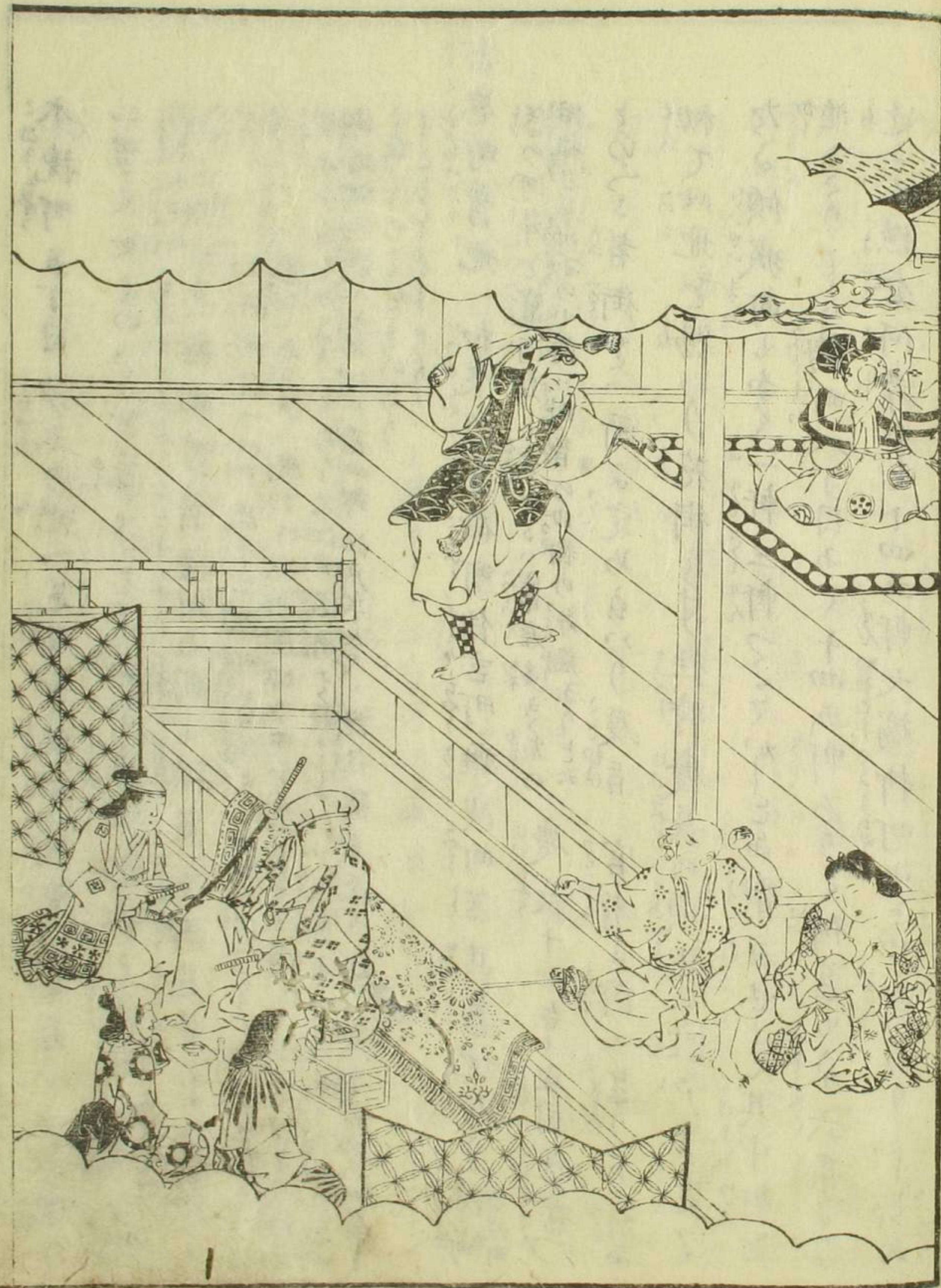


杉森稲荷神社

後靈夢を感じ此地に至る橋くさる杉の森あり地小崇め祀る
當社寛正の頃東國大旱魃を太田道灌江戸城より深く
是を患とて此御神小禱す其驗あり雨降る百穀大り
登る依り頃山城國稻荷山を摸して伍社の御神を勧請せし
毎るとなり毎年四月十六日祭奠神主小針氏奉祀を
園ありと参詣の道なるなり元禄十六年本多弾正少弼志晴寺社の
觀林ありと時社へ参詣の道を開き寛文の頃此地に小針氏右衛門の末
高戸の地あり又此地の或古老の語は寛文の頃此地に小針氏右衛門の末
此火災は依り焦土となり項此祠の現然と残り諸人皆奇異を云長谷
川町名を和宜町と云昔當社の總より一時和宜の住し而ちあり号する
とされ此説信
歌
舞妓芝居 堺町菅屋町ありと 木挽町 寛永元年甲子の春中村
甚三郎 堺町在言座元の始社なり 初道順と号す昔禁闕及ひ宮中に
時綱引の音頭詔を祖なりしなり又官船大船大船の川口へ入津の
塵を又上京せし時綱三郎の作報を明石と号す 官府の免許を蒙る
名を賜りし時綱三郎の作報を明石と号す 官府の免許を蒙る

江戸中橋の地より始めて太鼓櫓を揚猿若狂言尺の芝居を興行
是大江戸常芝居の始元なり江戸鹿子と号す草紙に寛永より前ハ芝居
町ありと記せハ柴井町の書を改めたり又江戸名所を記し芝居町
と後世に至り芝居を柴井の書を改めたり又江戸名所を記し芝居町
あり中橋の西河岸町小芝居を興行す可考寛永十八年の印行のそあり
日本橋の西河岸町小芝居を興行す可考寛永十八年の印行のそあり
物産集 冊子の中橋より米島丹後守奇舞妓ありと高札を建てる
貴賤群集 同九年壬申中橋より和宜町へ引遂る慶安四年
辛卯今の地に移る 和宜町と号す今ハ長谷川町の所なり今俗に此地
寛永二十年印本吾端めりしと記す和宜町は左近と号す奇舞妓芝居
又角カ 外薩摩大虎屋々操土佐の能なりとあり由あり舞子芝居
趣を舉 又寛永十一年甲戌村山又三郎といふ者 名護屋山三郎の
弟子村山又左衛門の子村山 泉州堺より此地を下り公許を得る常
又ハと号す者の次男なりと号す 泉州堺より此地を下り公許を得る常
芝居を興行し能の狂言を興行し役者を興行し舞子六人勤
む市村羽左衛門座是なり 菅屋町在言座元の興起なり二代目を
勤三郎の門弟より寛文四年より始り續狂言を工夫し引幕 其後萬治
道具建を製せしを放し其頃市村座と大芝居と稱ししあり
三年庚子森田太郎若清といふ者是れ 官府の免許により





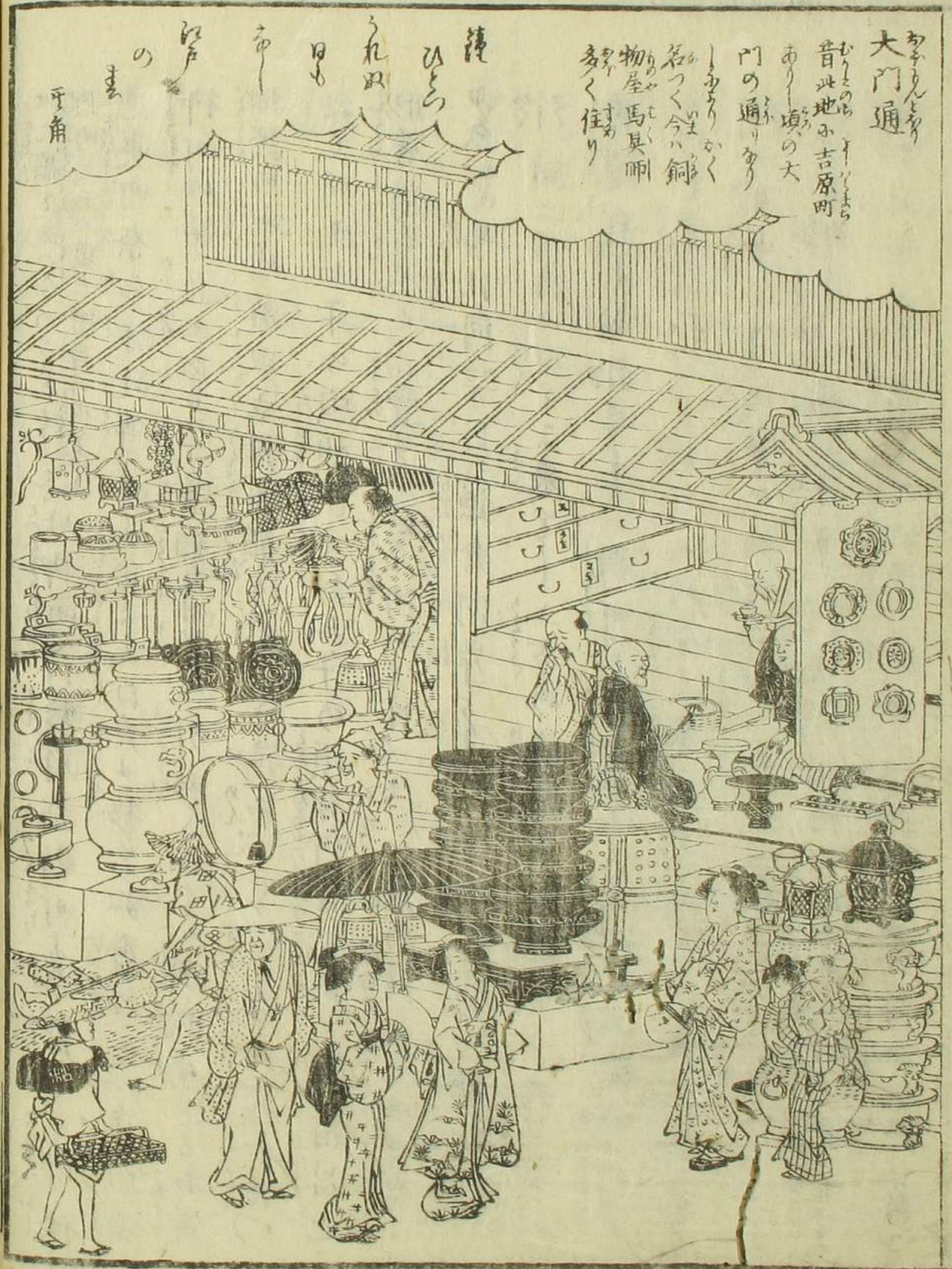
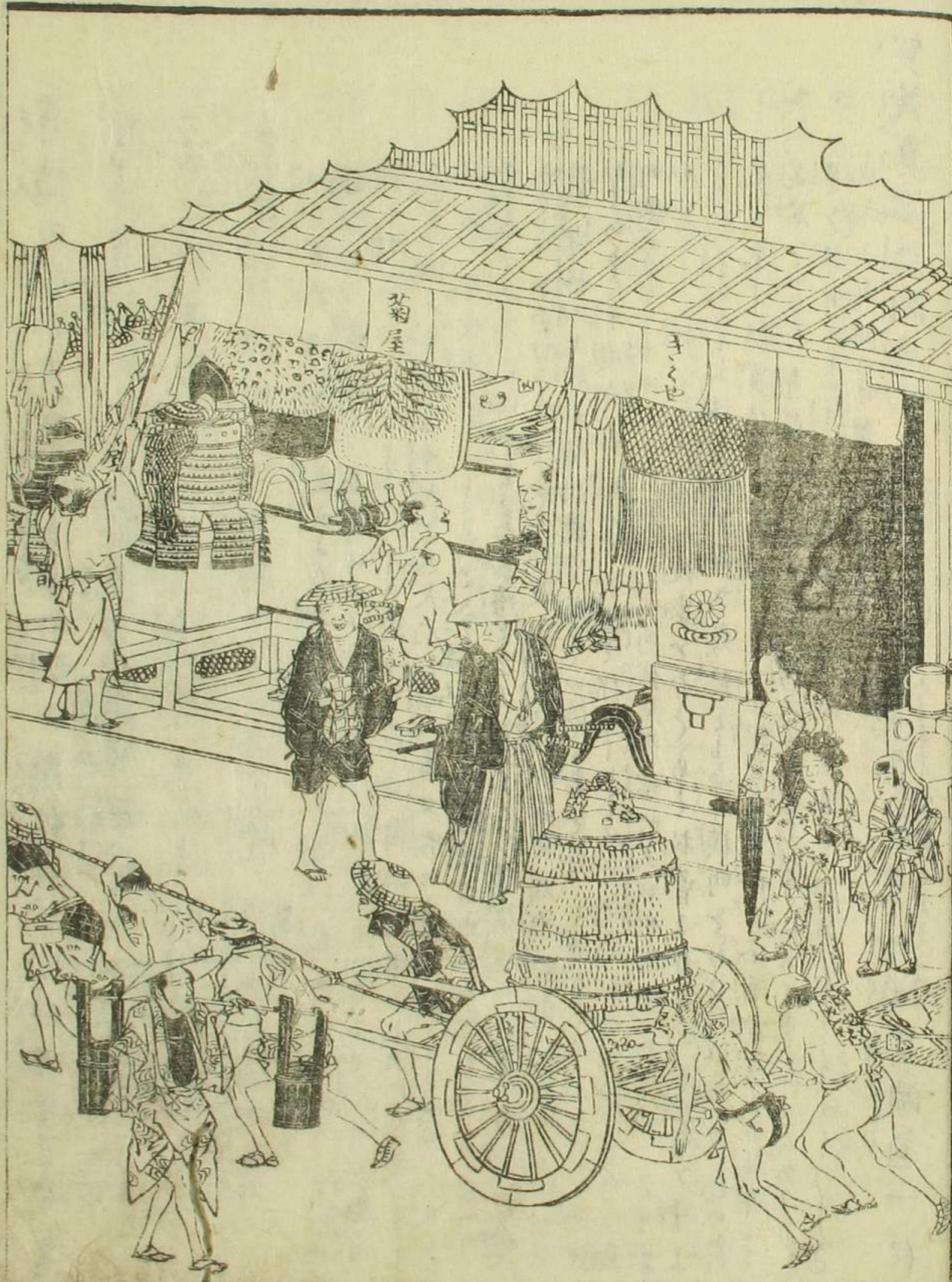
猿若狂言之古圖

木挽町五丁目汐入の地へ芝居を取建坂東又九郎といふ者の
二男又七といふを養子といふ名を森田勘弥と改む
同卷木挽町 其餘堺町菅屋町の間ニ操座木偶芝居ありて四時よ
の下の詳ニ 元禄御枝の江戸鹿子ニ堺町菅屋町の二丁ハ古より操見せ物又ハ狂
賑ハハリ 言及、あるひハ放下の品玉繩切の曲を業とせり 奇あり 終日
観開をある地あり又江戸名所ニ終日 江戸大薩摩 佐の太夫和泉美
浄瑠璃天満ハ太夫江戸孫四郎 江戸半太夫、説経鶴屋源太郎 南原ありあり
いふことをあせり

吉原町舊地

和泉町高砂町住吉町難波町等其舊地なり
俗稱なり此岸と電河岸と字するハ電屋多き故の 慶長十七年庄司甚右衛門
とのころ者街を一所ニ定めあり度旨 官府ニ訴へたりハ加小
初て此地を賜り花街とす 往時慶長の頃迄ハ江戸ニ定ま
たる傾城町もあく二軒三軒つこかこ散在せし其中心軒を
並へりハ麴町八丁目あり十四五軒あり何れも京六条より
迂る又鎌倉河岸より十四五軒大橋柳町も廿軒ありハ云

此大橋と云ハ今のところハ此柳町ハ駿府弥勒町より移り外伏
見夷町奈良木辻等より追々大江戸に移り慶長十一年の頃
柳町の地ハ召上り元誓願寺前へ引移り傾城屋とも打寄
相談の上場所取立度由願されとも御免なき和庄司甚右衛門
初て同十七年の頃願ひ元和三年の頃分付付元和三年霜月地
形普請出来て高賣せり江戸町一丁目ハ沙一統の後初て開基せり
ゆゑかく号け同二丁目ハ鎌倉河岸より引京町一丁目ハ麴町あり
引同二丁目ハ追々来り上方の傾城屋を置一兩年あて
普請悉く成就せりハ新町と名付り角町京橋角町あり
うの寛永三年に至り五町全く家居落成し此に移す
然も明暦二年浅草の凌今の地へ迂るんをヤリ
いふも 明年引移り度由の所翌年五月十八日の大火ニ焼亡す
依て同年六月悉く元吉原の地を引拂同年八月今の地へ移る



大門通

昔此地小吉原町
あり一頃の大
門の通りあり
名づく今銅
物屋馬具町
多く住り

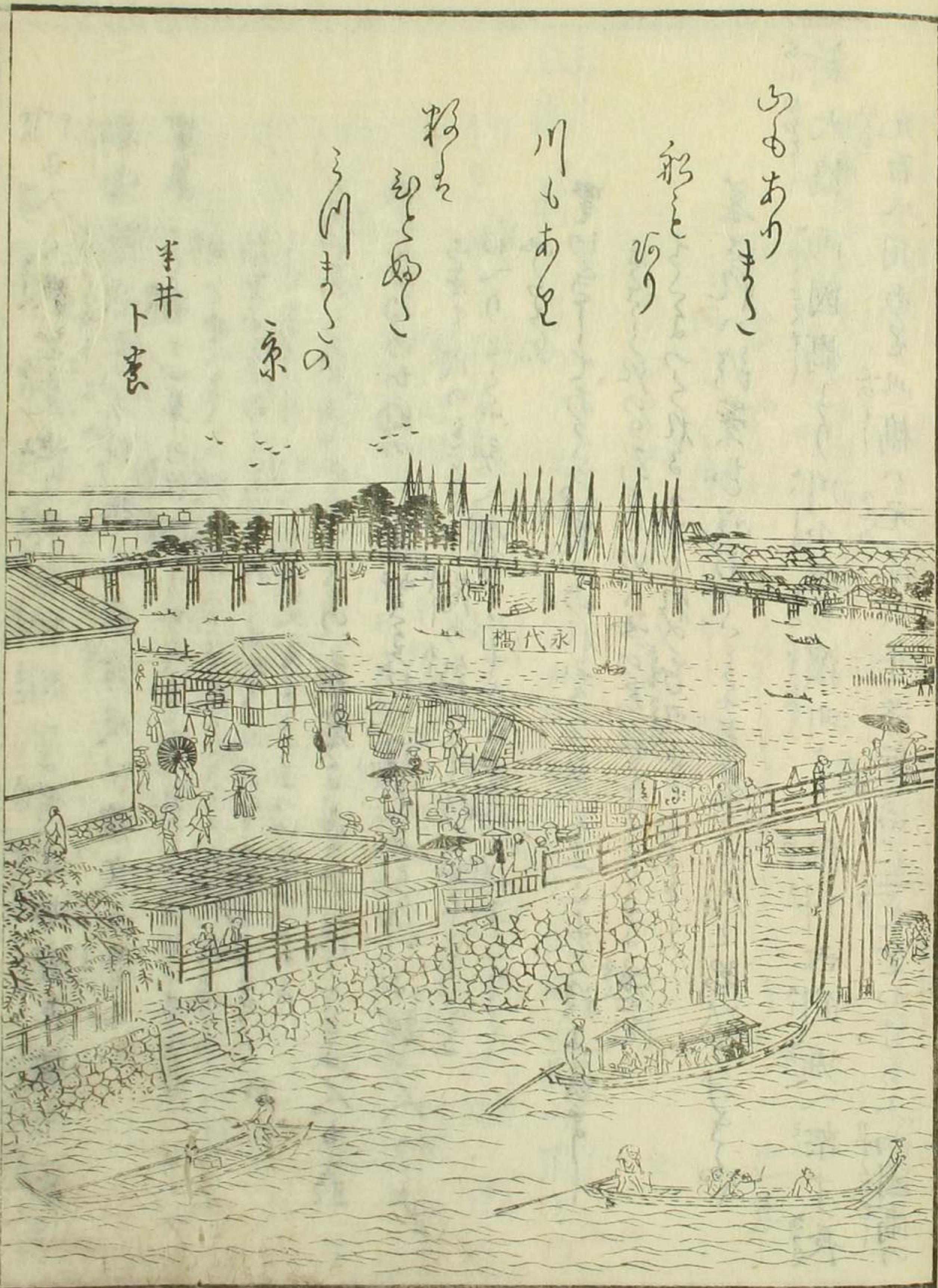
後
ひの
うれぬ
市
の
ま
牙角

普請の間今戸鳥越山谷の間は借宅のついで世をうくる花街今も舊地に在る六戲場相接一滋繁昌と極むる事と祝融の崇弥あるのうへ一あうう小彼地へ移されり
おほやけの御恵つと有難きものなり
條下詳なり

舞妓は其始遊女より出づる名小舞ひ舞の妓女なりといふ
畧語なり昔は高貴の人は愛せしむる故小舞ひは長門守丹後守
杯と呼ばれり今在言座元を大夫元と唱へ善女形の藝は長門守を大夫と
呼ぶやと余風ありと今大江戸の遊女は大夫の稱をうくる
寛永十八年の印本より佐渡島吉村山左近國本織部北野大夫出島
長門守杉山主殿米島丹後守和尙と稱せしむる又田を重ね此町繁昌
町割をわすれ本町は江戸町伏見町堺町大坂町墨田町新町と名付家
居美しく軒を高く草の夜家をおくめ板敷は作らるる又本町の中
臺を高く置ひて幾筋とも多く横町を記せり又江戸に名所記あり遊女等
芝居を禁せしむる後ハ若衆奇舞妓と云ふを興起ありとあり
以年小奇調の舞せしむるなり
寶曆十四年此地へうり住 真淵翁一に
家集よんてり

賀茂真淵翁居地 濱町

岡部衛士又ハ縣居とも稱せり賀茂縣主成助の末葉にして世々洛北
賀茂大神の宮司より同師朝の時文永十一年甲戌 遠州濱松庄
岡部郷なる賀茂の新宮を齋まつるき詔を蒙り又彼地を賜ふ
其宮の神主となり即岡部郷に住せり翁ハその後裔定臣といふ
子より元禄十一年丁丑彼地は生る壯より深く國朝の学に心裁
よせ享保十八年癸丑花洛小至り荷田宿祢春満の教を受け後
大子國学を以て世に鳴り荷田宿祢ハ本姓なり世に羽倉齋宮 寛延三年
庚午大江戸小来り田安の殿の召し應へ古への書の道の博士とい
特よ愛させあひす頃浄衣を賜りハ其かゝるありハ和奇を好む
あひひくあひあひあひと氏人のかつらむひめのと神ありん
其後宝曆十年庚辰仕をかへり濱町に隱栖を翁を縣居
と唱ふも庭を田居の様よ作らるる賀茂氏の姓も縁あり
とてうづう家の号ふ呼れしとて生涯の著述凡六十餘部其



半井
下巻

原

川

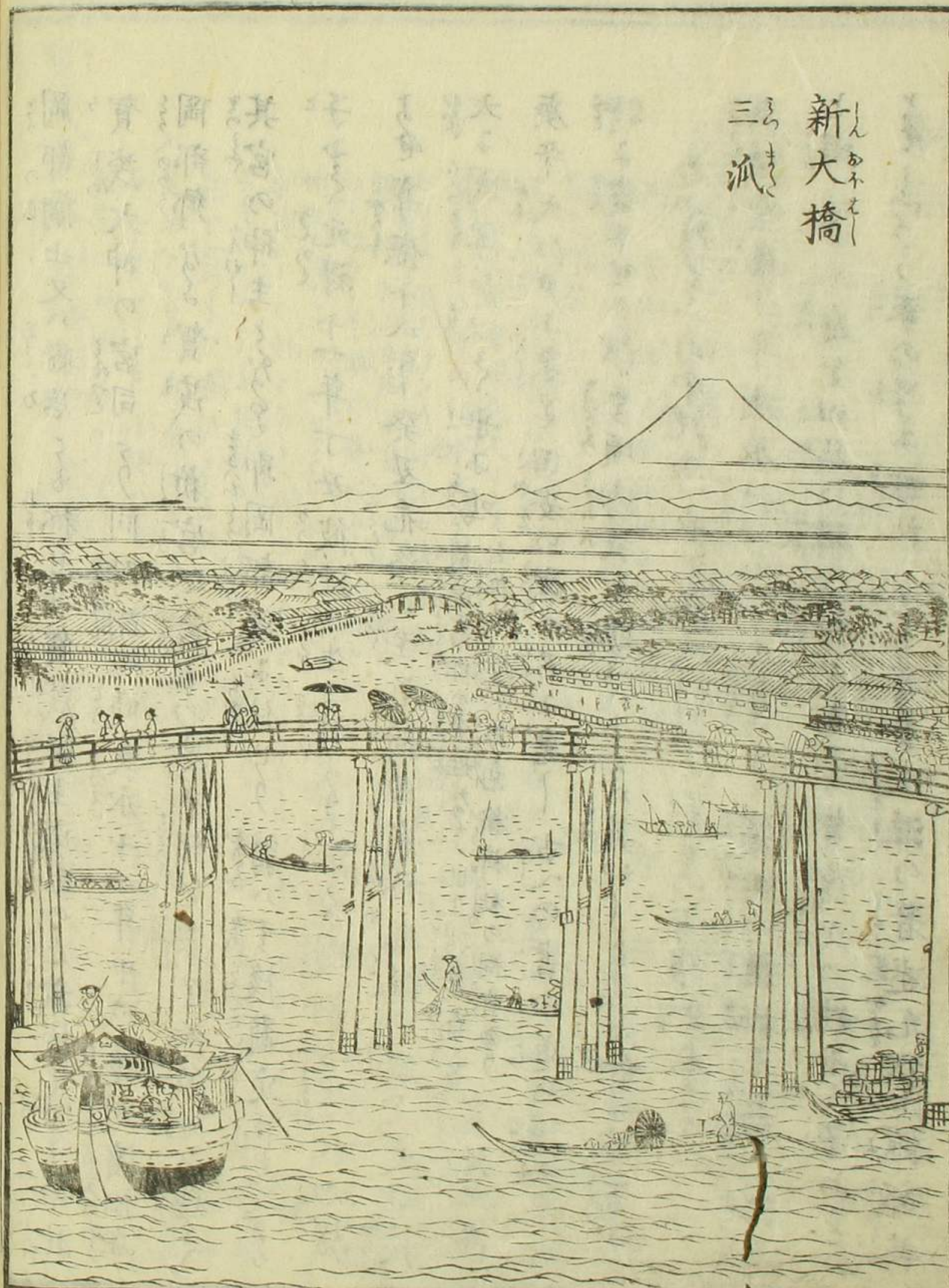
舟

川

舟

舟

橋代永



新大橋
三派

山ありき
舟ありき
川ありき
舟ありき
川ありき
舟ありき
川ありき
舟ありき
川ありき
舟ありき

門は入る教を受世は其名を聞ゆる者本居宣長橋千蔭平
春海藤原宇万伎撰取魚彦及び倭文女等之
家集はる橋十四年の秋濱まちとりのあそびをうけし
庭とせまきハ畑はほりてむもさうかへなむと
名をあつてぬひひてほりてむもさうかへなむと
とてあつてぬひひてほりてむもさうかへなむと

こほろをせしめやあつてのあそびは月をよる都人うも
あつてぬひひてほりてむもさうかへなむと
あつてぬひひてほりてむもさうかへなむと
あつてぬひひてほりてむもさうかへなむと

聖のきつてあつてぬひひてほりてむもさうかへなむと
あつてぬひひてほりてむもさうかへなむと
あつてぬひひてほりてむもさうかへなむと
あつてぬひひてほりてむもさうかへなむと

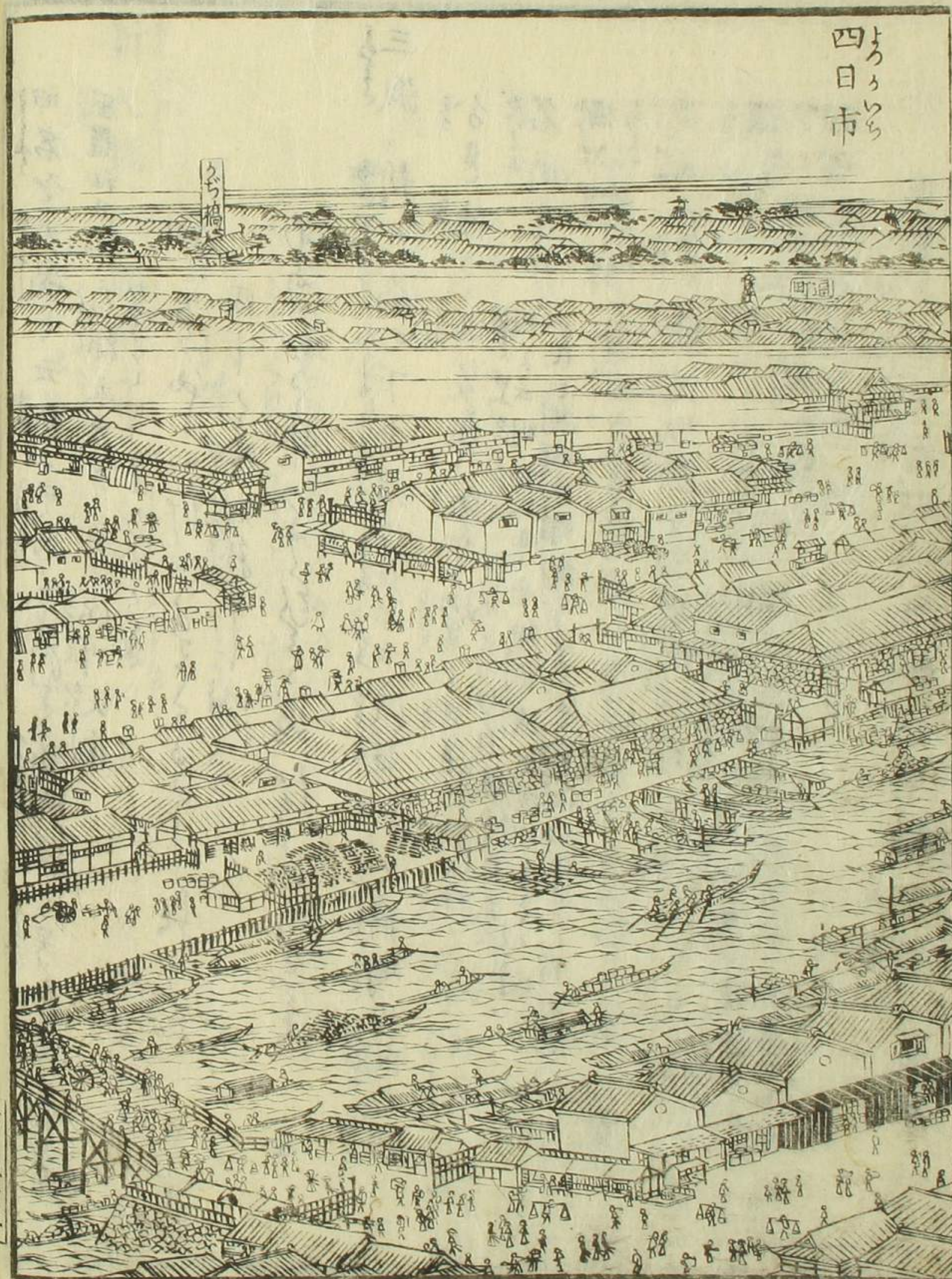
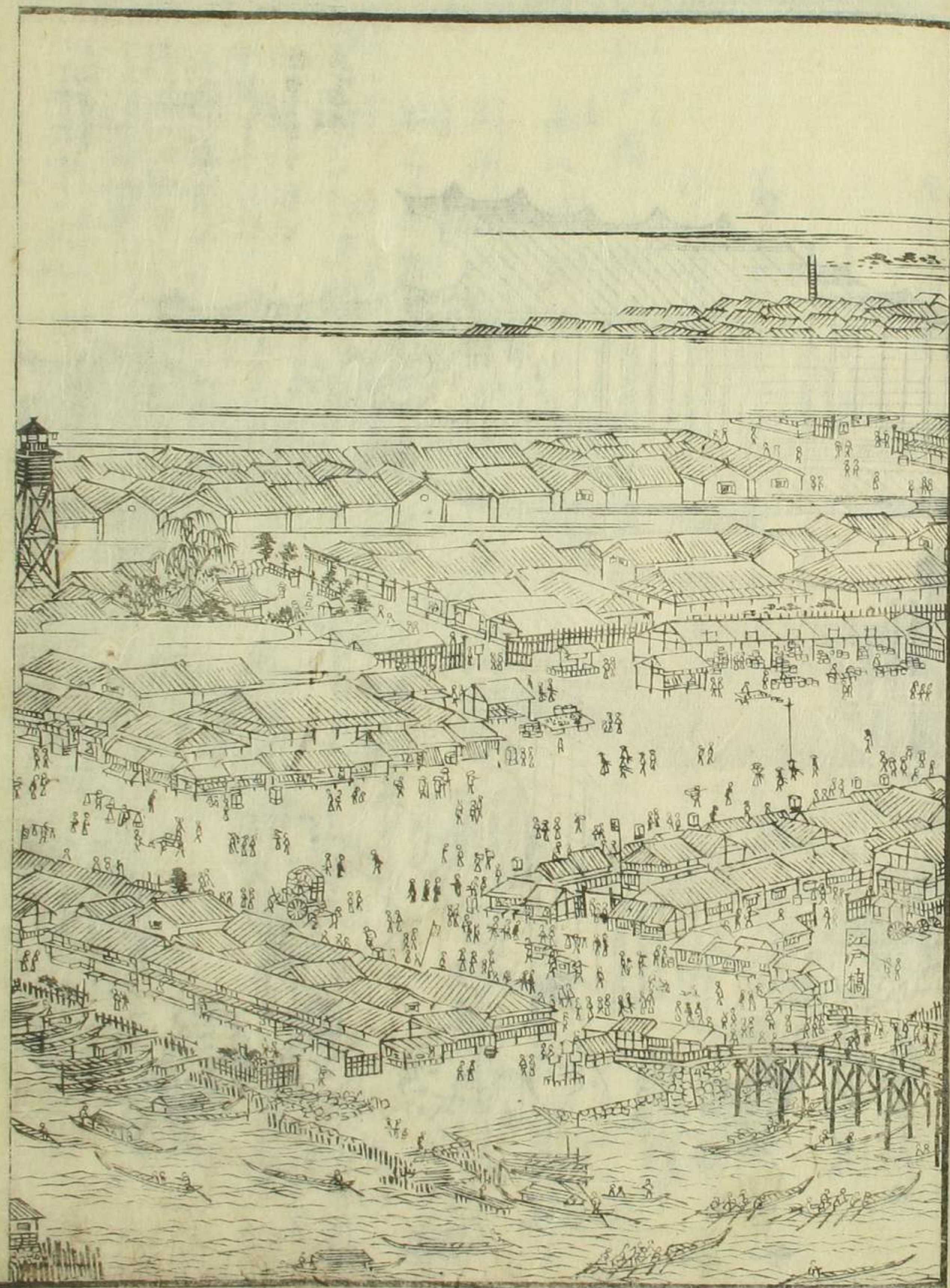
新大橋 兩國橋より川下の方濱町より深川六間堀へ架す長
九百八間あり此橋ハ元祿六年癸酉始て是をわけあふ兩國橋の

旧名を大橋と云故に其名よも川に新大橋と号らるなり
風羅袖日記 元祿五年申年の事深川大橋

初せやかかけりらるるさるるさるる
同く橋成せし時
あつてぬひひてほりてむもさうかへなむと

三派 新大橋の下分流の玉を云浅草川と箱崎の間の流との
分り流るるわたりあり
名所なり 因に云明和八年辛卯中流を埋りて人居とし中洲と称せり
堀立昔ハ多く遊女奇舞妓の類ひるふ船をうくく宴を催し殊
更月の夕ハ清光の隈なを説ひ酒は對して奇諷ひかんと
甚賑かりしとなり
風吹のさうら声の葉の
笛吹たりと云く

三叉江舟 輕舟汎々醉中過 天遊只
風静又江不起波



三河万葉江元
下りて毎集極月
末の夜日本橋乃
南流ふ集りて
花をえりて
抱ゆあり是と
文彦市といふ



在人間外 長嘯高吟雜掉歌

人々よとよみかひしきく八月の十六夜三洲ふたを
うきうきと遊ばせりしは流し入る集りて
年十六なりといふ

あききく二八の十六夜月とてまこわさるのてをい ト養

いもありのやうにあり川も河を扱ひて海へつるもた糸 全

江戸橋

日本橋の東よりありて伊勢町より本材木町へ移間架は

南の橋詰巽の角は船宿あり江戸の内諸方への船場あり又

同所西の方木更津河岸と字を房州木更津渡海往還の

船々小集りあふとす

四日市

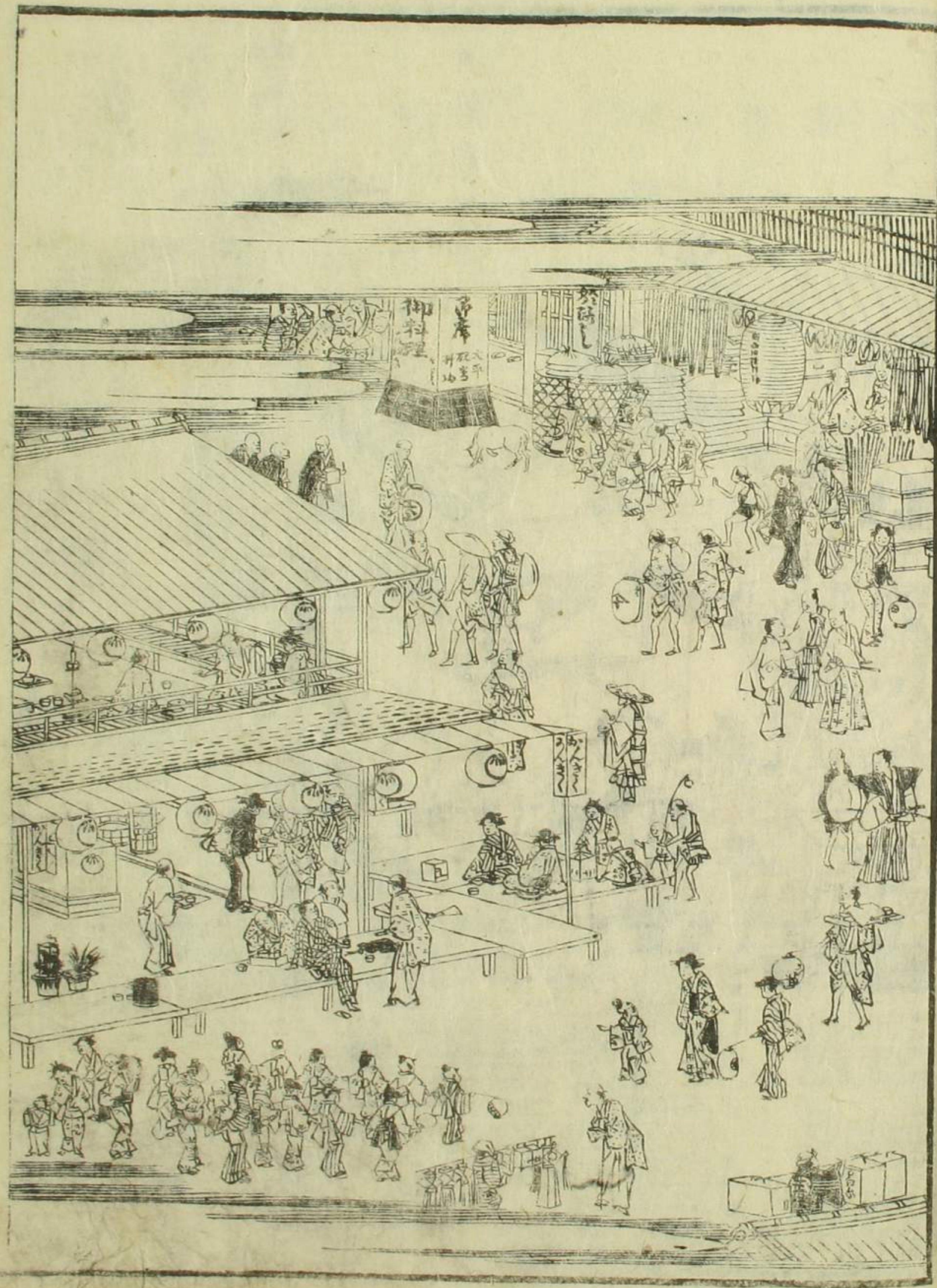
江戸橋と日本橋の間川より南の方の大路を云昔ハ四日市

場とのひ村ありて今ハ今の繁華のめをとりなされハ萬の賈

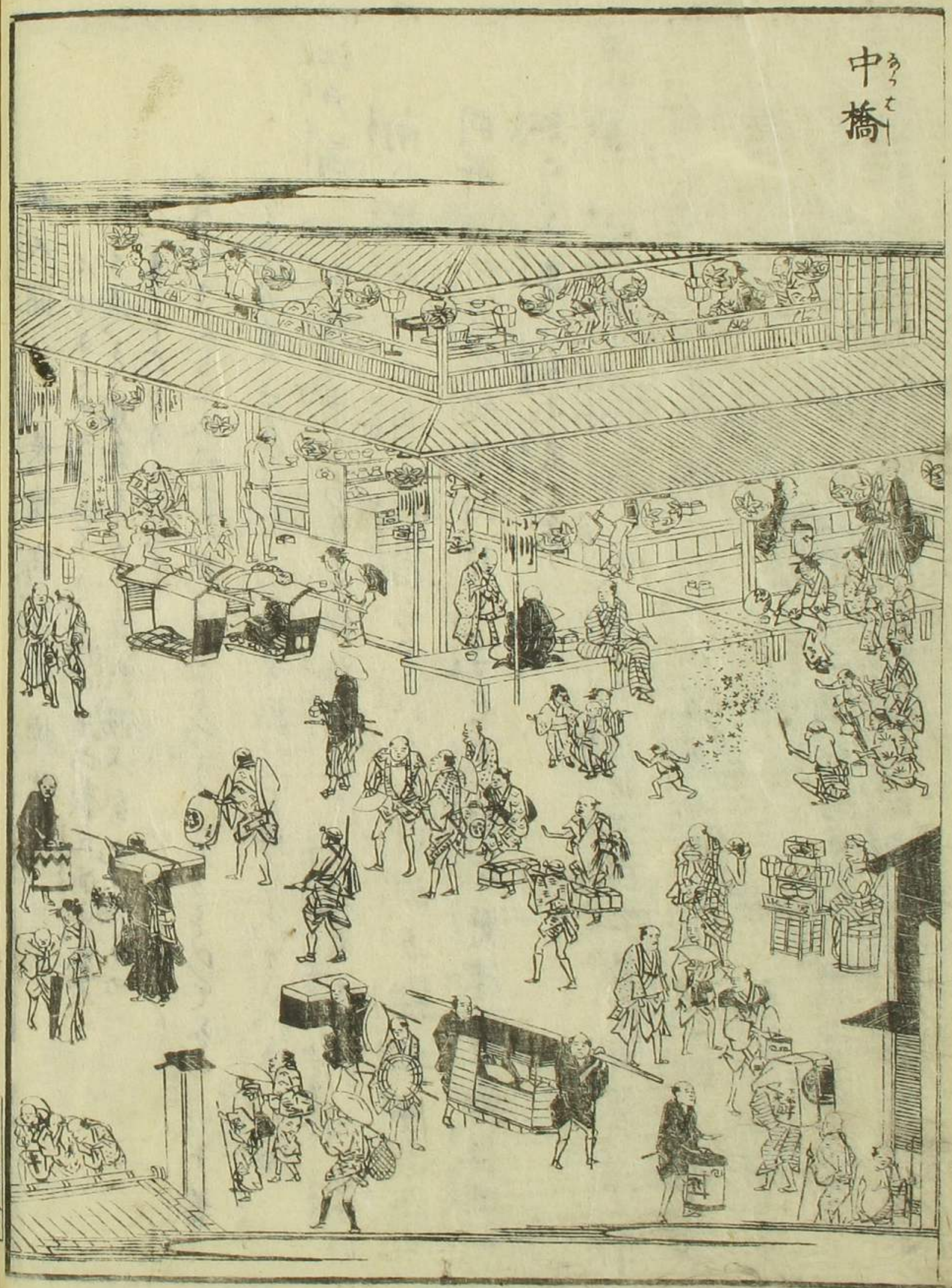
街も市をなす交易せされハ得くくハ於ハ西に吾日市を

立る區を名つけ某日市と云羽州のありてハ二日市と云より

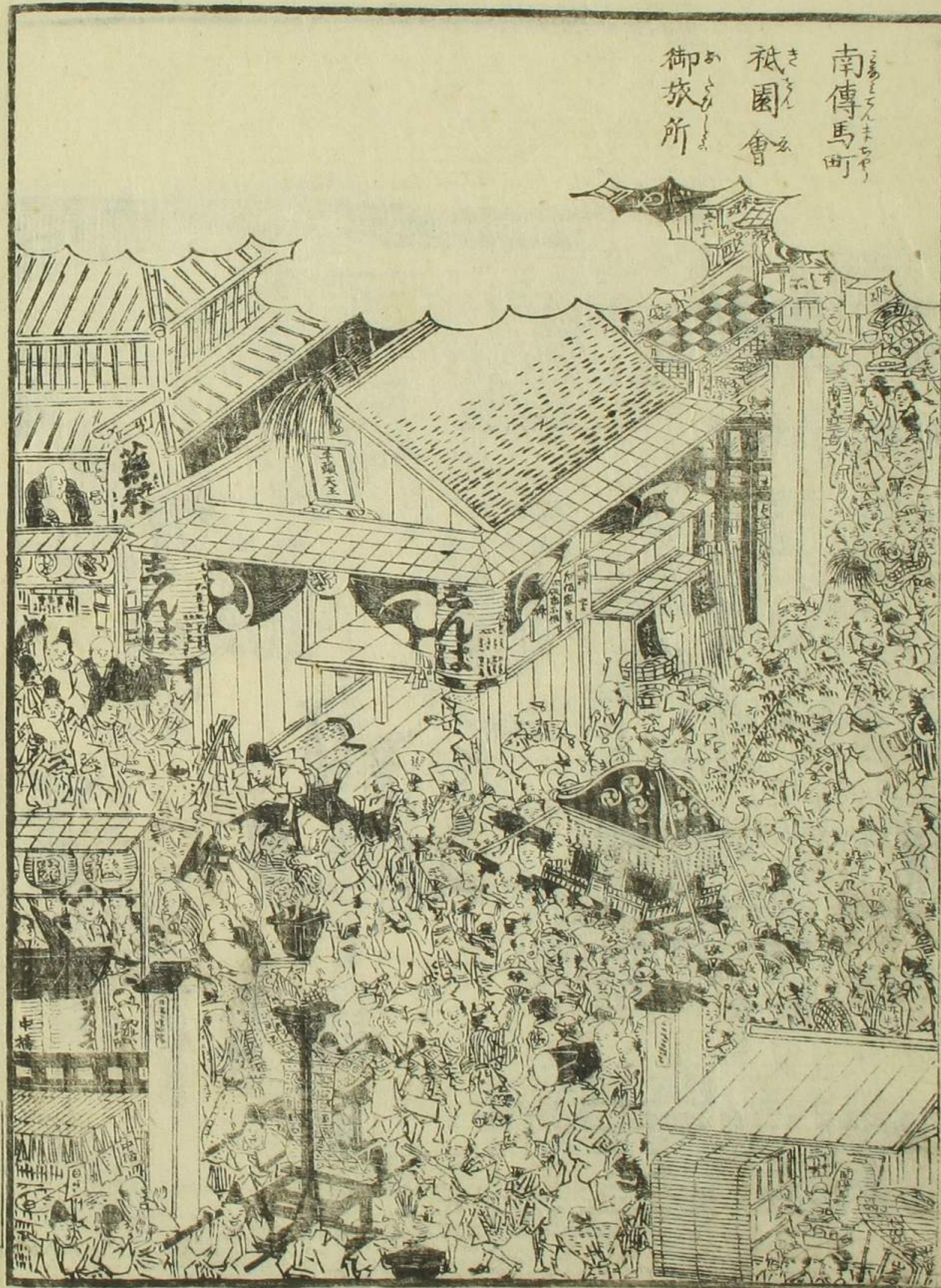
十日市と云迄區の名小はつき交易せり此地も昔ハ毎月四の日ハ



中橋



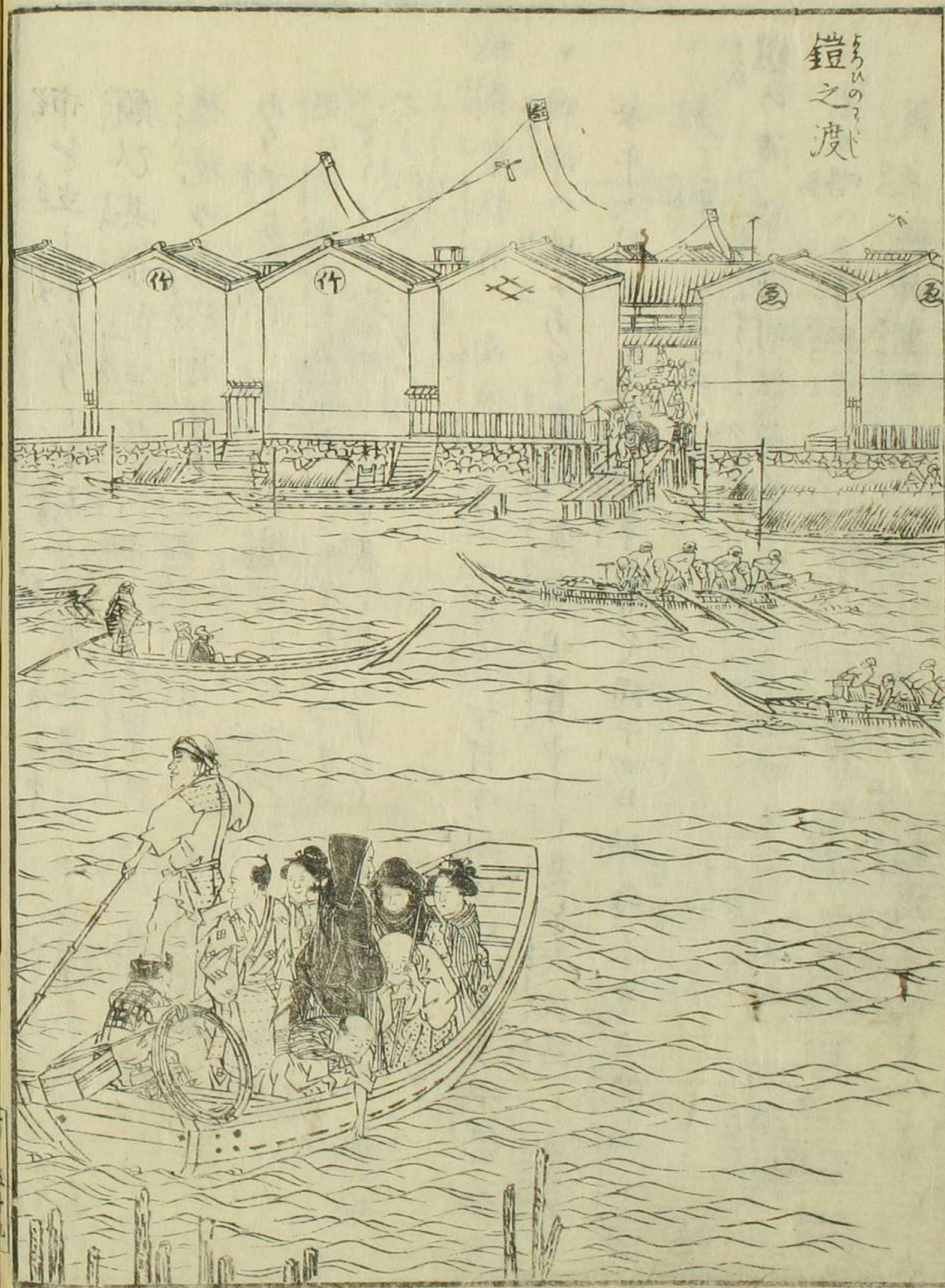
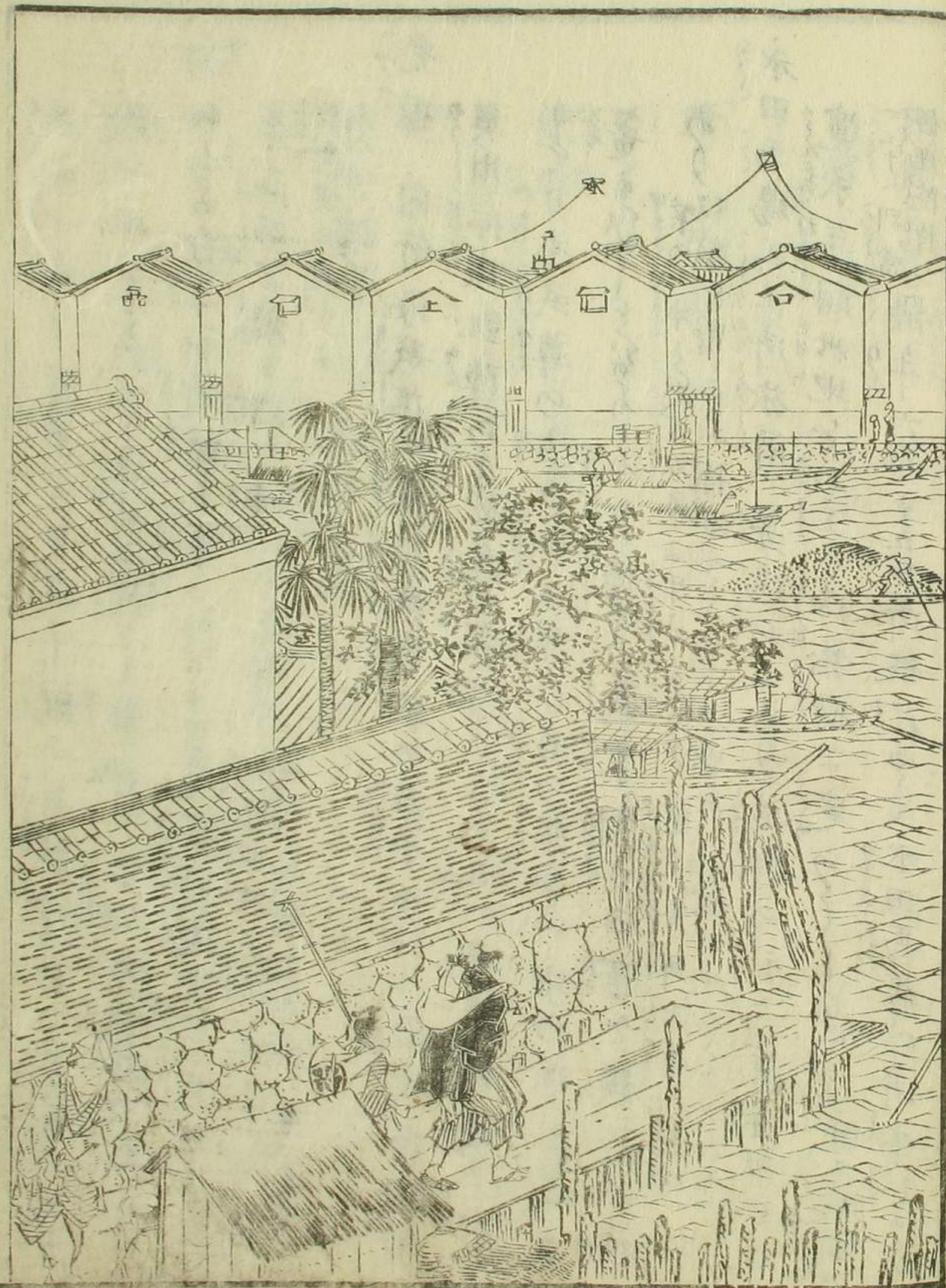
南傳馬町
祇園會
御旅所



市を立たてたりとそあらふ今も其遺風も草物又ハ野菜の
類ひ其余乾魚などの市ありて繁昌の地なり此地に根津
権現の涉旅所あり正徳年中小造同所河岸ハ傍ク封疆蔵
あり下より石を以て畳揚上小家根を覆ふ明曆間板のむきしあら
橋の南萬町より四日市迄の間屋を取除け高さ四間ハ川端ハ日本
北より東西二町半ハ土倉蔵を置あけらと云々今熟岸島ハ四日市と
とる所家ありて此所

祇園會旅所 南傳馬町一丁目と二丁目の間の辻あり本社ハ神田
明神の地ハありて祭所素盞鳴尊中て是を大政所と称せり
毎年六月七日と々ハ神幸ありて同十四日帰興ハなる其間奉詣多
く甚あらふといへる也

鏡の渡茅場町牧野家の後を云此所より小網町への舟渡を
あら唱へり往古ハ大江なりしとなる里諺ハ云永業年間源
義家朝臣奥州征伐の時此所より下徳國ハ渡らんとす時子



暴風吹發して連浪天を浸し既小其船覆らんとも義家朝臣
鎧一領をとり海中に投し龍神は手向く風波の難なる
りしめむを祈請を遂ふはくなく下徳國小着岸ありし
あり此取を鎧と淵と呼へりとなり
元禄開校の江戸鹿子小平持門
此取を魁鎧を置壘ハ塚は築く

兜塚 同所海賊橋の東詰牧野家の庭中あり源義家朝臣

奥州征伐凱陣のとき先報賽のとき且ハ東夷鎮護の爲と

して日本武尊の古き例に準ひ自の兜を一堆の塚に築き

簞をひしとなり今其傍に義家朝臣の靈を鎮付小祠

あり紫の一本とる双糸は甲山とあり藤原秀郷平持門を討

永田馬場山王御旅所 茅場町あり遙拜の社二字並ひ建

寛永年間此地を山王の御旅所と定りしとあり一宇ハ神主
樹下氏持

一宇ハ別當 隔年六月十五日御祭礼あり永田馬場の御本社より

神輿三基此所は神幸あり假し神殿を儲け供御を献備し

別當ハ法樂を捧げ神主を奉幣の式を修ひ夜小入り帰輿

より其行装神大幣菅蓋錦蓋雲のゆく社司社僧ハ騎馬よ

跨り或ハ輿小乗し前後は扈後を諸侯よりハ神馬長柄鎗

をもと出されし途中の供奉嚴重なり又氏子の町よりハ思ひく

練物ありしハ花屋臺車樂等ハ錦爛純子杯のまん幕を打

ち各々出立花やうハ羅袴の袂錦繡の商をむらへり粧ひ

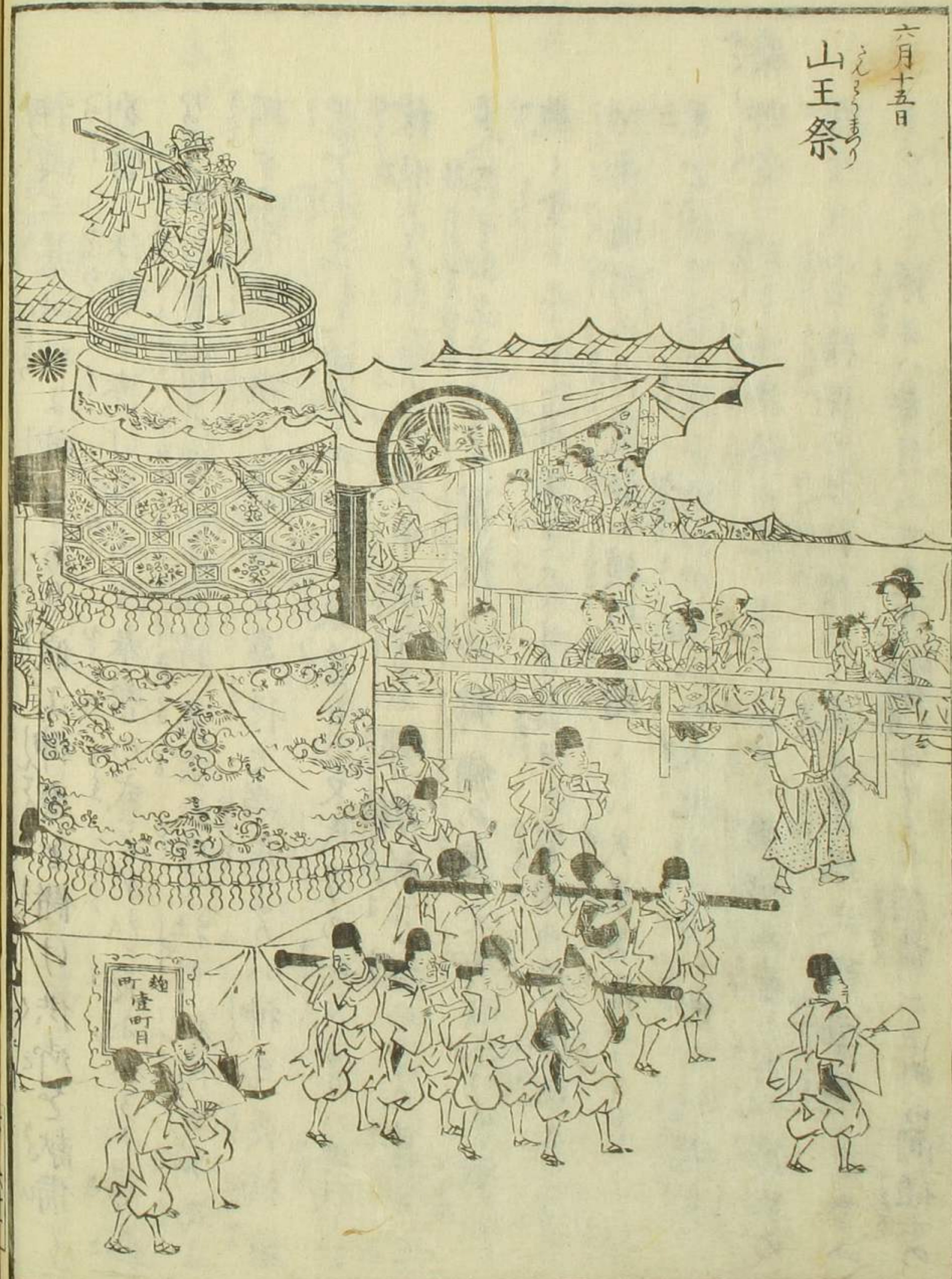
蕪々堂として善美を尽せり此日 官府の御沙汰として

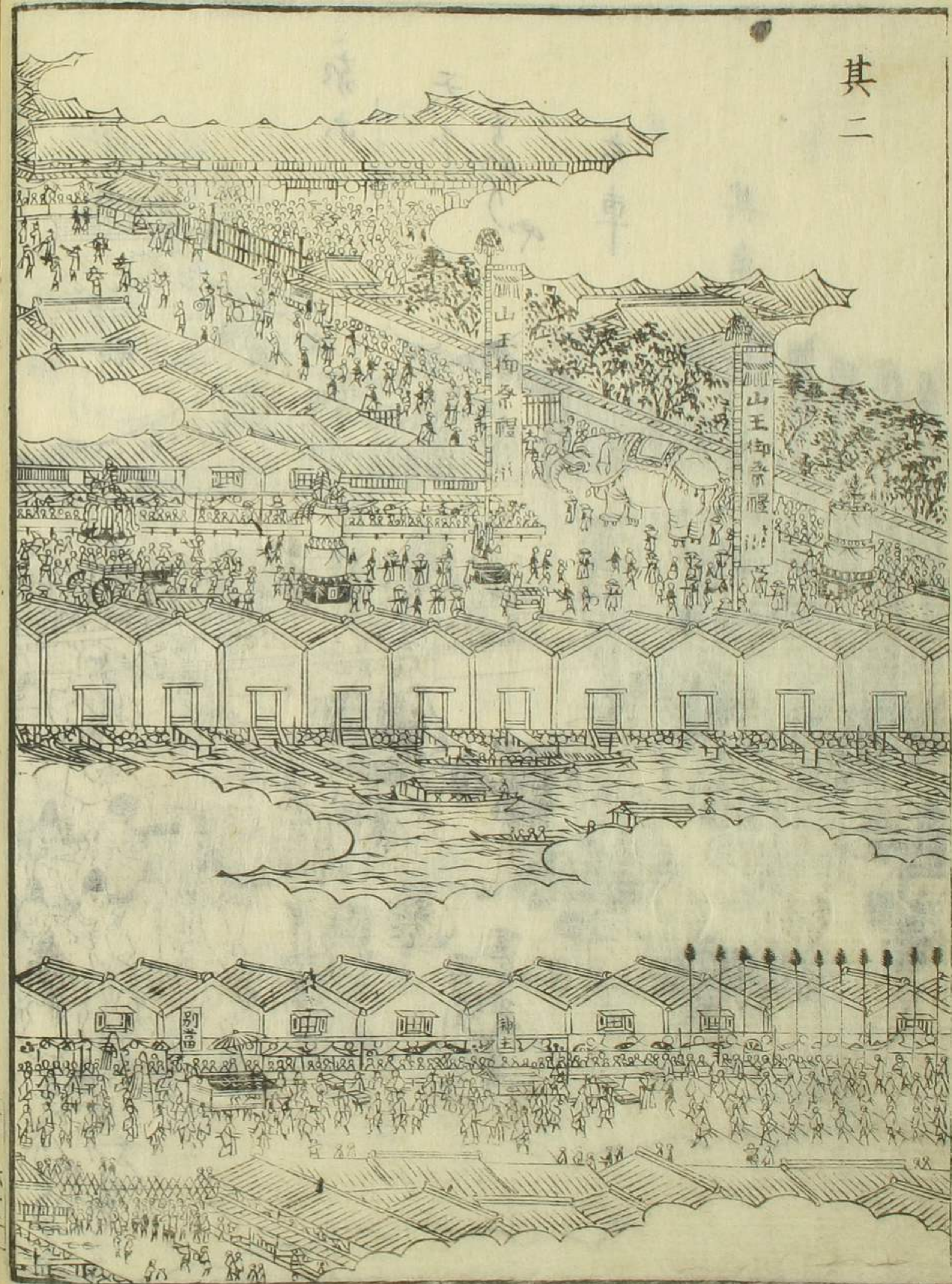
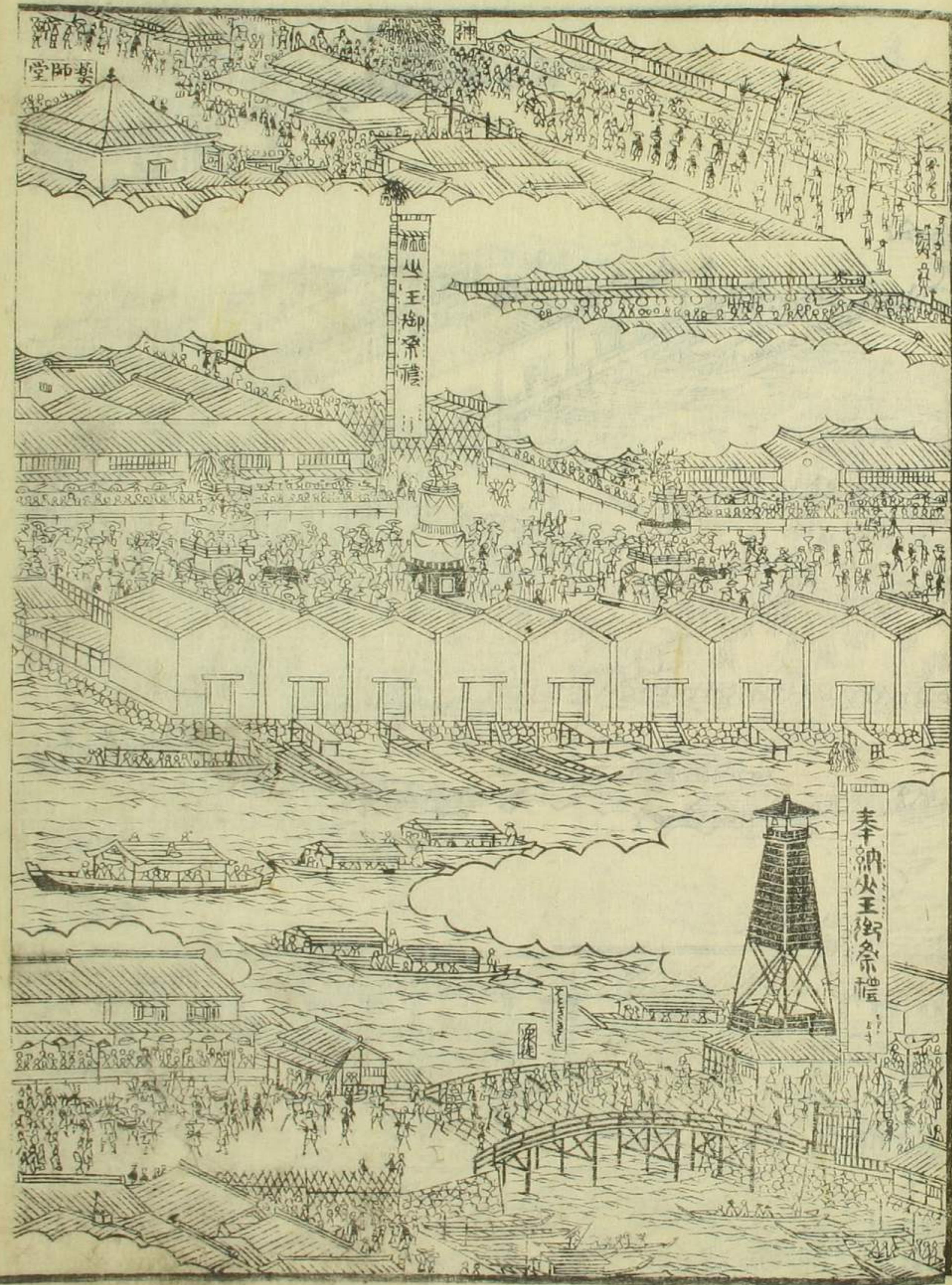
神輿通行の御道筋ハ横の小路にハ矢来を結りしを往

薬師堂 同く御旅所の地あり本寺薬師必来ハ恵心僧都の

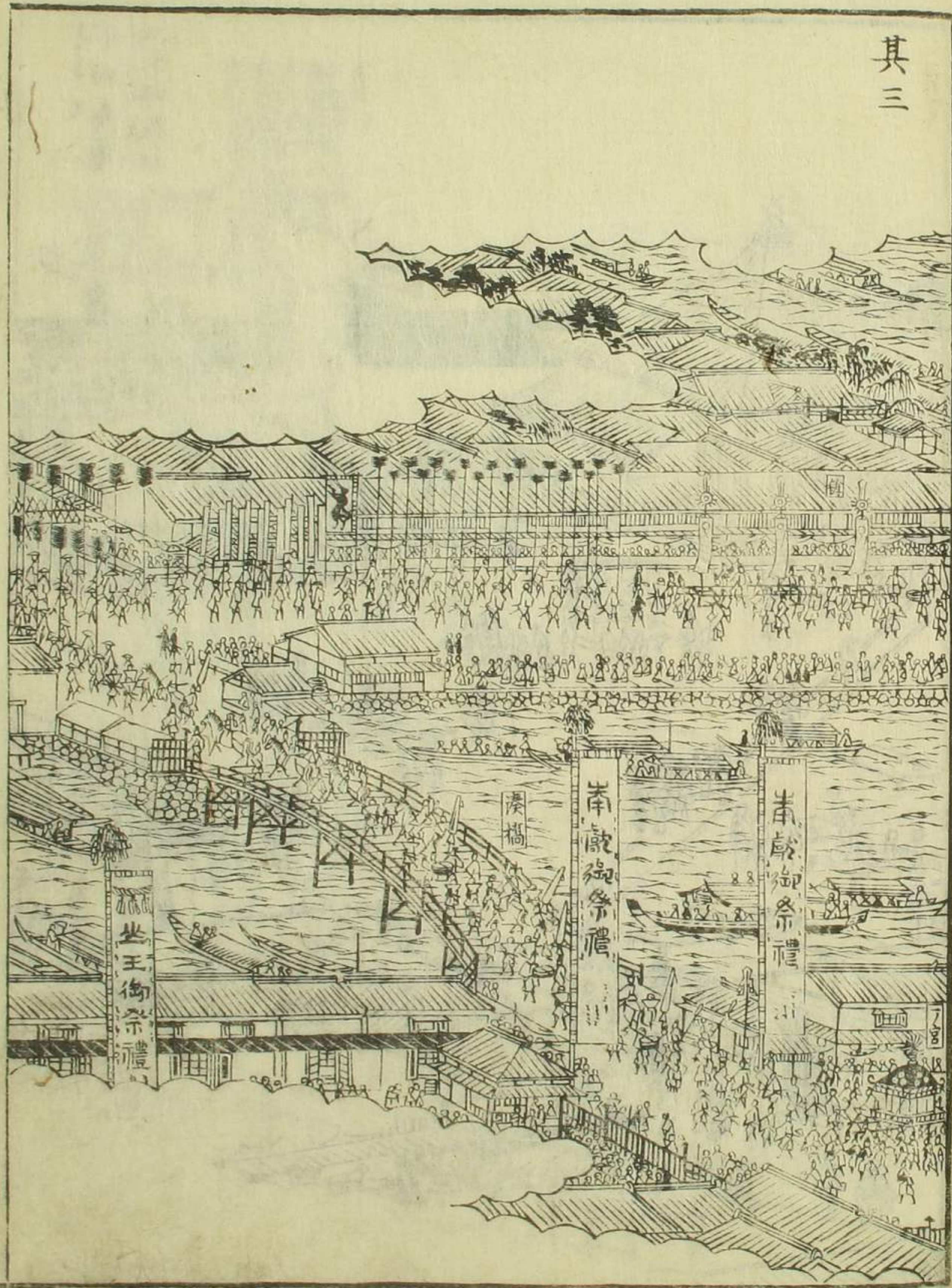
作なり山王権現の本地佛と云ふ慈眼大師勸請あり

と云ふ縁日ハ毎月八日十日正五九月廿
ハ能備あり 門前三三町の間植木の

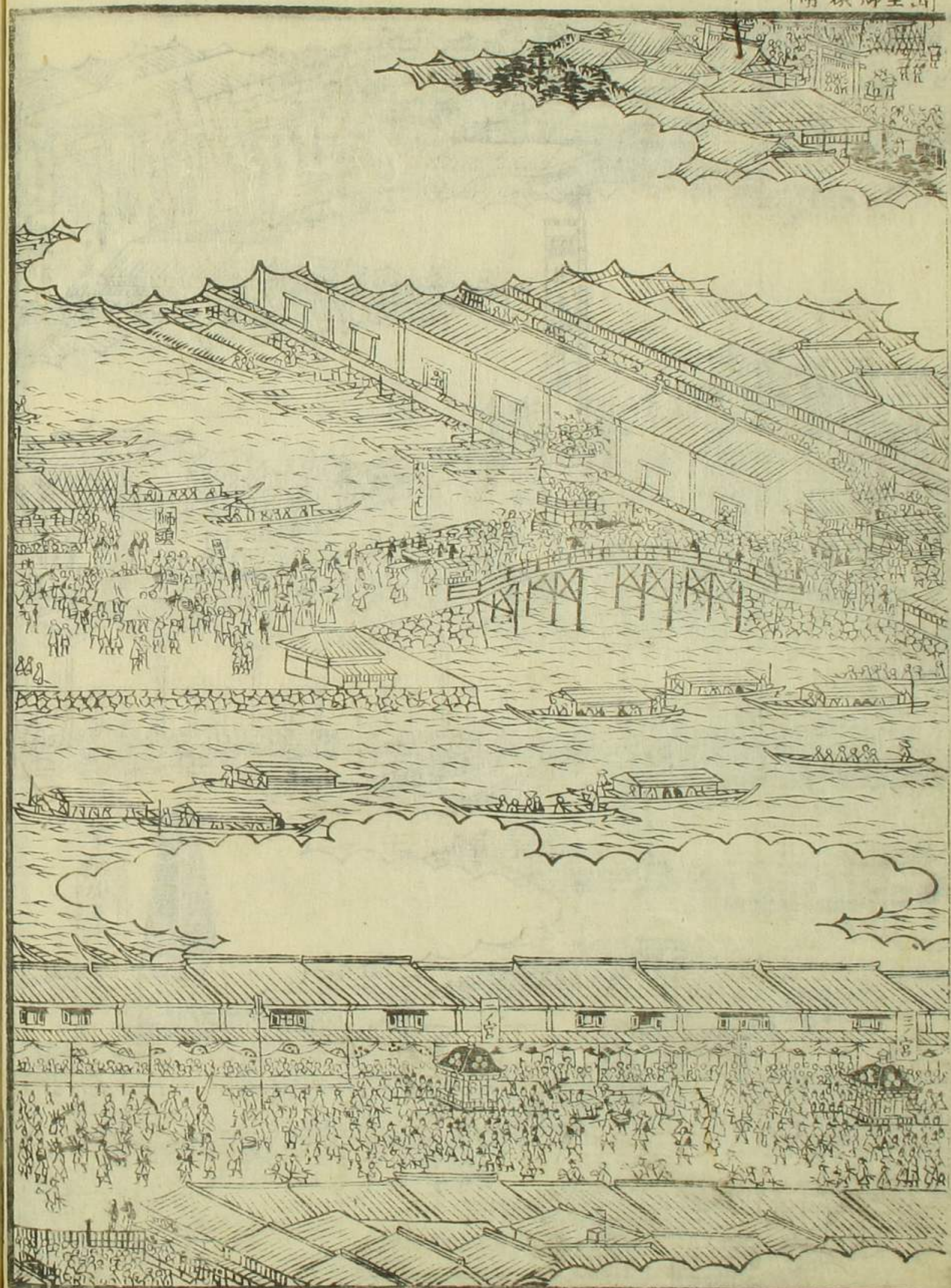


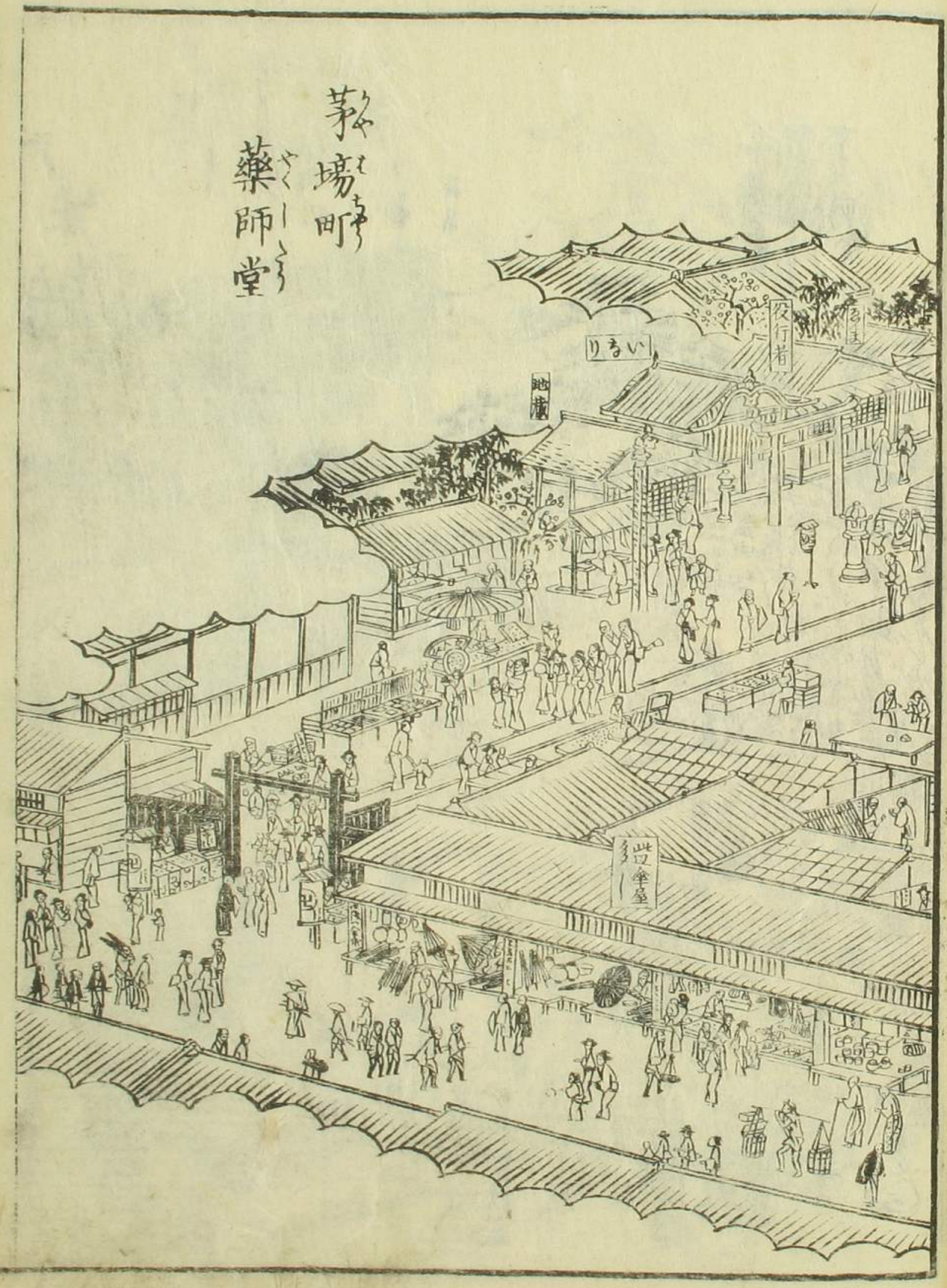


其三

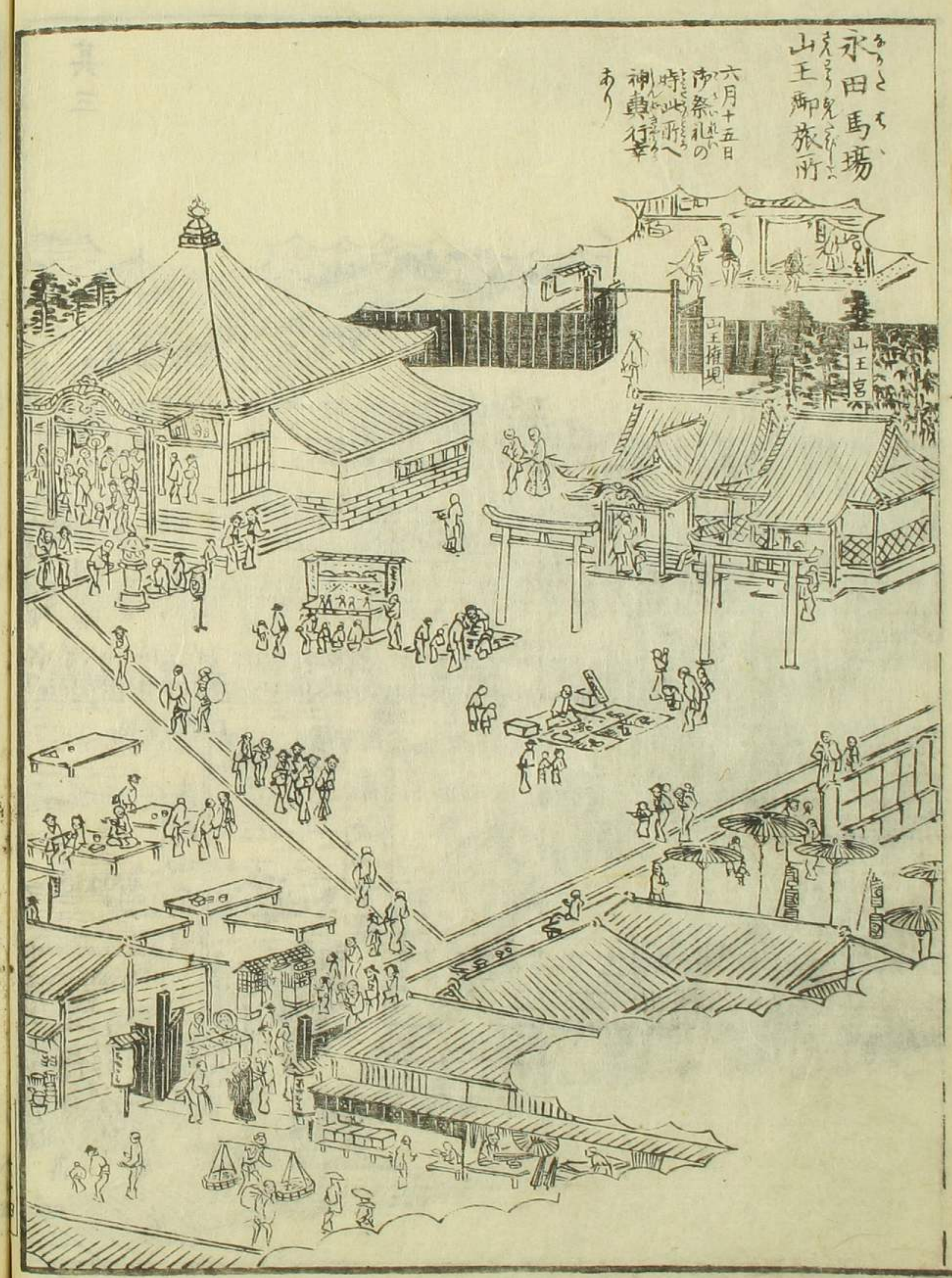


山王御祭所

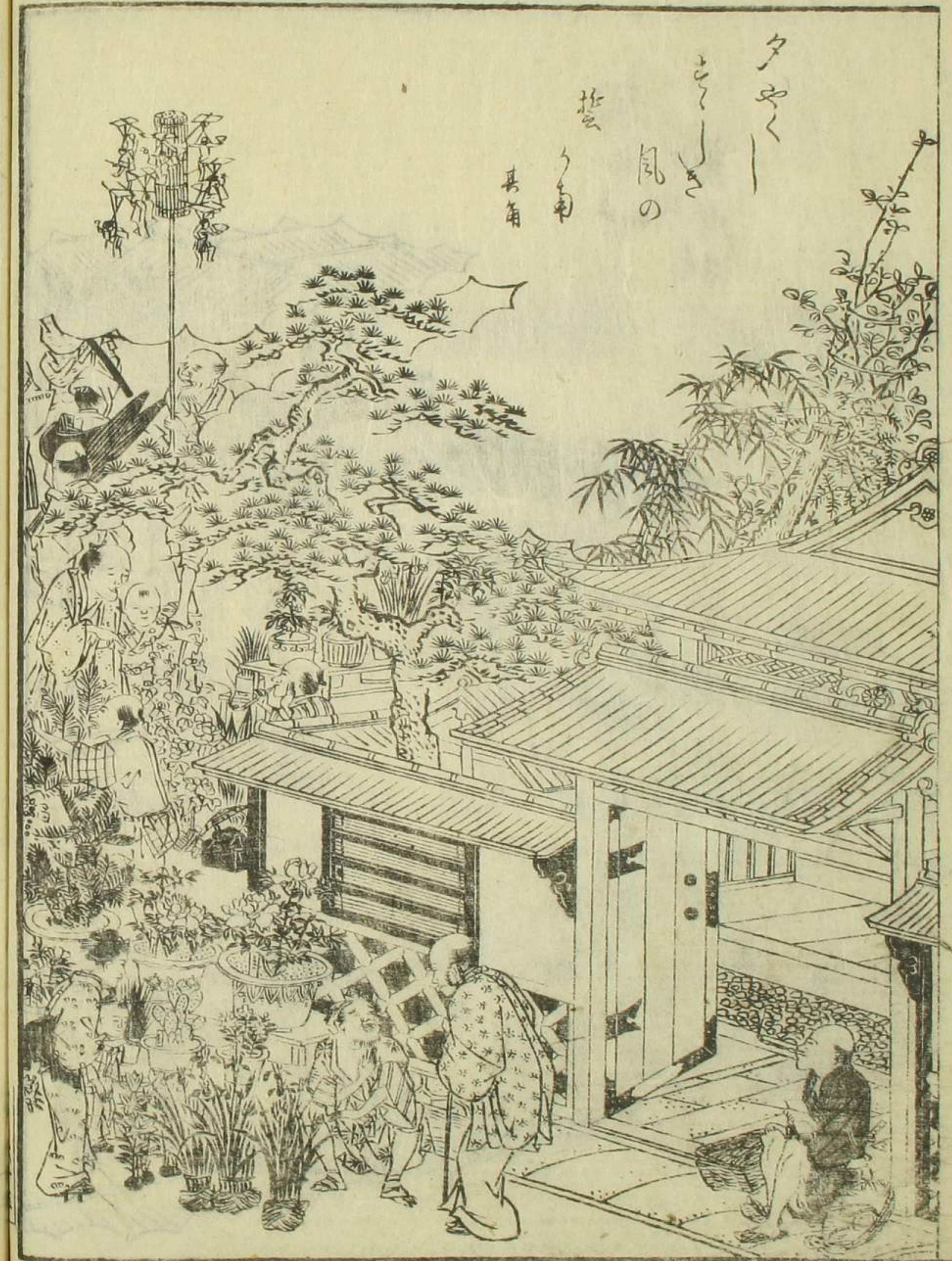




薬師堂
 薬場町



六月十五日
 山王御旅所
 永田馬場
 山王御旅所



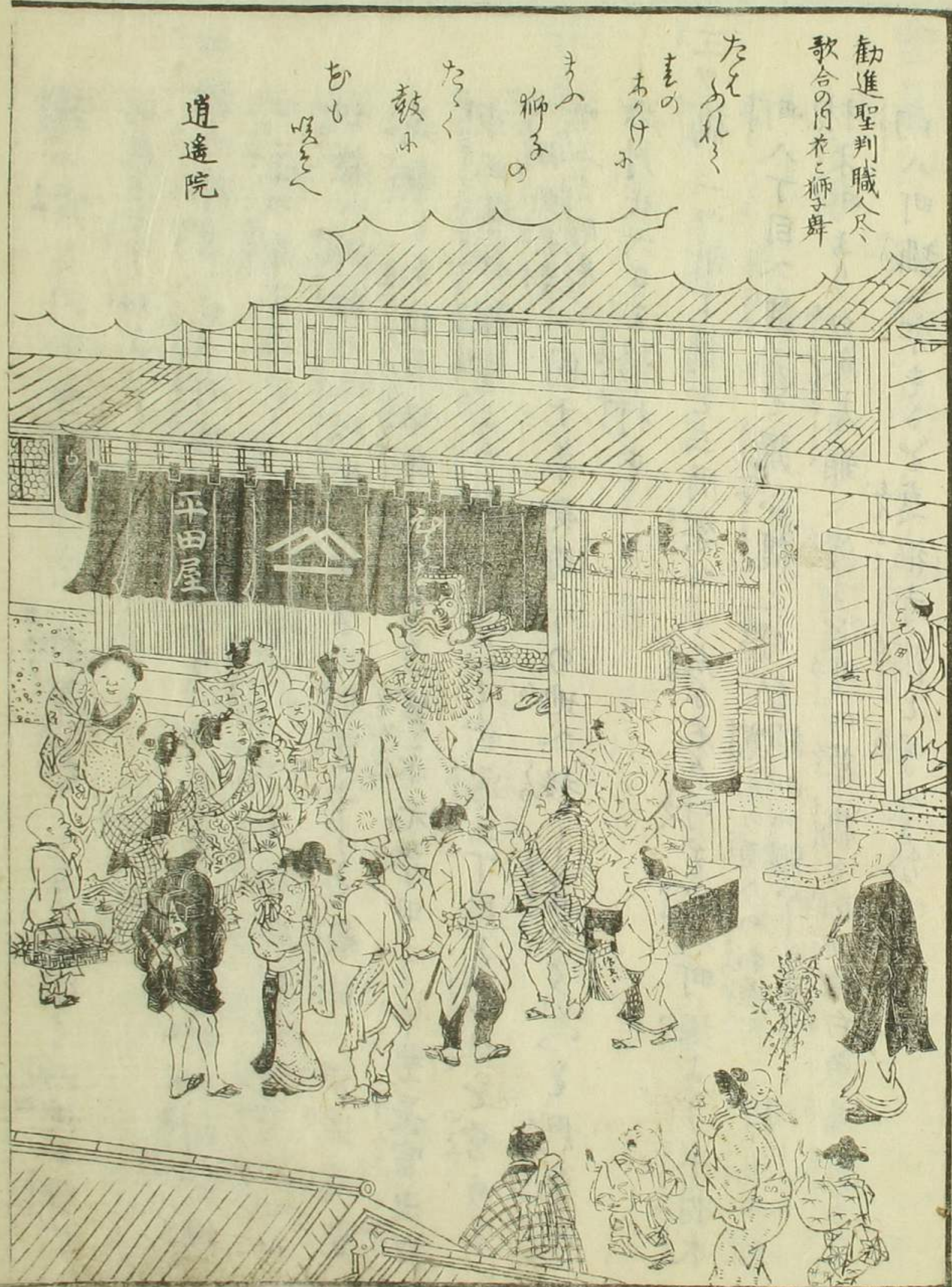
市立を別當ハ醫王山智泉院と号す
惠心僧都ハ其父母大和國高尾寺の某師佛子禱す
所の靈見なり僧都佛門に入る後法恩を謝せん
為自ら此本
所を彫刻あり高尾寺に安置せし後相州大場
村に遷しあり然る慈眼大師東叡山より
大城の東に位しある山王比本地佛よりあり安置
す

天満宮 同境内より社司諸井氏奉祀也
二月八月共北五日
幅中々寛永年間神宮奉仕の春日局大樹より拜受せしれ
神主日吉右京進八附あり後諸井氏請得る小勸請あり
類柑子 北の窓

我栖北隣に芦荻茂く生く安阿なる地あり茅場町
名不ぬれ昔ハ海をたりしと今ハ某師佛よりあり
の至極現の伊極和と定め某師佛よりあり堂の

たほほのふ繪ふかきとんや
深き引人よりあられハ夢の心徳よきのしあり
色つとくはるる風ふつけし虫の鳴きまをさ
な〜〜〜にほふか〜〜〜に
窓ふ〜〜〜に中畧〜〜〜
川〜〜〜す布は美さふ這〜〜〜
か〜〜〜娘の口つと〜〜〜あるあつ〜〜〜
と〜〜〜あや〜〜〜さ〜〜〜
毎〜〜〜下畧

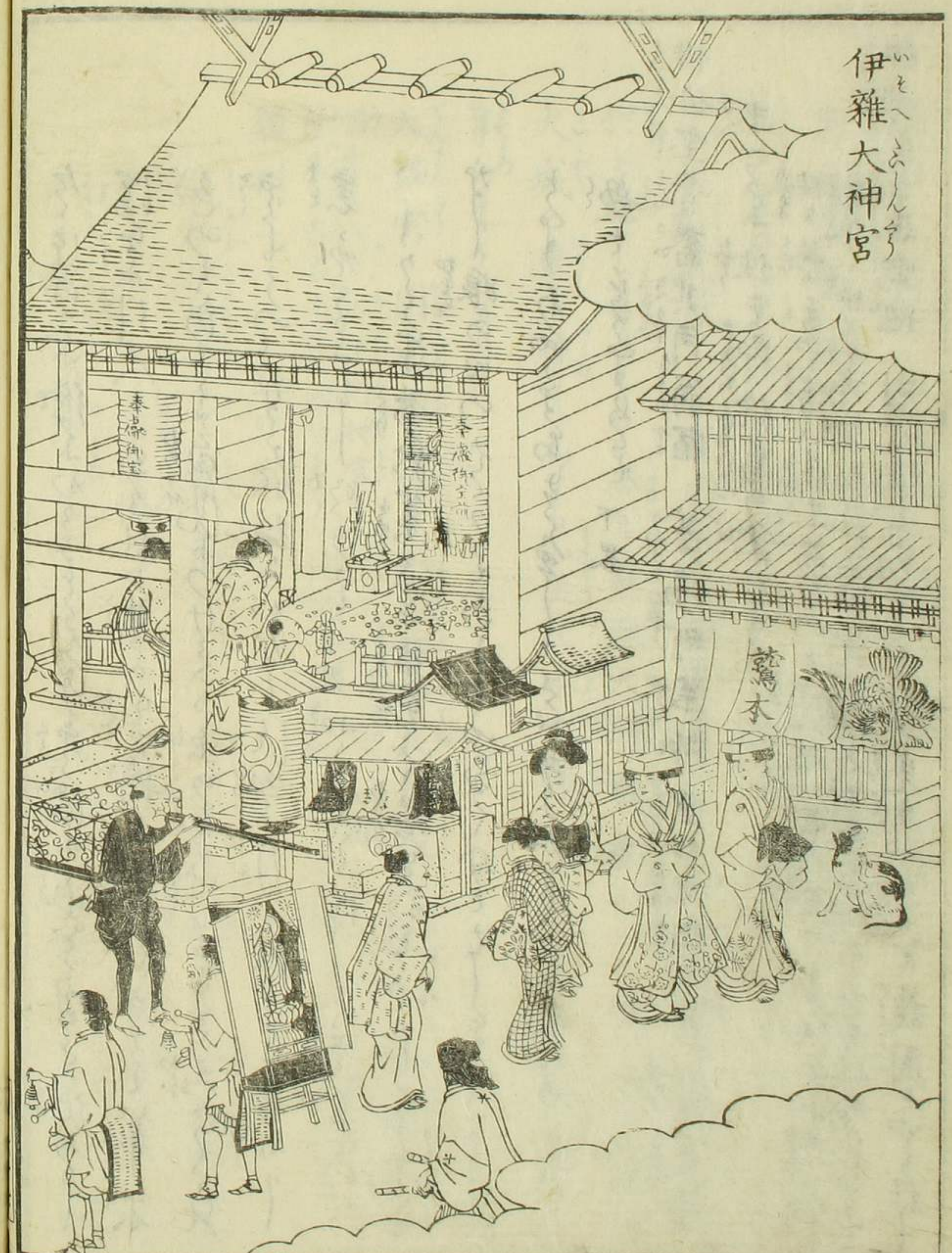
俳仙宝晋齋其角翁宿 茅場町某師堂の辺也
其角翁の住居也
末〜〜〜住を即終焉の地なり
祖徠先生居宅地 同所植木甚なり先生一号を護園といふ



道遙院

あし
 鼓小
 たく
 獅子
 まの
 あの
 ちの
 ちの

勸進聖判職人
 歌合の内花と獅子舞



伊雑大神宮

鶯木

護ハ萱と同一字義あるハ称せられありありあり此地に住せ
られしのみ知るし

伊雜太神宮 北八町堀松屋橋より一町とく良の方塗師町代地

町屋の間あり當社此所と宇土俗磯辺太神宮といふ

伊雜の御神ハ天照皇太神宮の別宮あり祭神ハ伊佐波登

美命と玉柱屋姫命二座なり寛永元年甲子伊勢長官出口

市正某伊雜宮より移しまねせ通三丁目宮社を営り

今神明長屋と唱ハ則是之 同十年癸酉今の地へ移しまるしと例祭を

三ツ橋 一ツ所は橋を三所架せある呼は北八町堀より本材木

町八丁目へ渡ると彈正橋と呼ひ寛永の頃今の松屋町の角は島田本

材木町より白魚屋舗へ渡ると牛の草橋といふ又白魚屋敷より

南八町堀へ架ると真福寺橋と号するなり

靈巖島 箱崎の南あり町教今十八昔雄譽靈巖和尚此地の海

汀を築立り梵宮を営り靈巖寺と号く依後世靈巖島との

島とよひとあり東海道各所記まる島も江戸の地名起り初ハ江戸の中

地とされ東の海中築立り島なりと云云 凌世寺と深川へ移

されしを跡を町家とあるなり故は此地の北の通りあり

茅場町へ渡る橋を灵岸橋と号けり

隨見屋舗 同所新川一の橋の北詰塩町の辺其舊地ありとつと

此所は瀬戸物屋多く住せりあ茶碗 川村隨見ハ諸國の水土を考ふ

鍊店とも号く或隨見長屋ともあり

其精くやくと大よせは勲功あり海を築き川を堀田畑茂開

發せ河内國の水を落さんとて撰泉の堺は大和川を堀淀

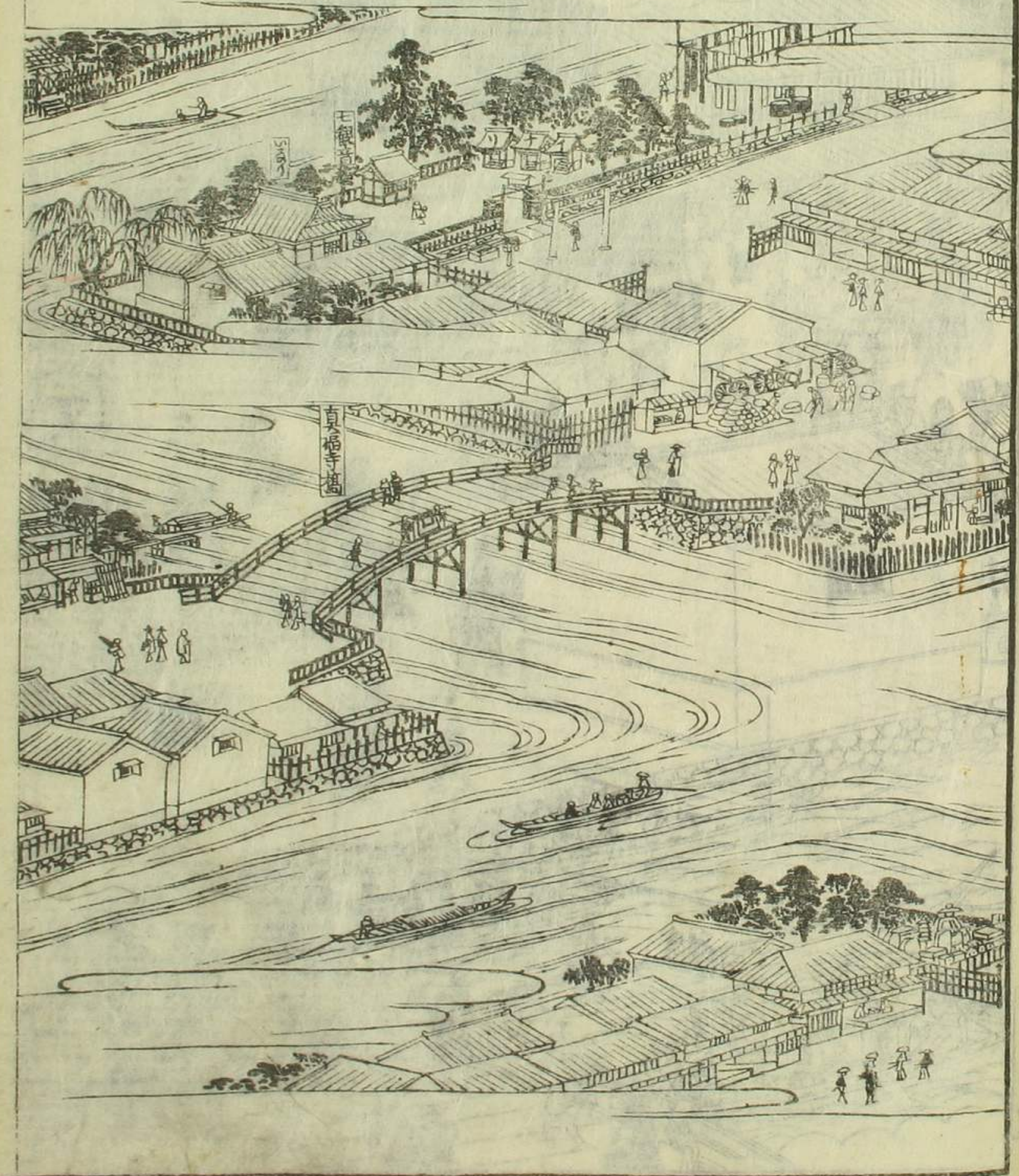
川の溢を治んとて大坂は安治川を鑿隨見自らの実名を安治と

其土砂を以て川下は新よ山を築き洪水の時高波を防除む

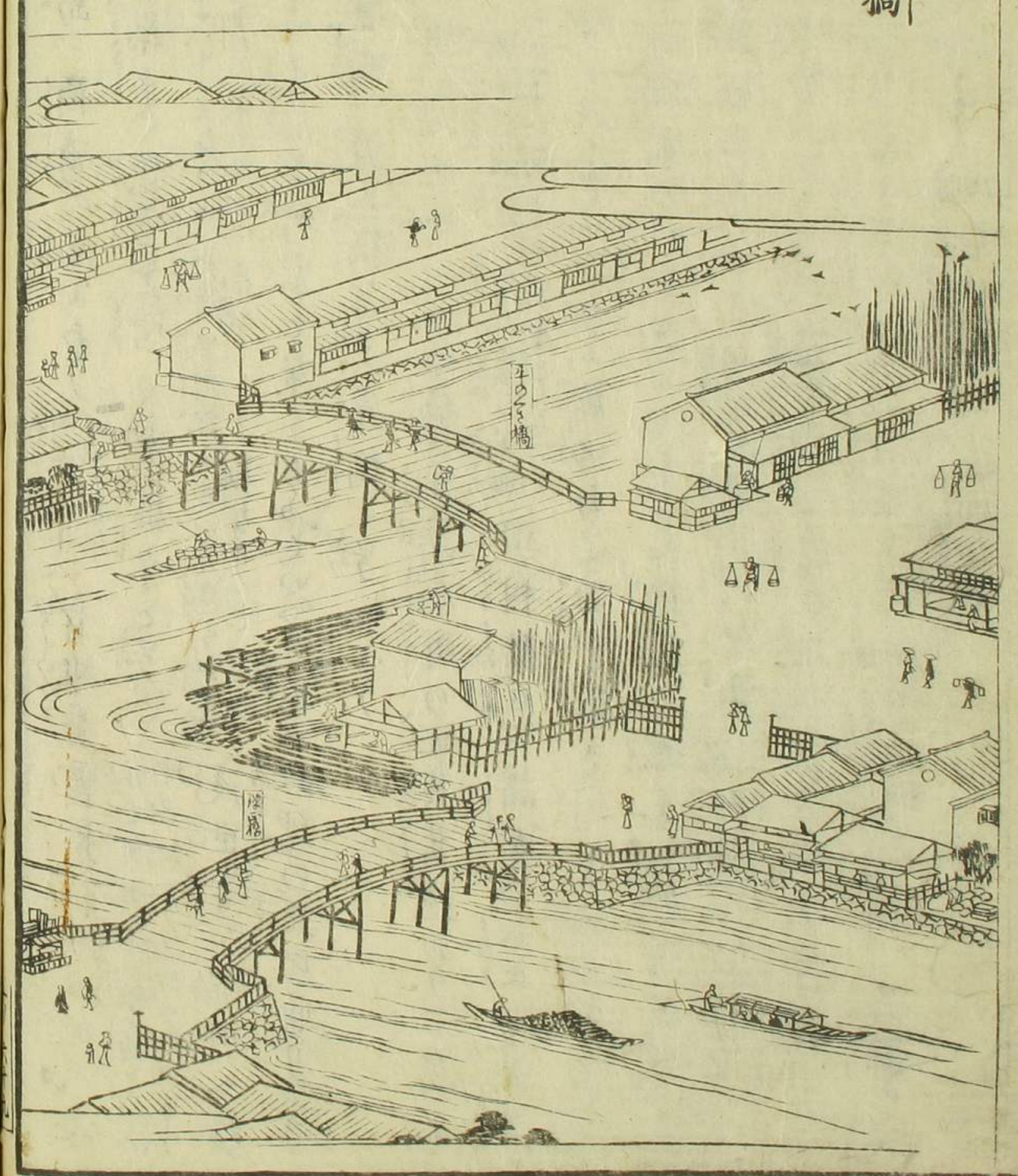
るをあるしと一且沖よりの目當とす世は隨見山と称せり其餘の功

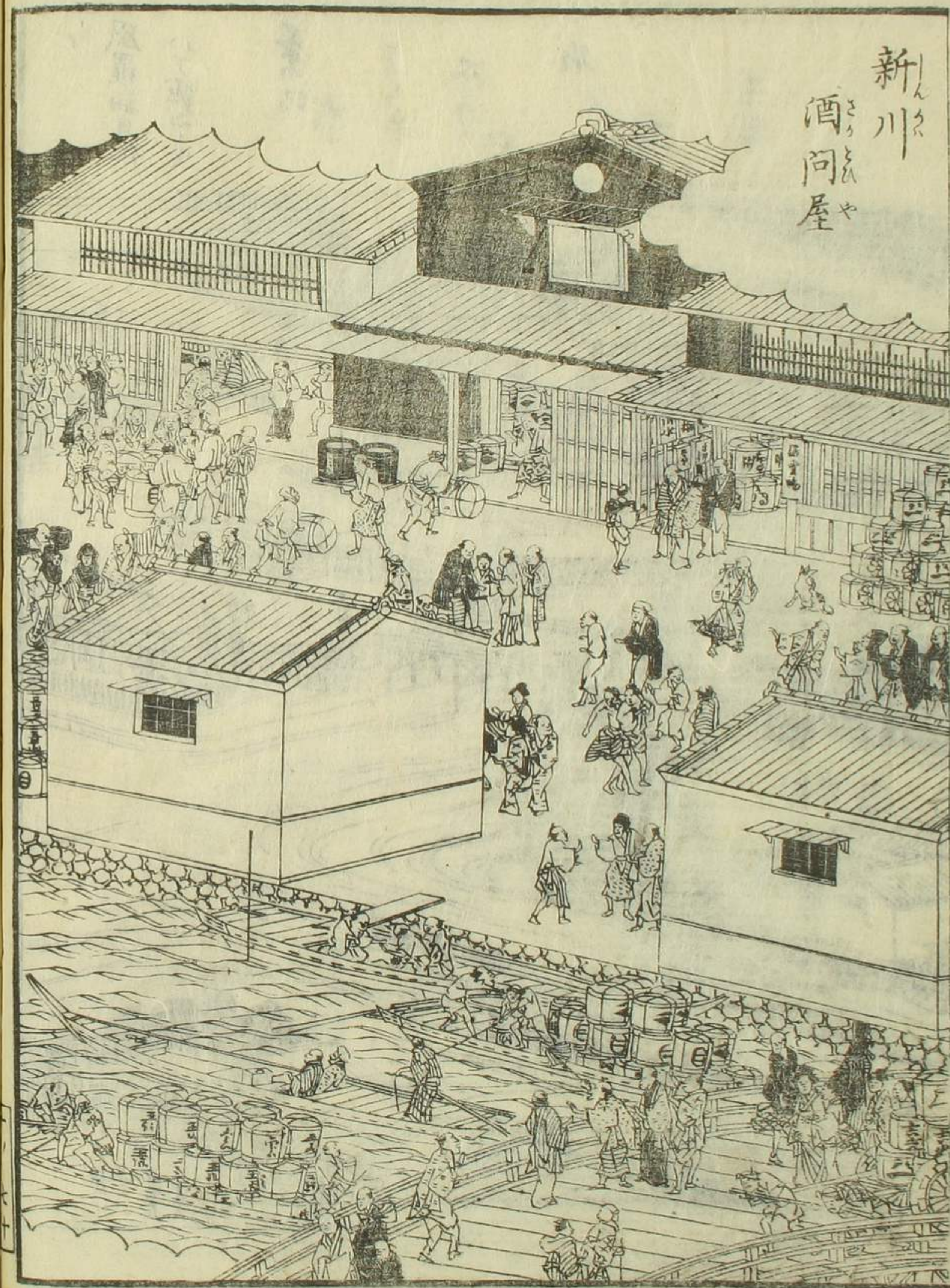
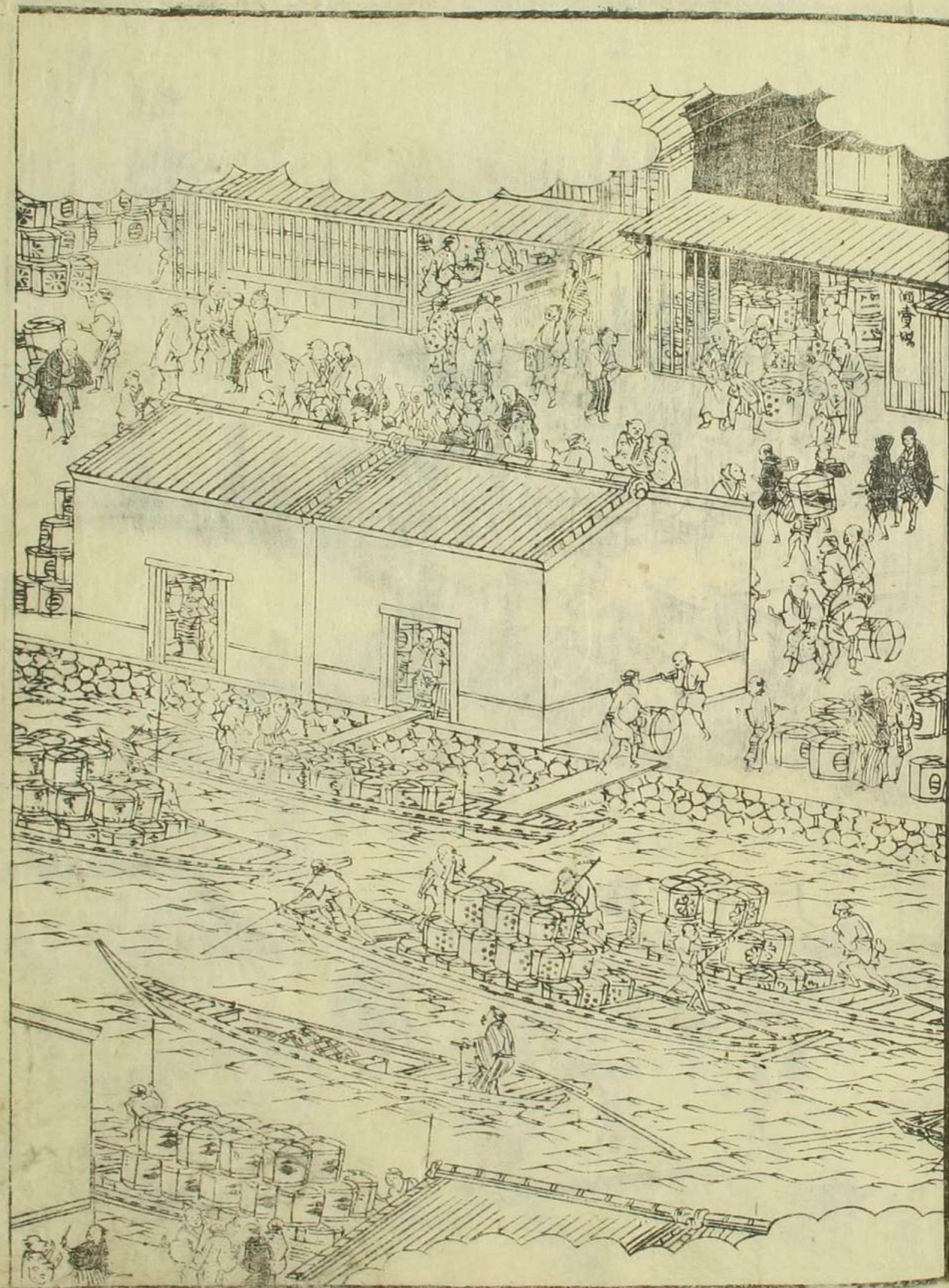
最ありあすあ 菊岡あ下川村氏の始祖ありと云

風羅袖日記
 ハテ塚カ
 菜の
 石の
 石此
 間
 芭蕉



三ツ橋







伊勢太神宮 同所四日市町あり此地の産土神とす此所を俗に新宮と云ふ

昌の地あり 伊勢内外両皇太神宮を勧請し多り遙拜所とす此所を俗に新宮と云ふ

宮伊勢と同年なり 江戸産子に寛永 伊勢内宮の社僧慶光院比

丘尼江戸参府の折柄旅亭の殿の為は此地をのみとす慶光院伊勢

御門並小比せし紫衣を賜りて御未印地なり始祖の比丘尼内宮建立の時

より運搬し社僧より依る内宮の境山本大夫の始祖慶光院の子孫あり

今も彼寺の住持比丘尼ハ代々この家より嗣傳あり

此は明暦の江戸繪圖に今所謂三の丸の地は伊勢上人の屋鋪とありてあり

此上人の旅宿なり 遠く此西へ遷せしれり

年山紀聞云 永祿元年日記 記 後六月三日中山亜相神官被於云去月廿三日神官宮

上棟母より令沙汰しはは進有る成比丘尼号上人先皇御成大者一号

慶光院以諸國勸進より此上棟取り立者之内又内宮上棟存立云云雖

不相應し未世此後神有子細を不測あり

永代橋 箱崎より深川佐賀町に掛る元祿十一年戊寅始て是を

架せしめらる永代島に架せし名とす長凡百十間餘あり此の

諸國への廻船輻湊の要津とす橋上より高く

深川の大渡りありとす 東南ハ蒼海中より房総の翠壺斜に開き美

容の白峯ハ大城の西は時荒波の速嶺ハ墨水に臨むと勝臈とす

台嶺金龍の室閣ハ緑樹の蔭を見えかたれて自丹青を施す

似て風光さびしく画中よあふること

薬師堂 靈巖島銀町あり別當ハ真言宗中々 医王山圓覺寺

と号す本寺ハ三州鳳来寺峯の茶師と同本同作なり

大宝年間ハ造立ありとあり 座像三丈三尺あり鳳来寺茶師 此靈

像ハもと高野山橋本の里よりありて慶長年間當寺の所基

惠生阿闍梨此地に遷りて後靈巖寺の境内に安置 深川靈

此地あり 萬治の後靈巖寺深川より遷りて項此薬師堂と

稻荷の社のも此地に残りてあり

橋本稻荷社 同境内あり 此所の鎮守とす社記云神像ハ弘法

大師の作なり

三丈一尺

山城國伏見稻荷明神

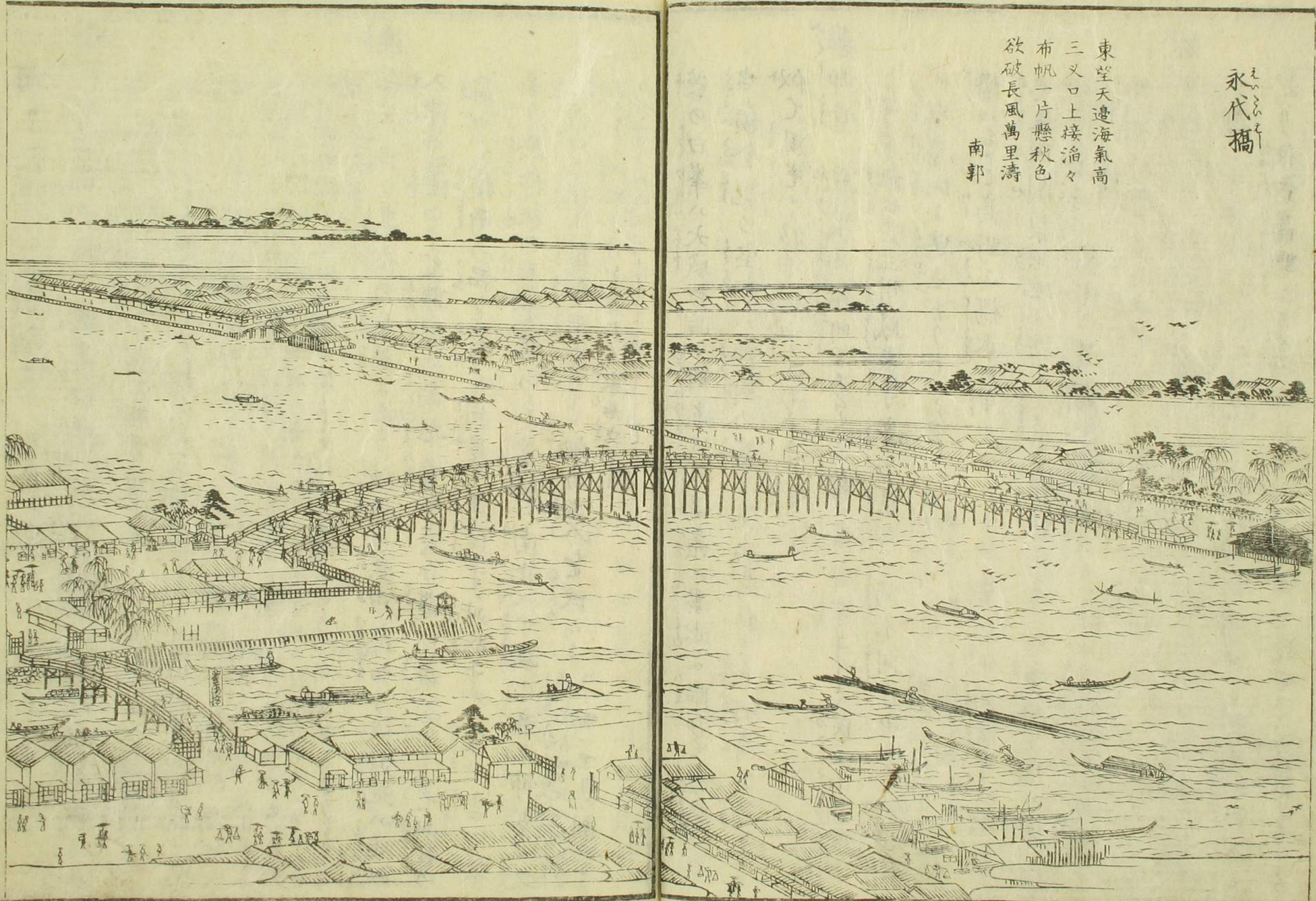
同本同作なり

とす

往古高野山の麓橋本の里に宮居を造りて安置あり

永代橋

東望天邊海氣高
三叉口上接滔々
布帆一片懸秋色
欲破長風萬里濤
南郭



故ありて後々勸請なる事あり

惠比須前稻荷祠 同所東湊町の南高橋の北詰人家此間に

あり別當天台宗也昔日向井炭のやきふあをり海賊橋あり

引移られ一頃宮居を構の外に出されしを此所と云ひす此

宮前又ハ蛭子前と唱へしを古老云く昔此地より鏡池洲築地へ

出洲のあり此辺の洲は芝海老と云ふもの多く集る魚入字はえひの洲

と唱へ其洲崎はあり稻荷の宮ありとて海老洲の宮とのよひありて

認り後世誤りて蛭子神は混り又夷子と稱しり附會せりありしをこの

湊稻荷社 高橋の南詰あり鎮座の来由詳かしく此地ハ廻船

入津の湊也と諸國の商船普く運送す此故也近世吉田家

前より積所の品を悉く問屋へ運送す此故也又此川口の北は監船所ありて船の出入を改ら

り湊神社の号を贈らる當社ハ南北八丁堀の産土神なり又

此川口の北は監船所ありて船の出入を改ら

あり此地年月を重ねて家居住つて

され八丁目の大川とて是也

鏡池洲 南北八町あり傳云寛永の頃井上稻富

大筒の町見を試し石なりと或此出洲の形状其器に似し故の

号ありともいふ白石先生の説は此地ハ明暦火災後小桑山は

出洲と今ハ薪炭石杯の問屋多く住せり

折知る月ハ世界の決地也

半井ト養翁居宅地 同所明石町の裏通あり

數ハ父ト養の時賜つたありと云云寛文江戸繪圖ハ十間町の

西の裏通り東橋の東詰の北の方川は傍ら角記あり

東都の御醫官ト牡丹花肖拍の商孫なり連哥あり

狂歌を能せし此地を賜り一頃の口と云ふ

ト云ハ本道と云ふ思ひようもあはれり

按ふ江戸砂子ト養の源と云ふも哥意ハ他の人の詠と云ふ不審あり

了然禪尼菴室地 此地ハ住まへり紫の一本と云ふ草紙

禪尼の行實ハ第四卷落合泰雲寺の条下ニ詳なり

佃島 鑊炮洲は傍ら孤島を以て舟松町より海渡文龜年間江戸

の舊國は向島とあり天正年間

東照大神君遠州濱松の御城ありし皇都へ上りて頃攝津

國多田の御廟あり住吉大神より遷りて神崎川涉船

なりし御村の漁父獵船を以て渡りし伏見

御城の御使なる折らハかあり漁船を以て仕へたり又

西國へ御使なる折らハかあり漁船を以て仕へたり又

旨命ありしハ大坂兩度の御陣也軍吏の密使或は法膳の

魚獵等の御日と急なく仕へたりハ其後漁人三十四人江戸へ

ゆされ慶長年間浅草川涉遊獵の時網を引せり同十八年

八月十日海川漁獵を以て旨免許なりあり其頃遠安藤石川

鑊炮洲の東の干潟百間四方の地を以て正保元年二月漁家を立並せ

本國佃村の名を採て即佃島と号く又白魚を取らば

旨台命より毎年十一月より三月迄怠りず其

間ハ他の獵を堅く禁めし猶更後深川八幡宮の前あり

空地三千坪を以て佃町と号けり此は法膳魚を以て

貢佃島ハ肥州賀多の漁人雜居此地ハ殊更白魚ハ名あり故

冬月の間毎夜漁舟は篝火を燒四手網を以て是を漁り都

下地あり是を賞せり春に至りて二月の末よりハ川上よ登り

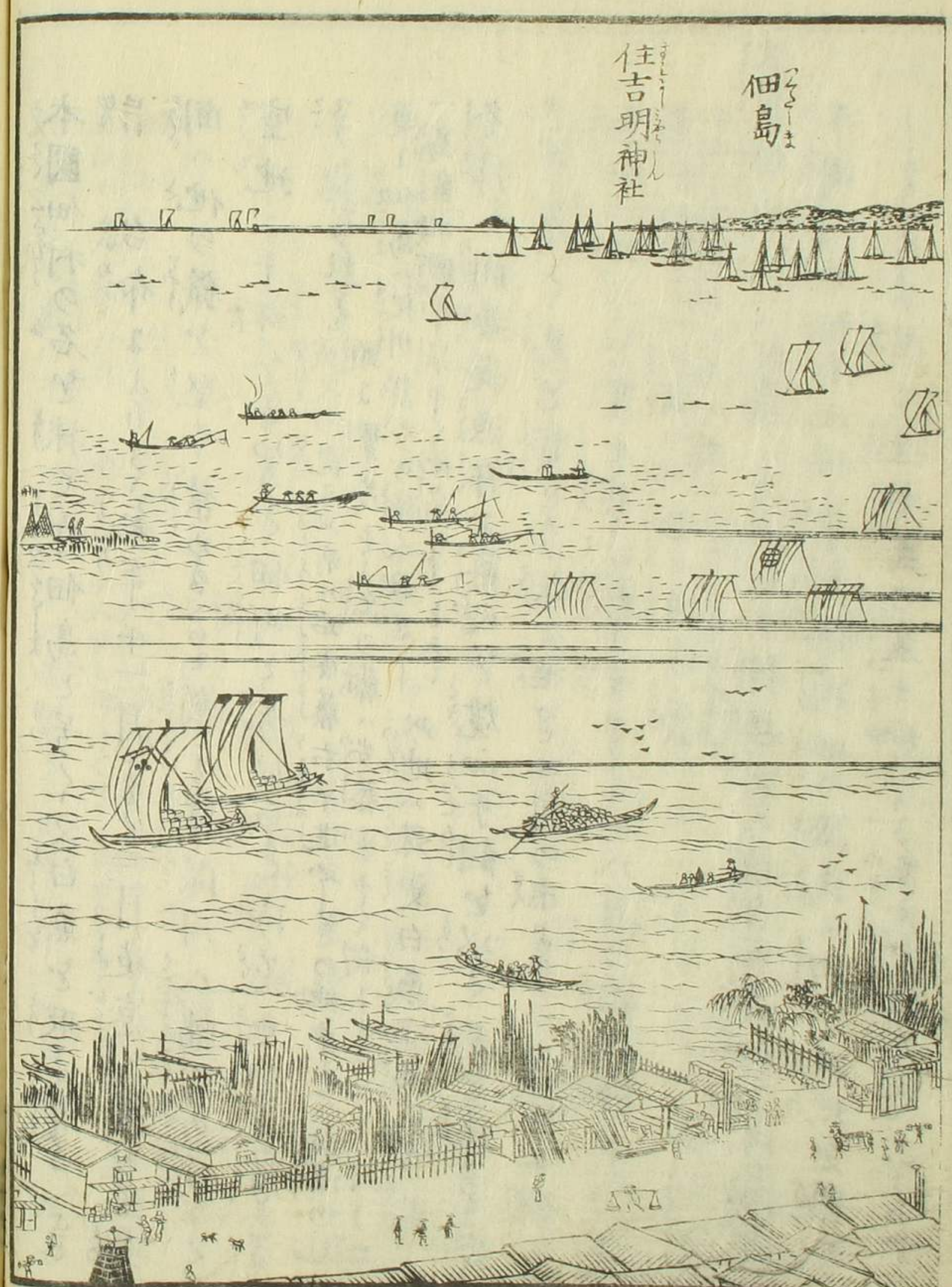
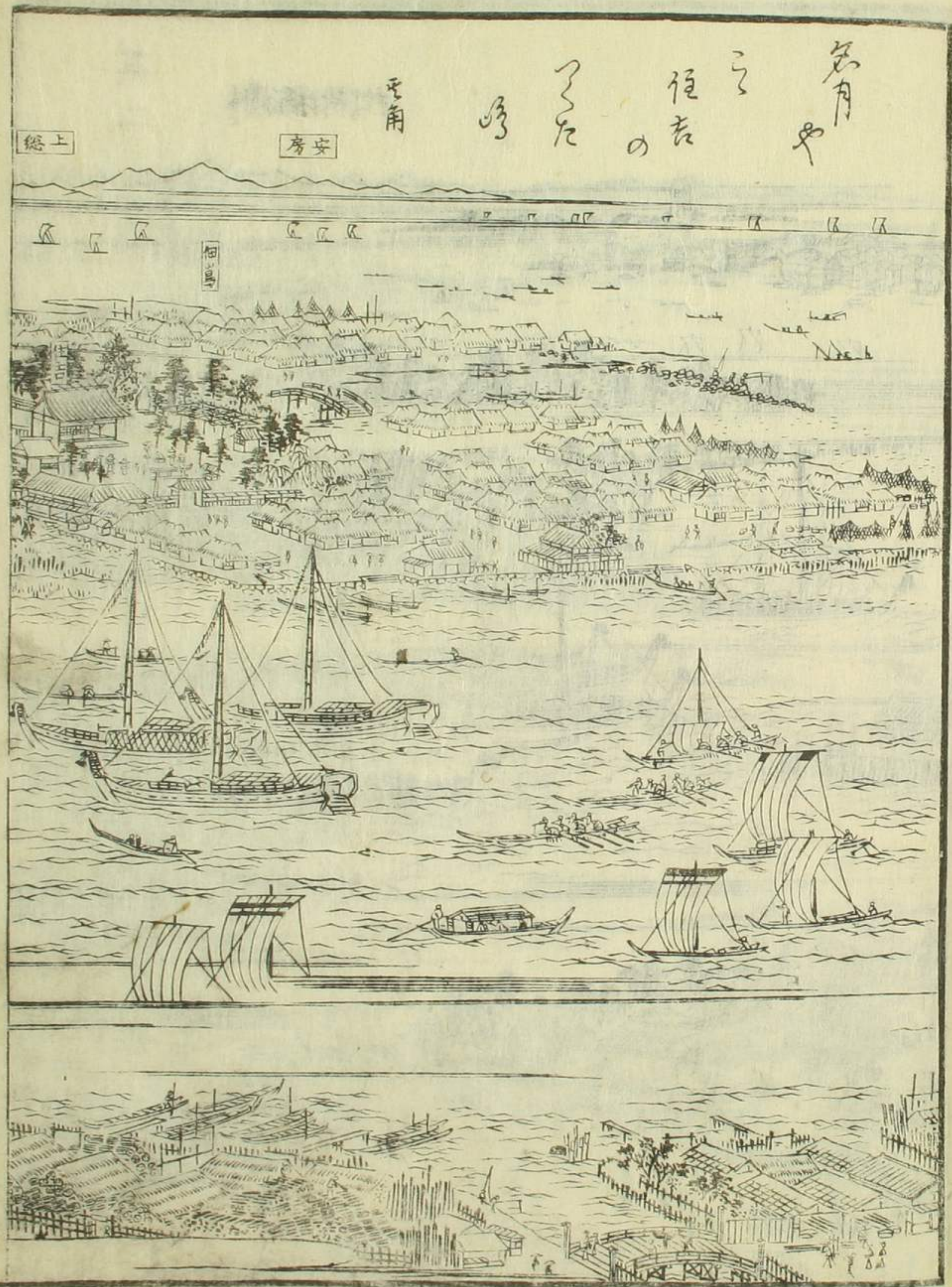
弥生の頃子を産む其子秋に至りて七八月の頃江海よ入と云

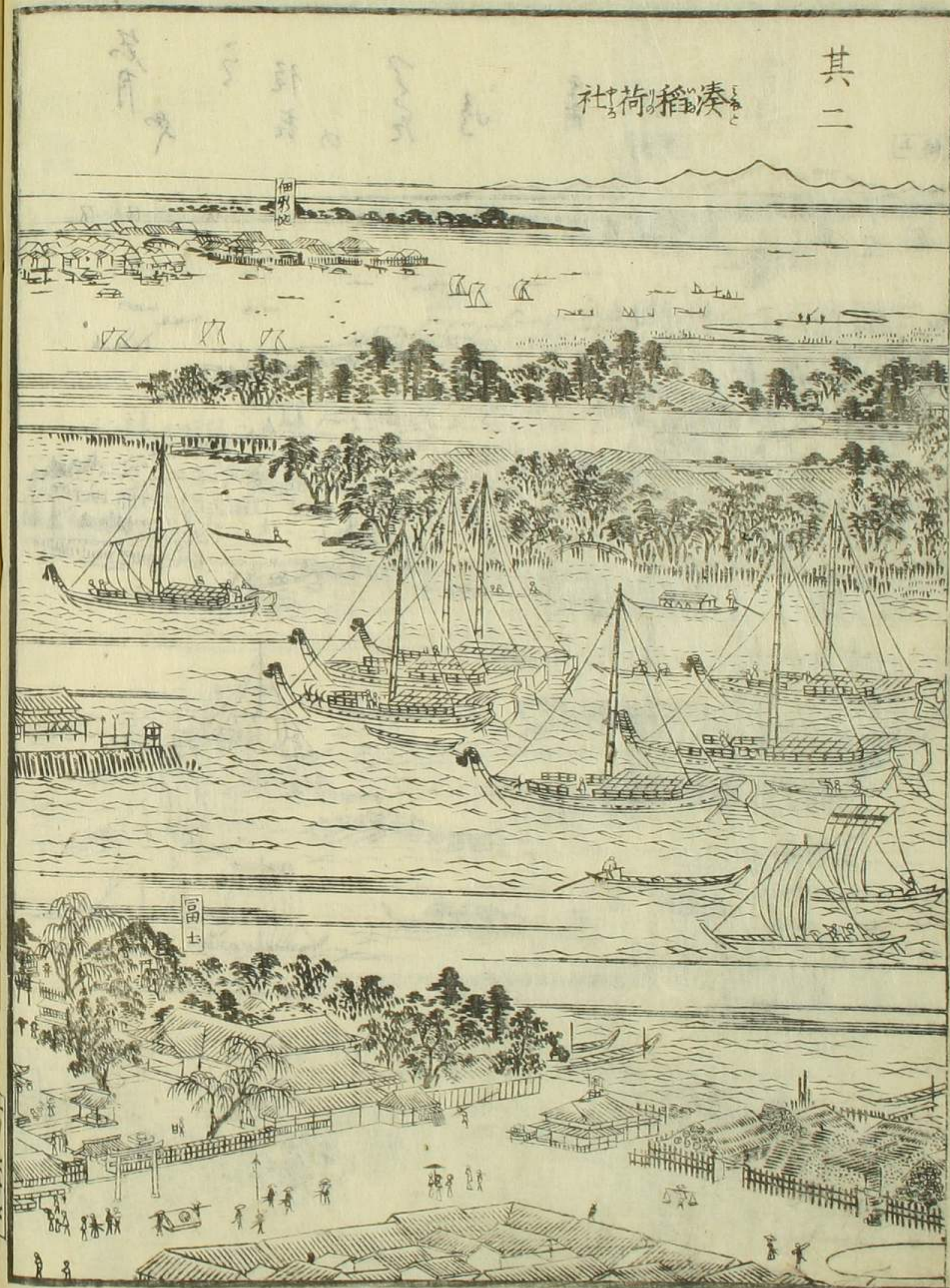
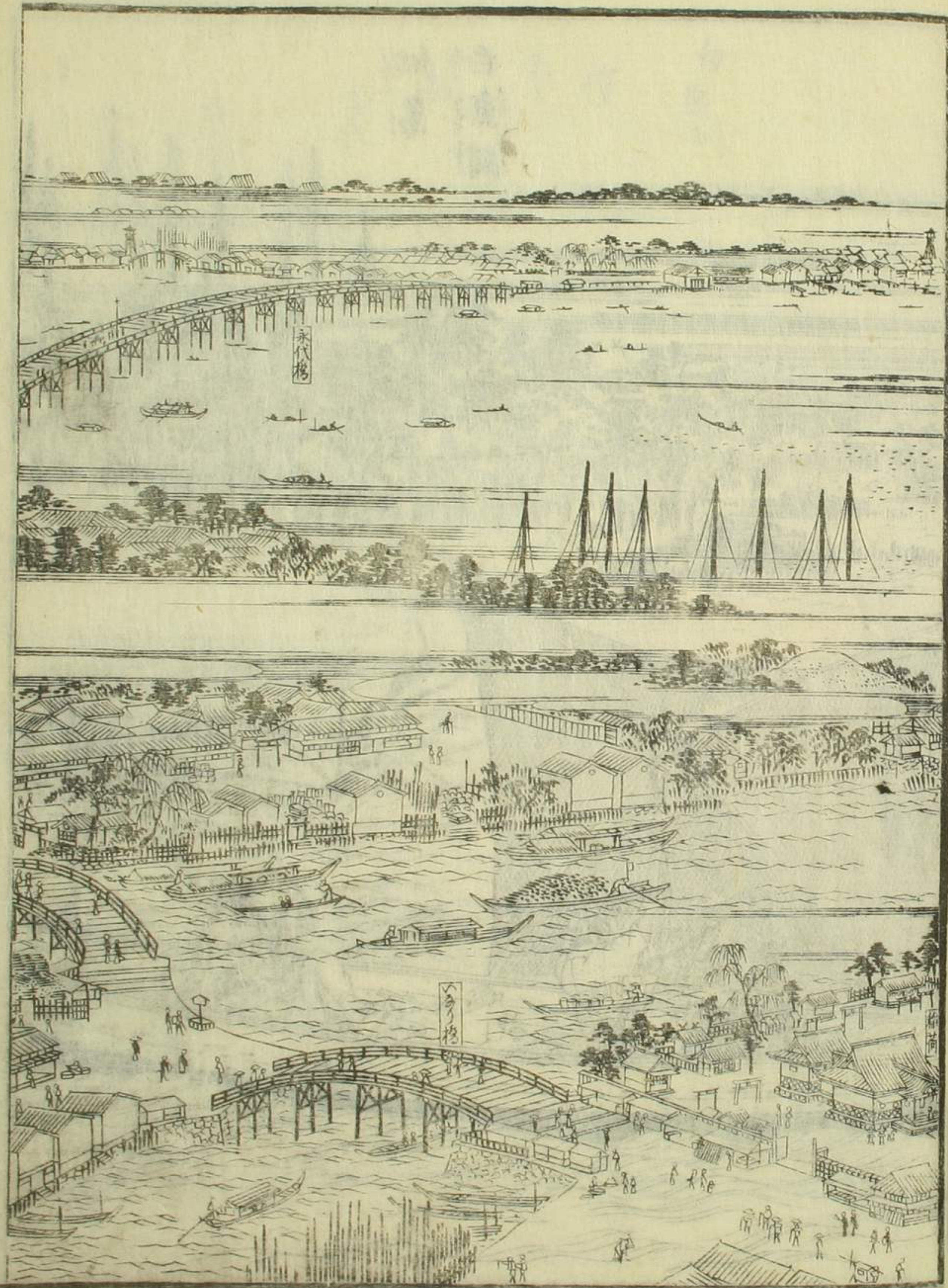
事照合考云兩國の川筋は産む事云

住吉明神社 佃島あり祭る神攝州の住吉の御神も同一神主ハ

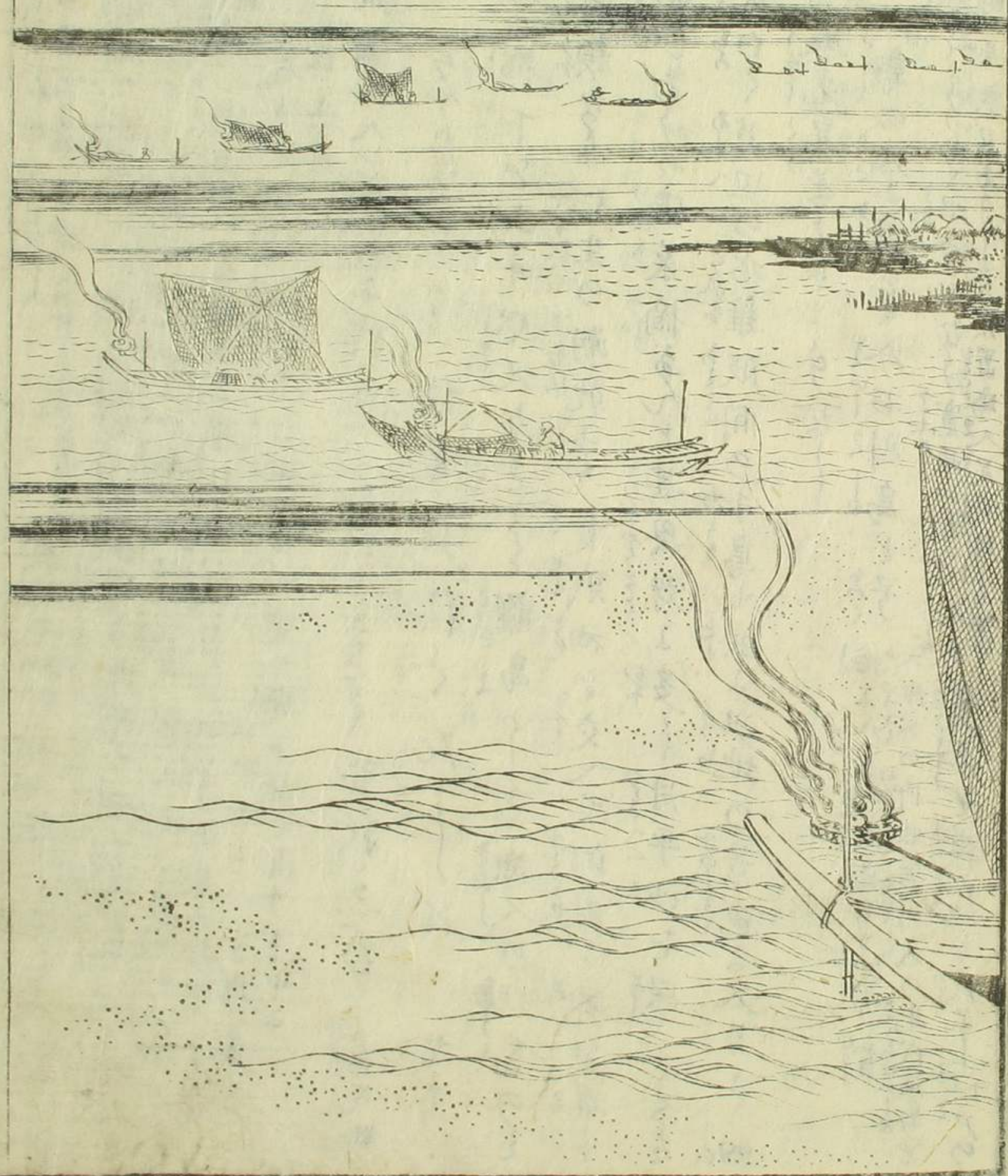
平岡氏奉祀を以て保年間攝州佃の漁民より初此地を賜り

よりこゝに移り住本國の産土神なる分社あり

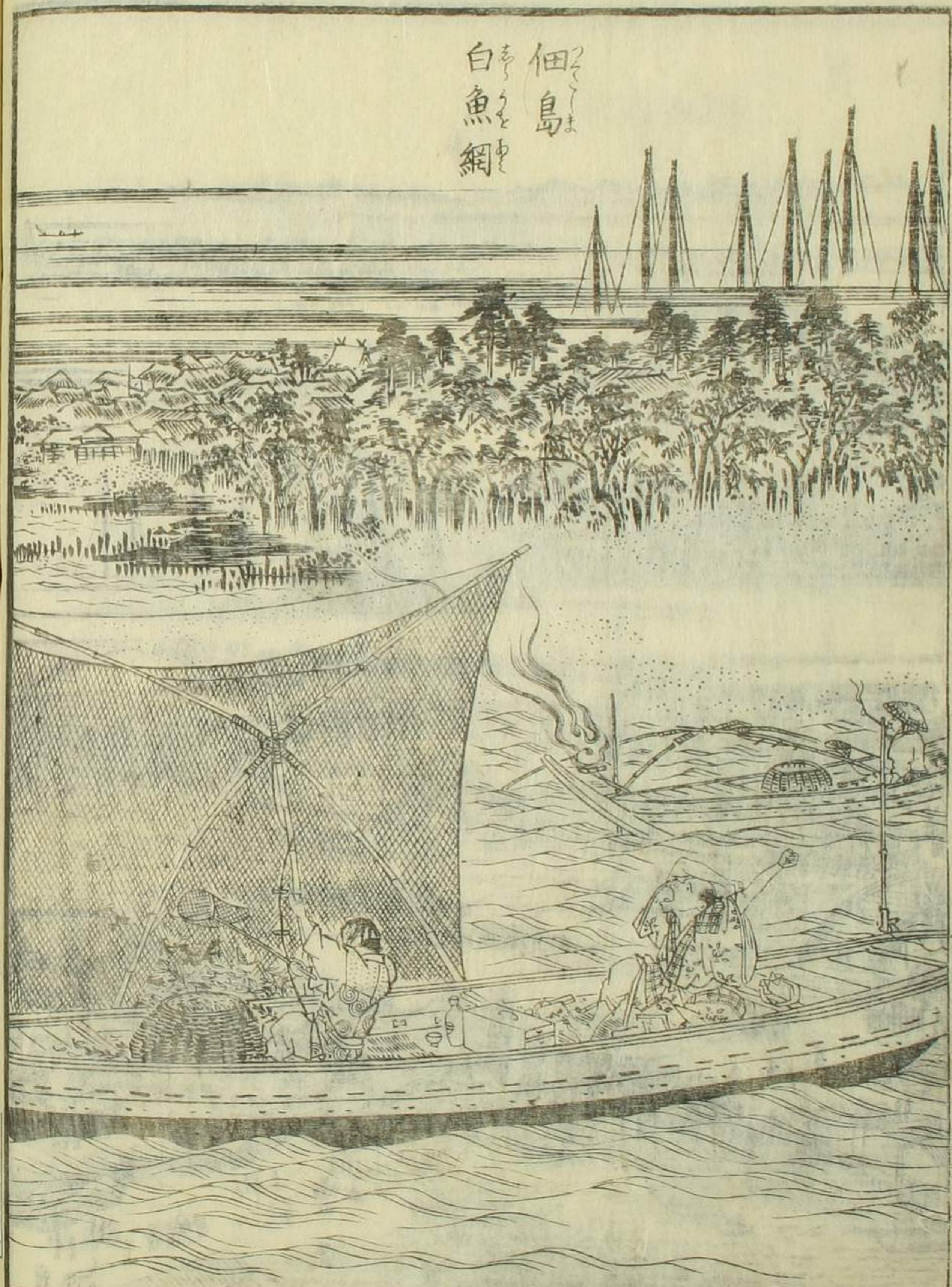


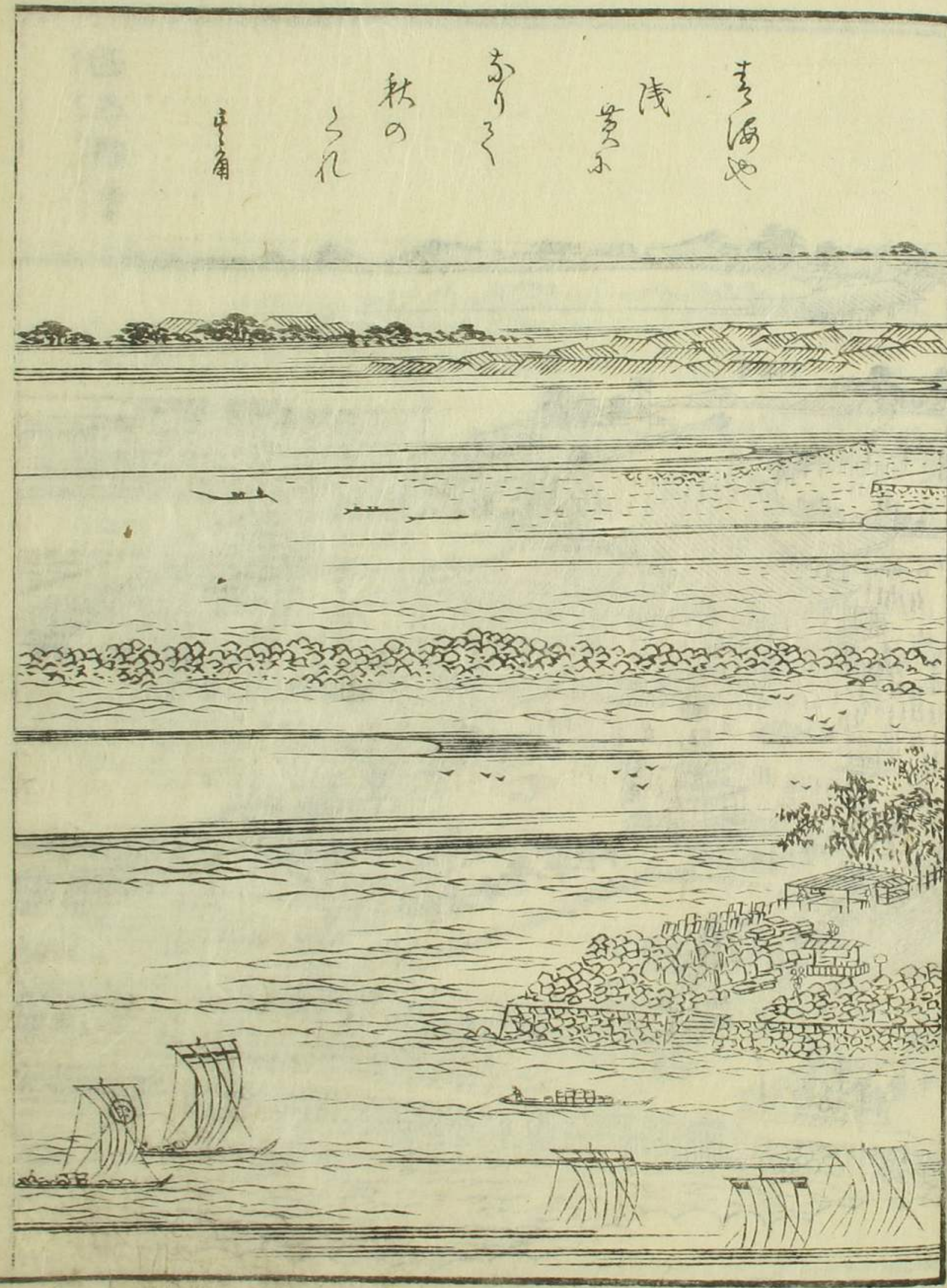


白魚
價
あ
ぬ
ふれ
と

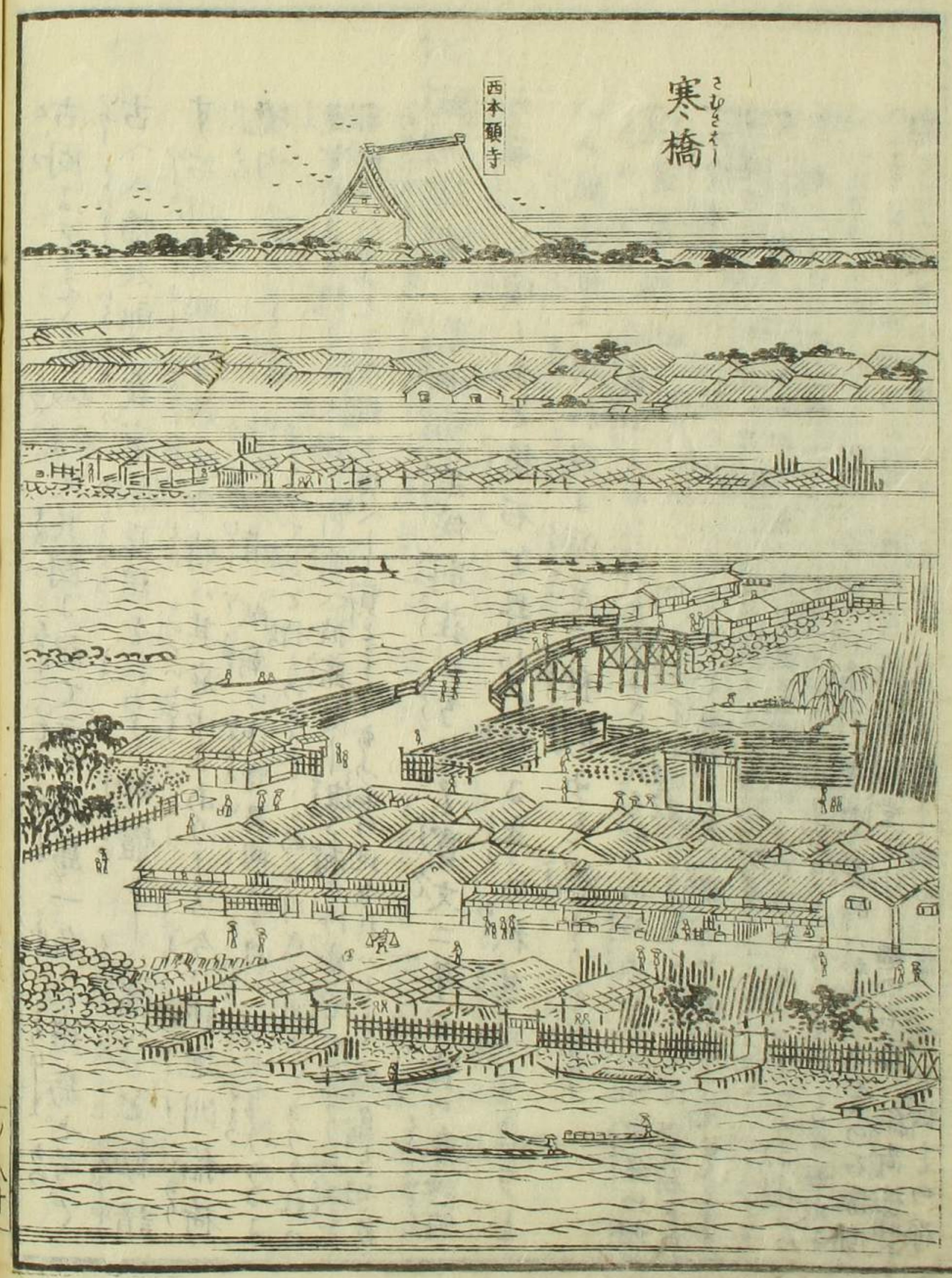


佃島
白魚網

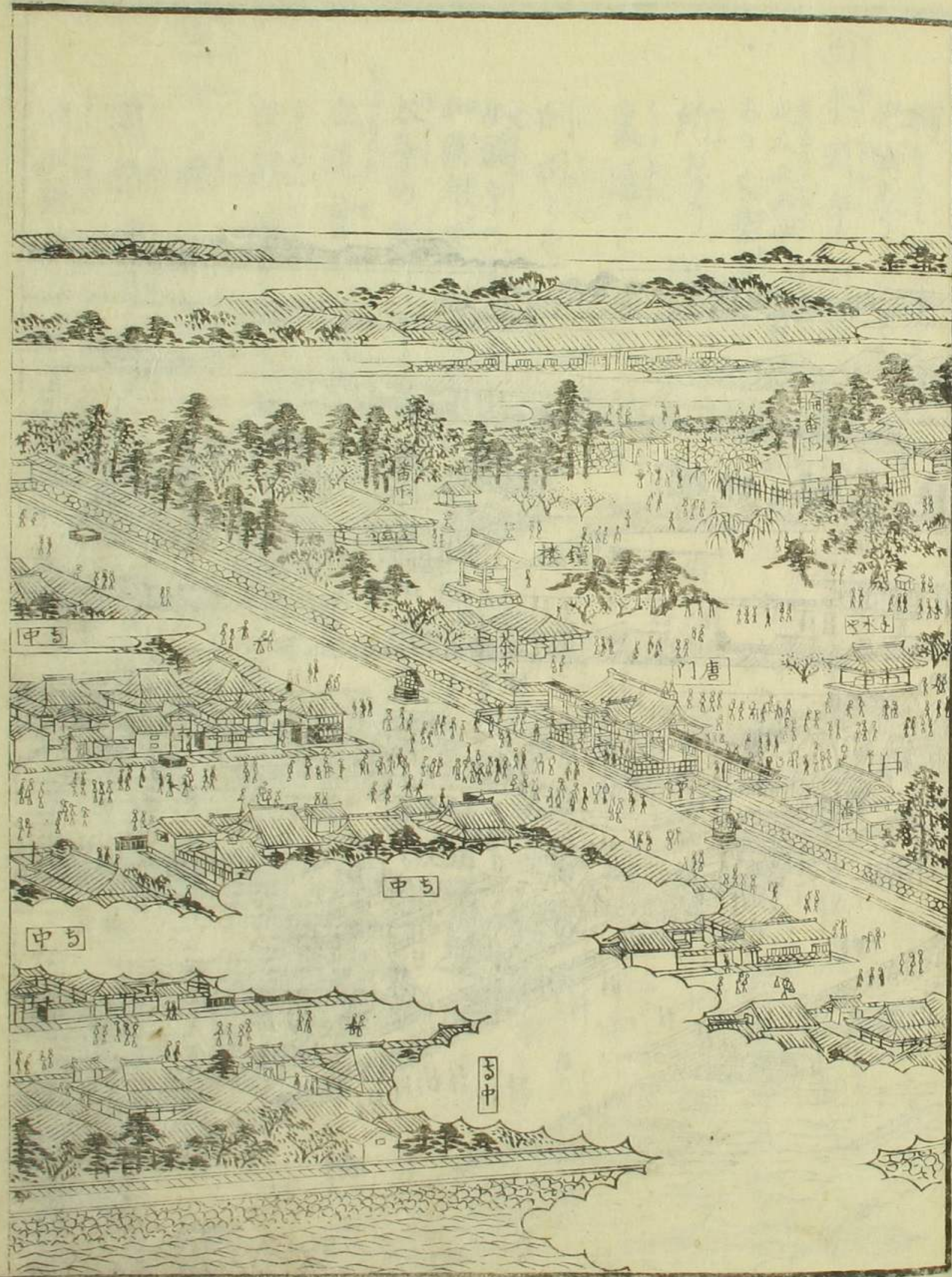




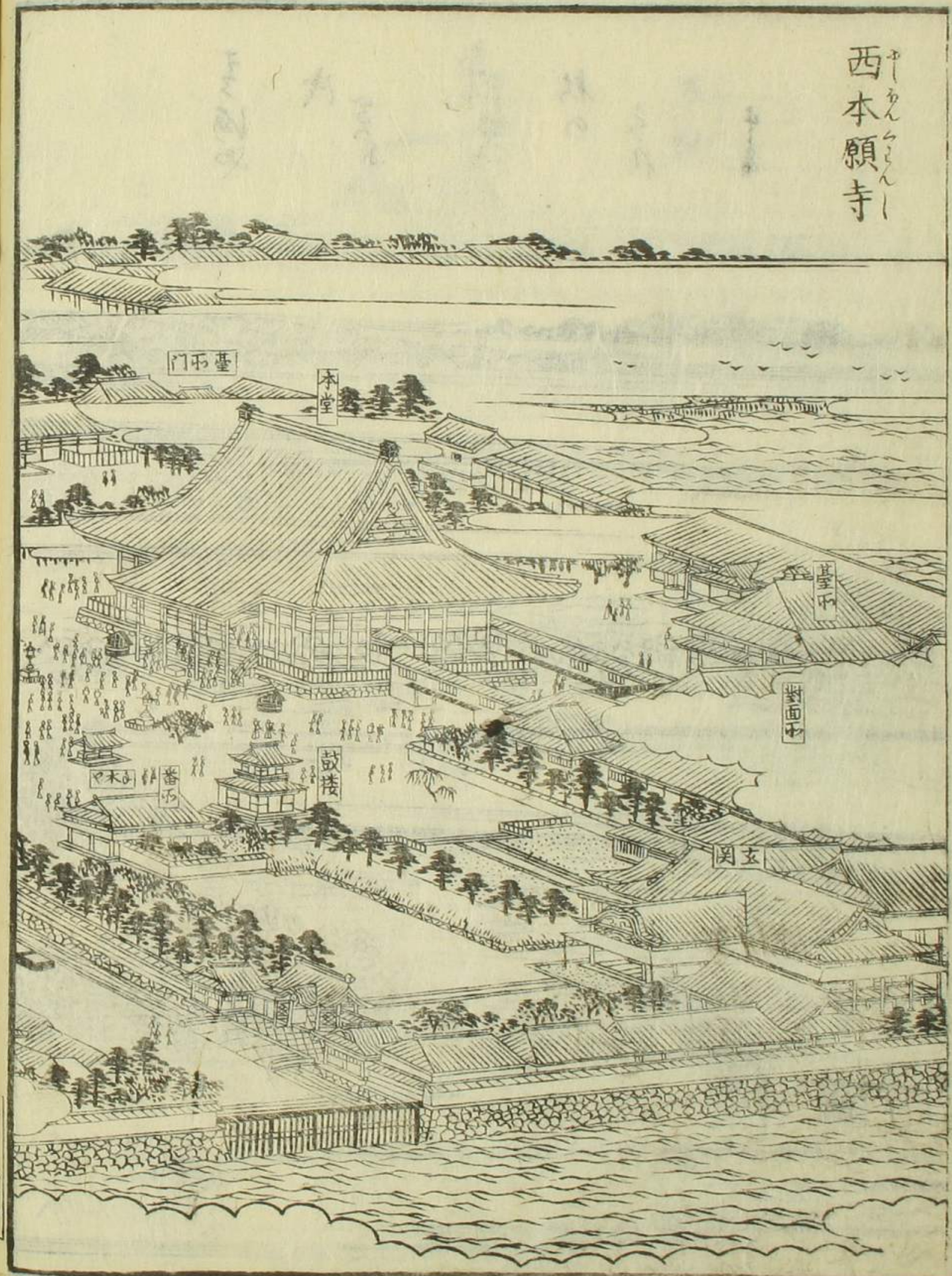
中角
秋の
あけ
浅
まき海

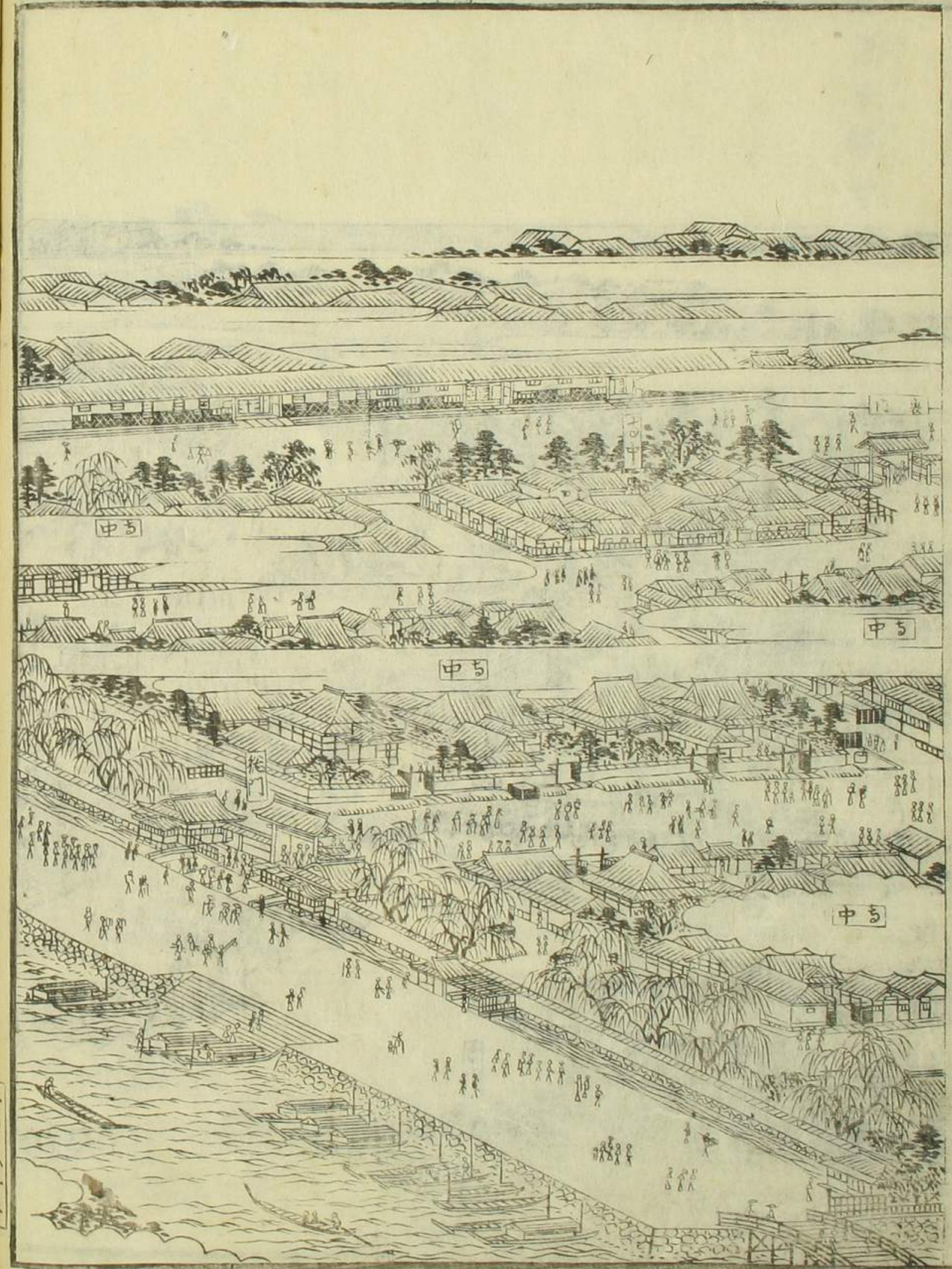


寒橋
西本願寺



西本願寺





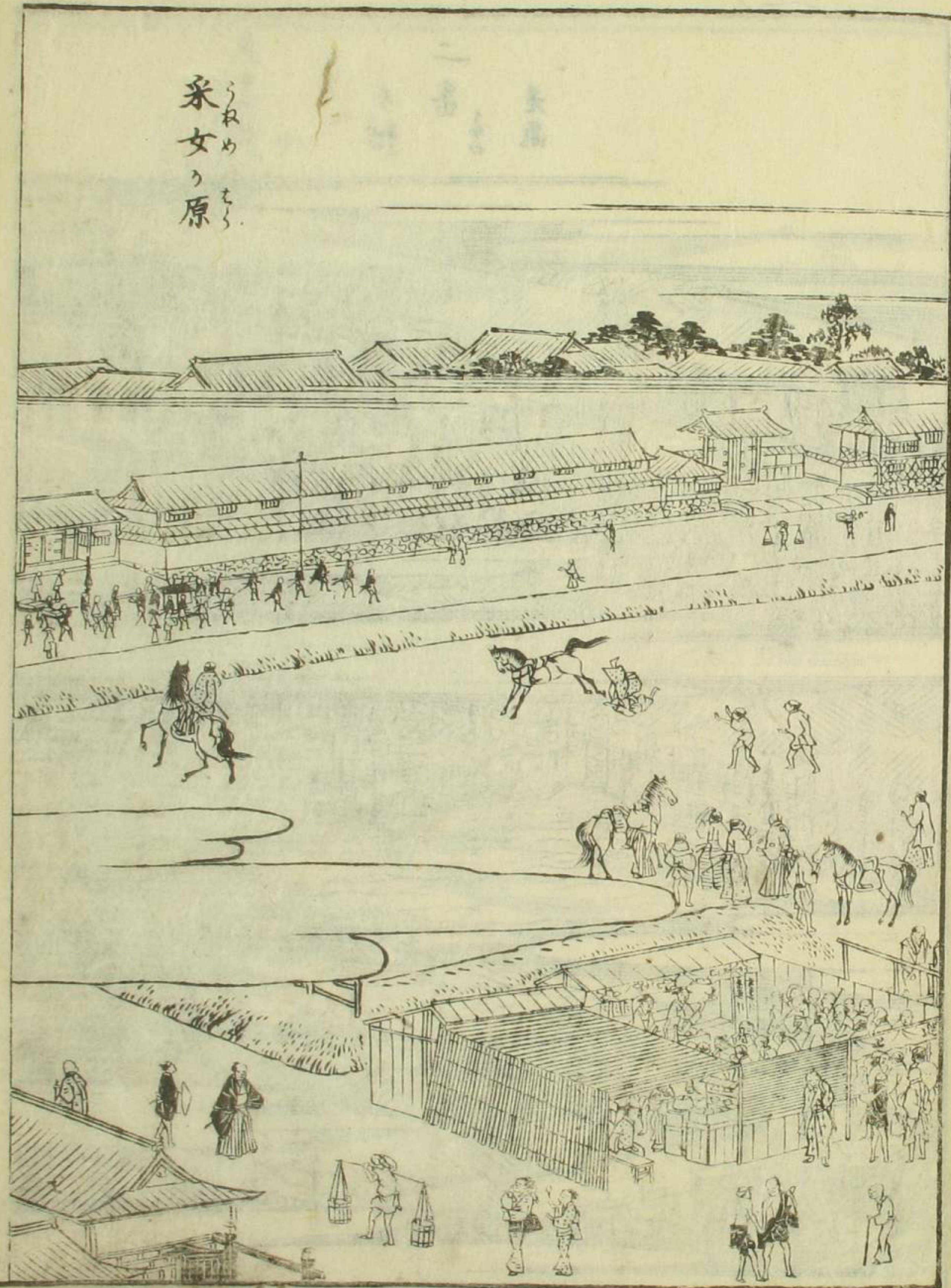
西本願寺 同所川を隔て北の方より俗に築地の門跡と云ふ
或人云此地ハ明曆四年お仰り
 ありく築所なりと云ふ 一向汎々々々京都西六條より此輪番
所なり 趙宗のいふ是を 塔頭五十七字あるは始横山町二丁目の南側

裏通りふつと明曆大火の後此地に移す准如上人を當寺の
開祖と云ふ 江戶名所記に 神祇在位の時より京都西本願寺の末寺を立られ
 本願寺の趣立と云ふ 宗流と改筆と稱し 白石先生云く 齋養寺といふ一向僧東
 和漢年契は延宝八年庚申西本願寺立とあり 本寺阿弥陀如来を聖徳
 太子の彫像と云ふ 泉州塚の信證院より云ふ 毎年七月七日

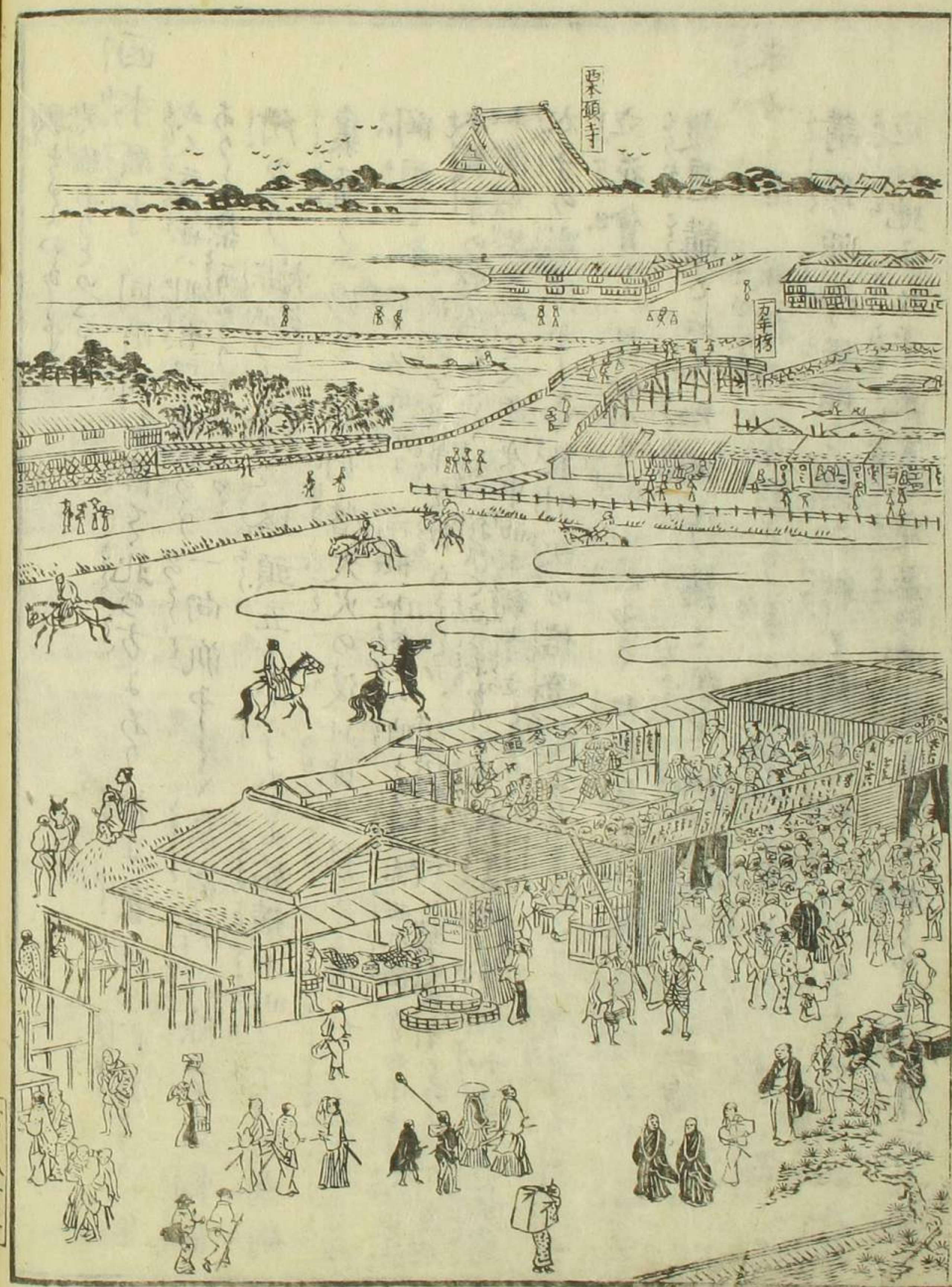
立花會十一月廿八日開山忌あり七昼夜の法會修行あり是城
報恩講と云又俗間浄講と稱す 塔中成勝院に能仙杉風
 米女原 水挽町四丁目より東の方此原は馬場あり常は賑しく

講釋師浄瑠璃の藝ハ軒と並つて行人の足をとむ享保九年
迄此地は松平米女正定基のやきありて 故より 同年正月晦日

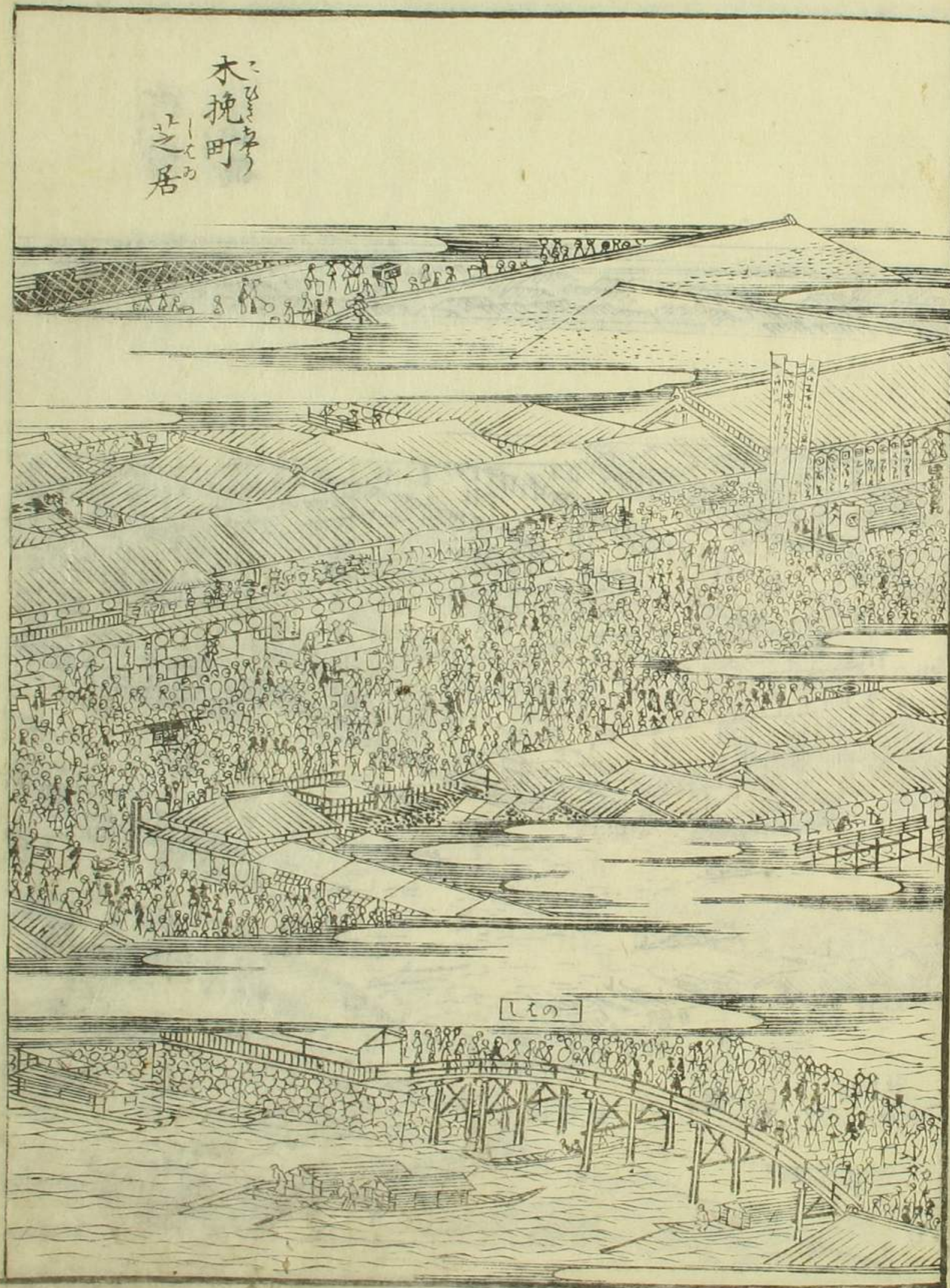
采女原
うねめ
ちん



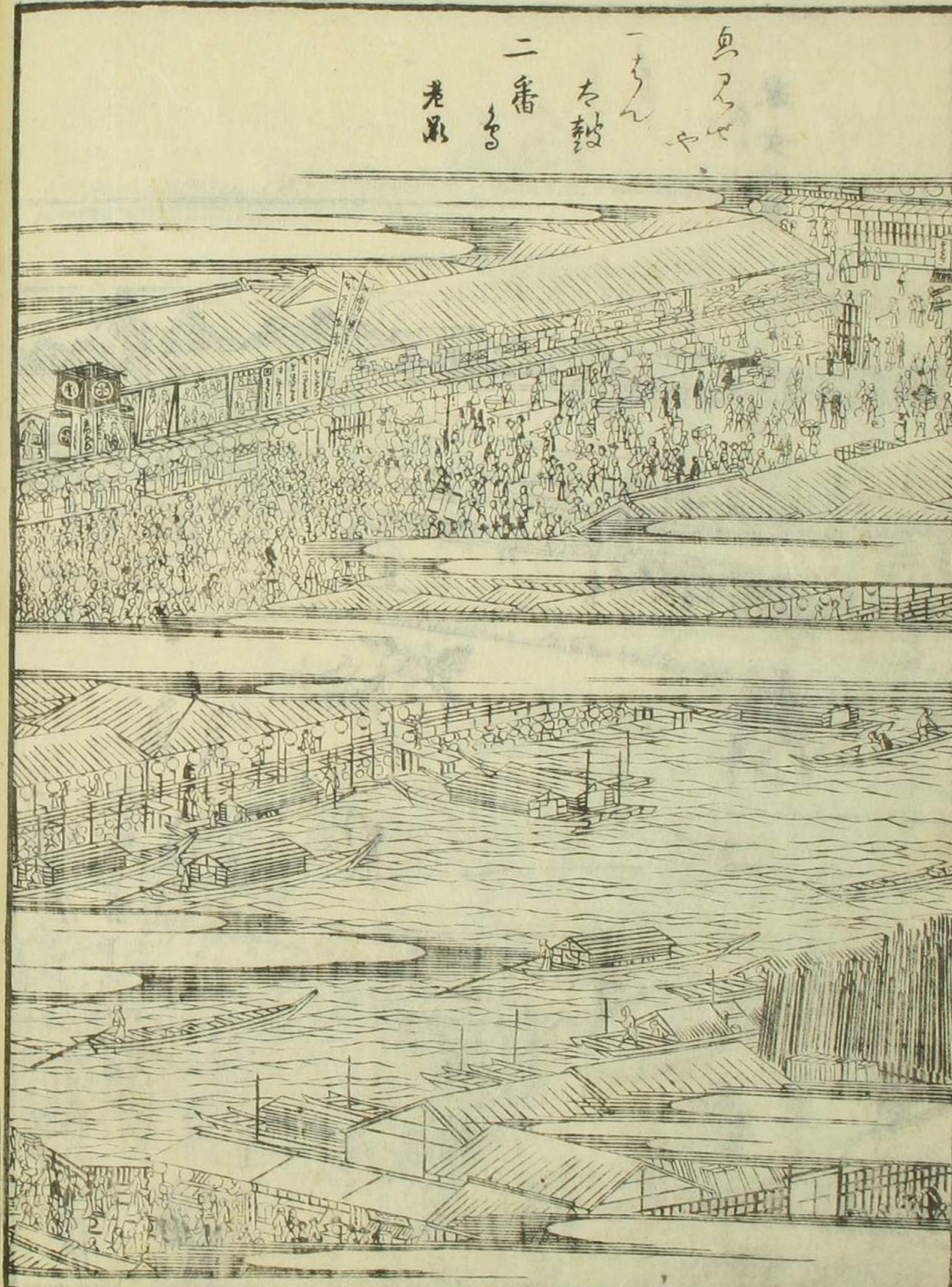
西本願寺

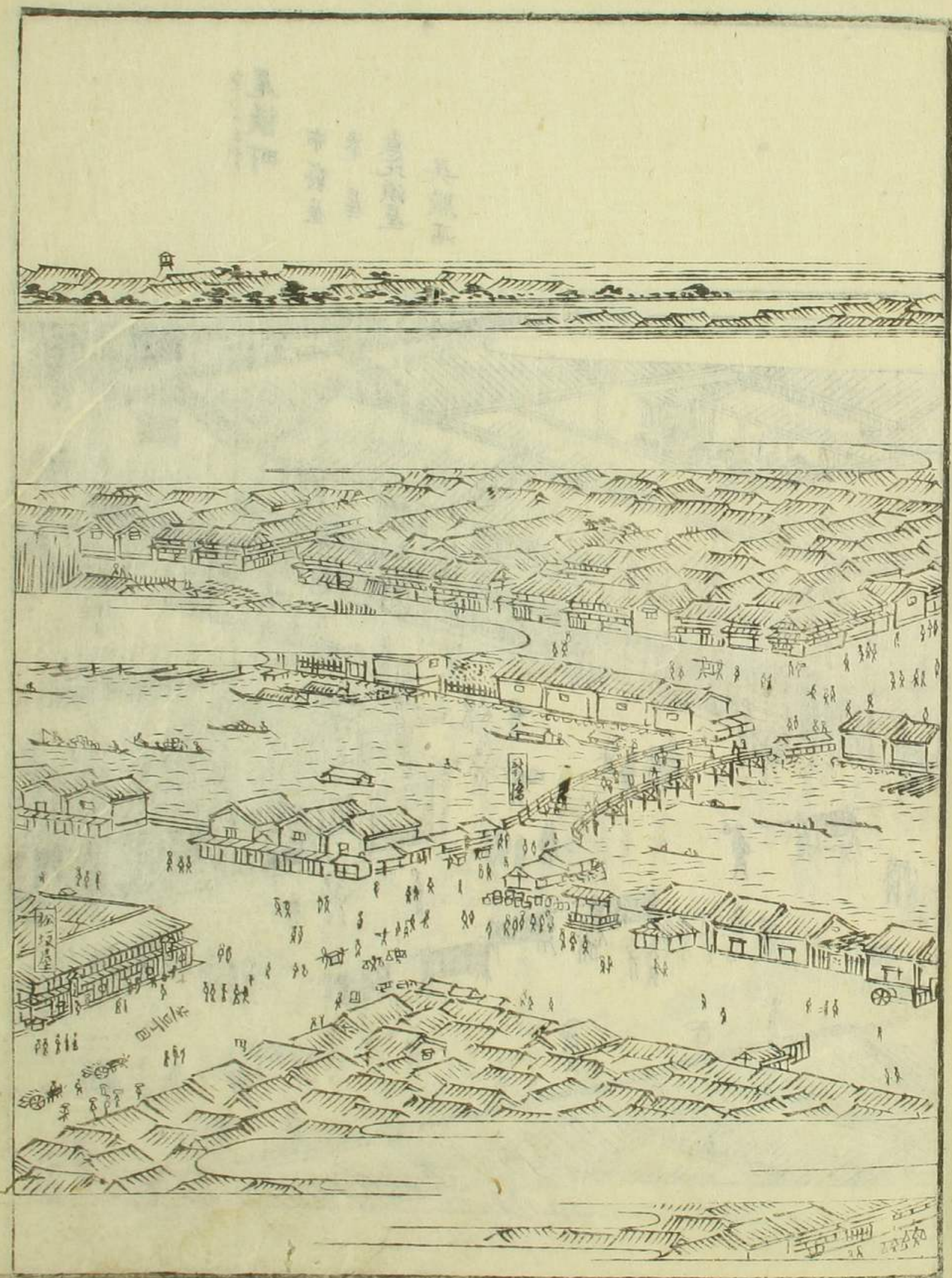


水挽町
之居

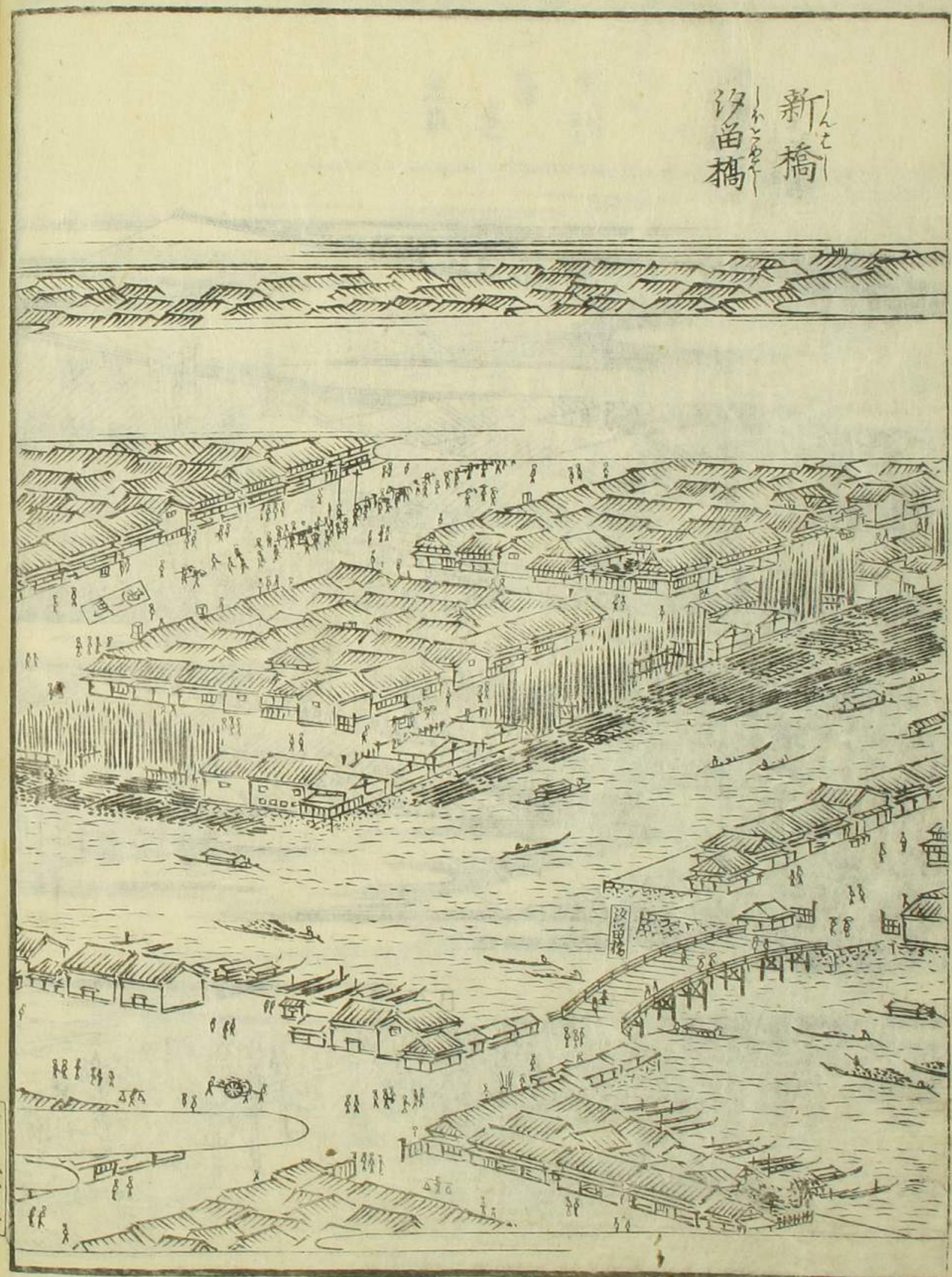


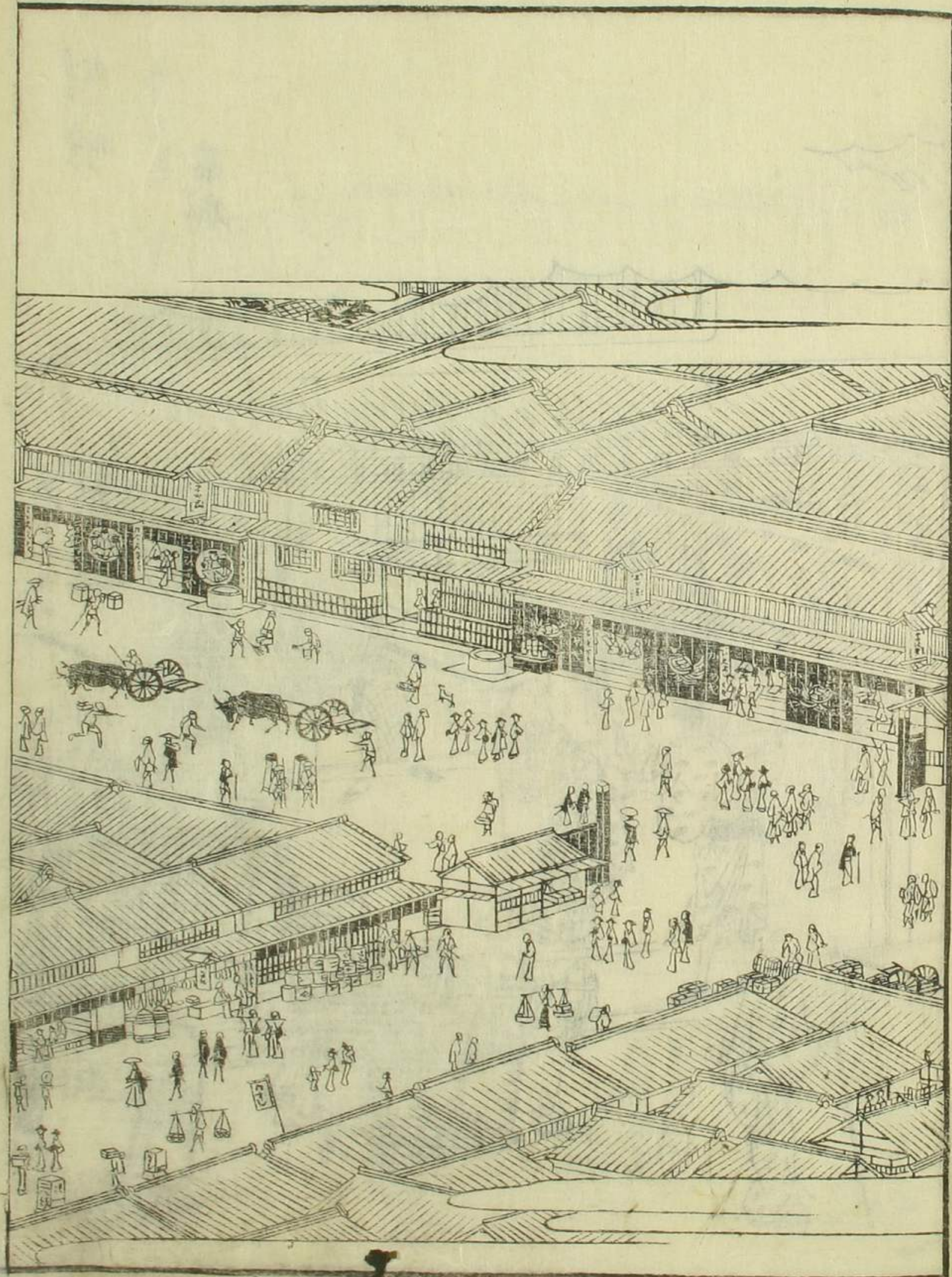
魚
一
右
二番
老



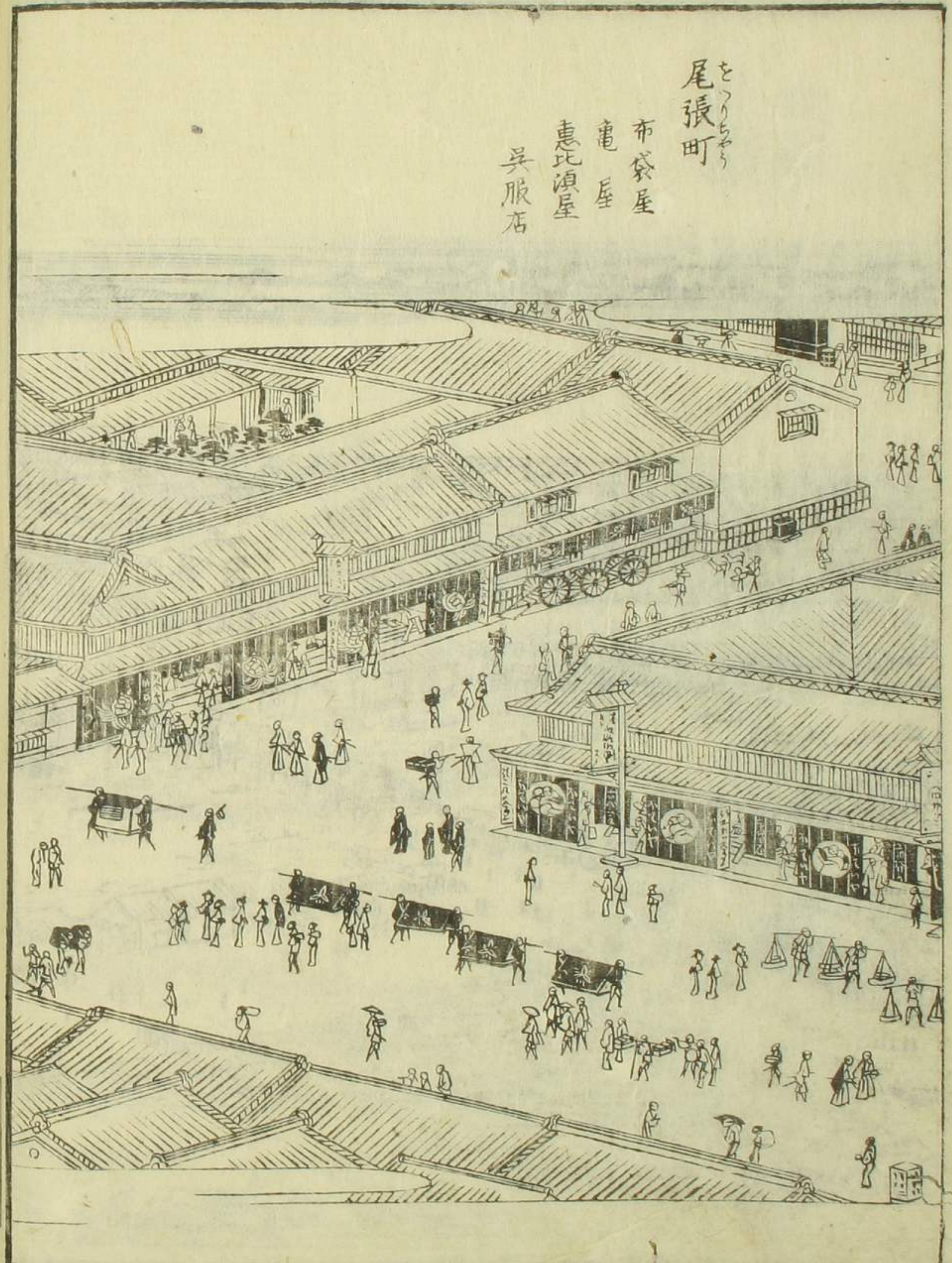


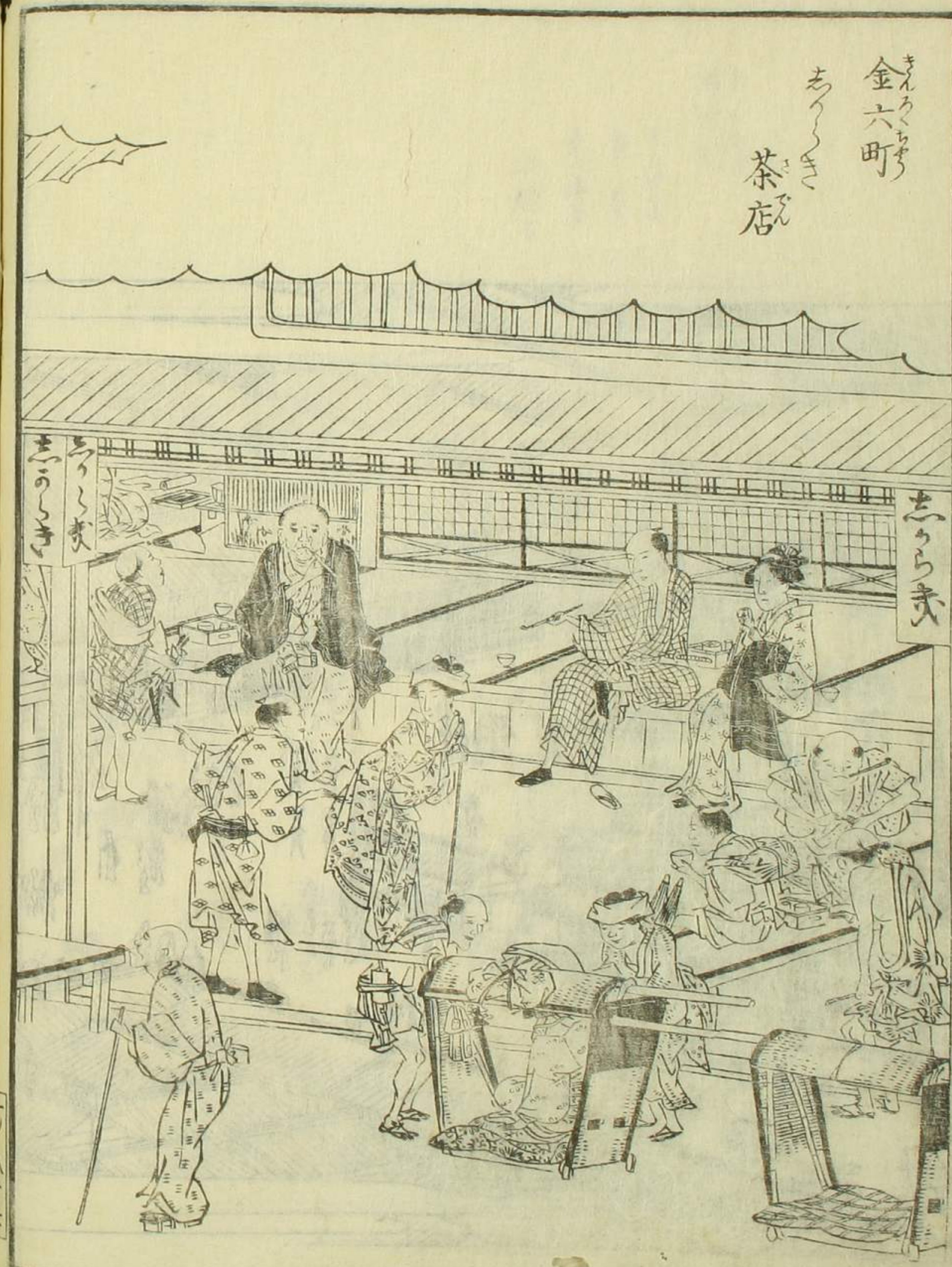
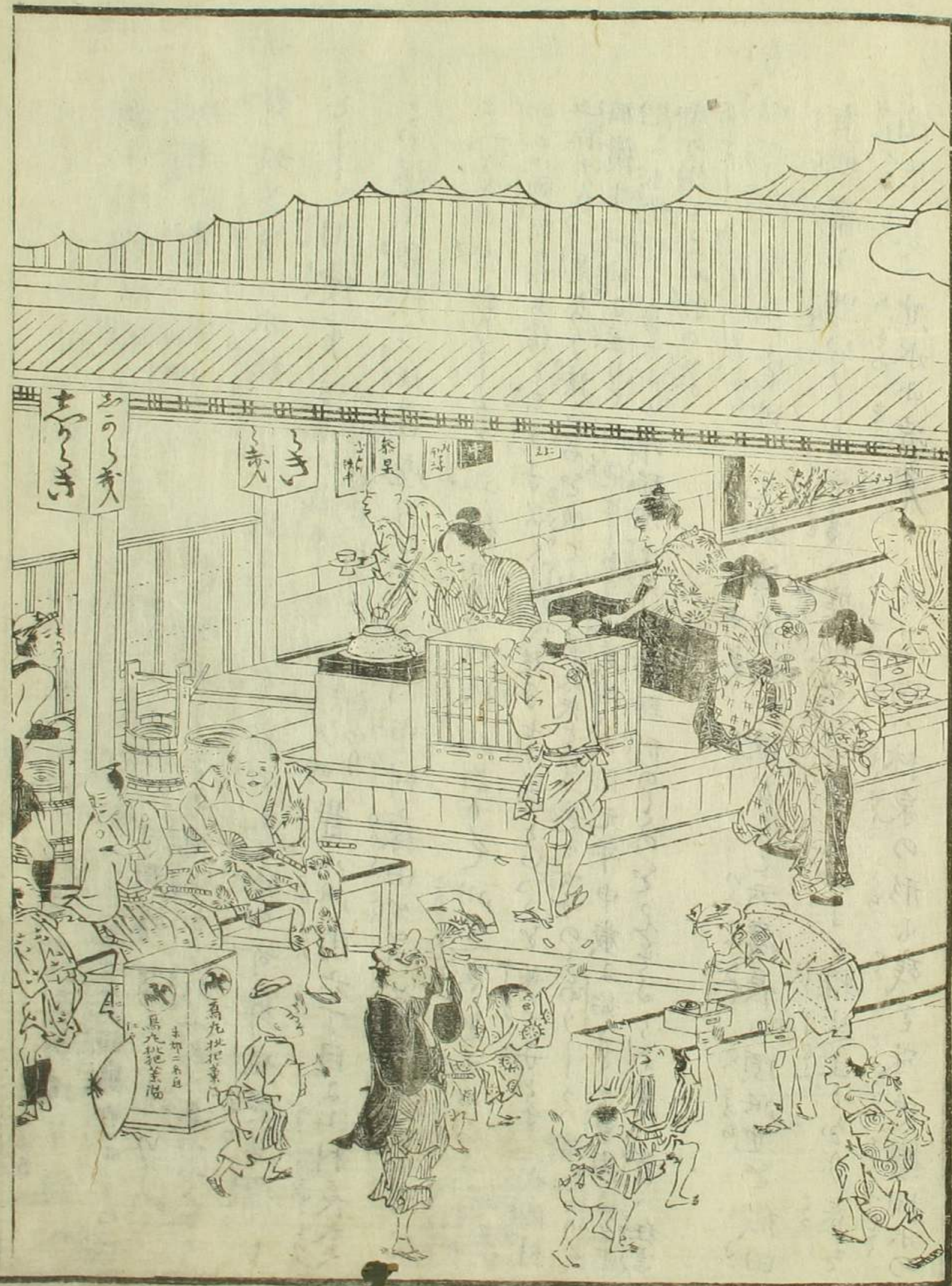
新橋
夕田橋





尾張町
布袋屋
電屋
惠比須屋
呉服店

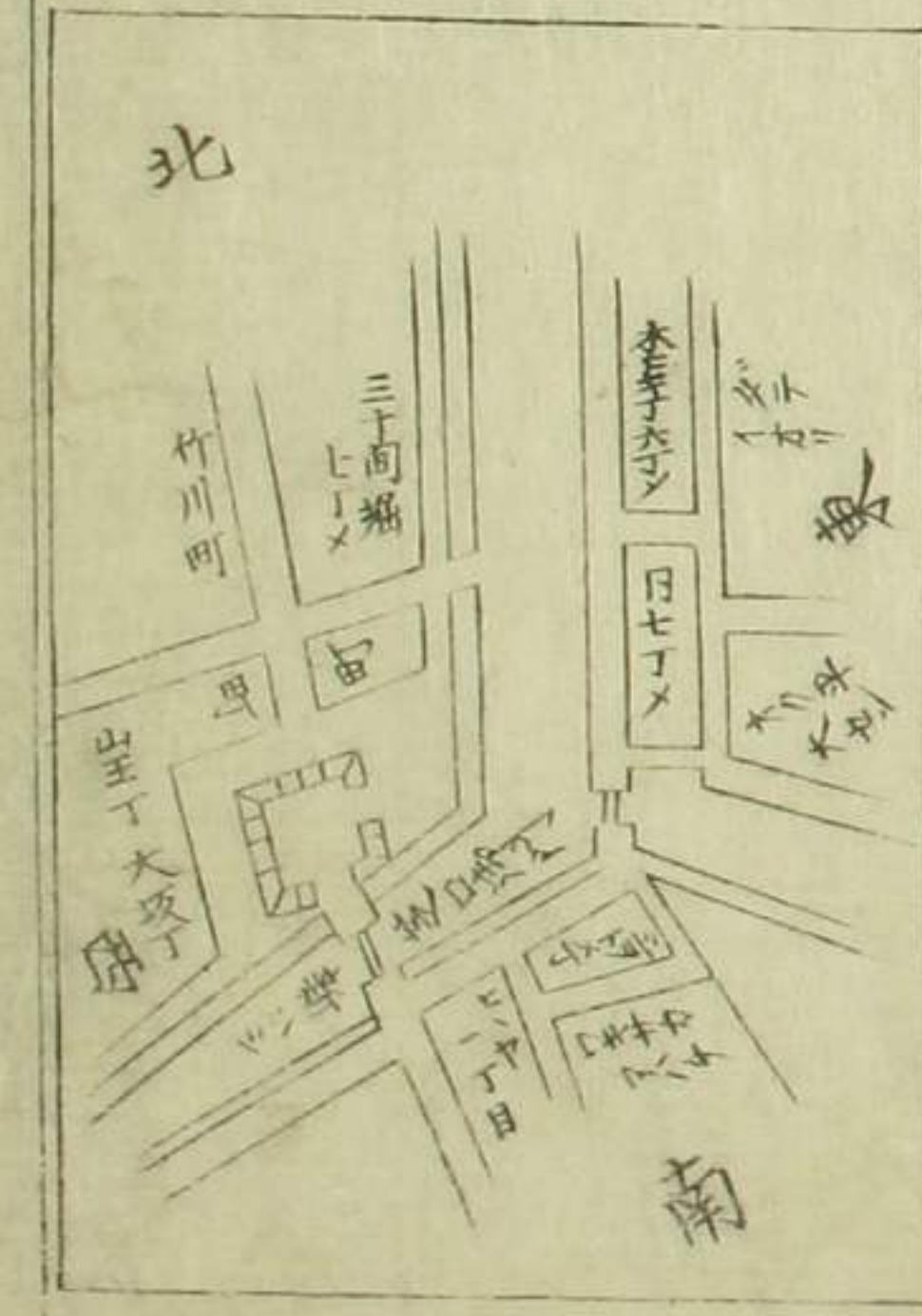


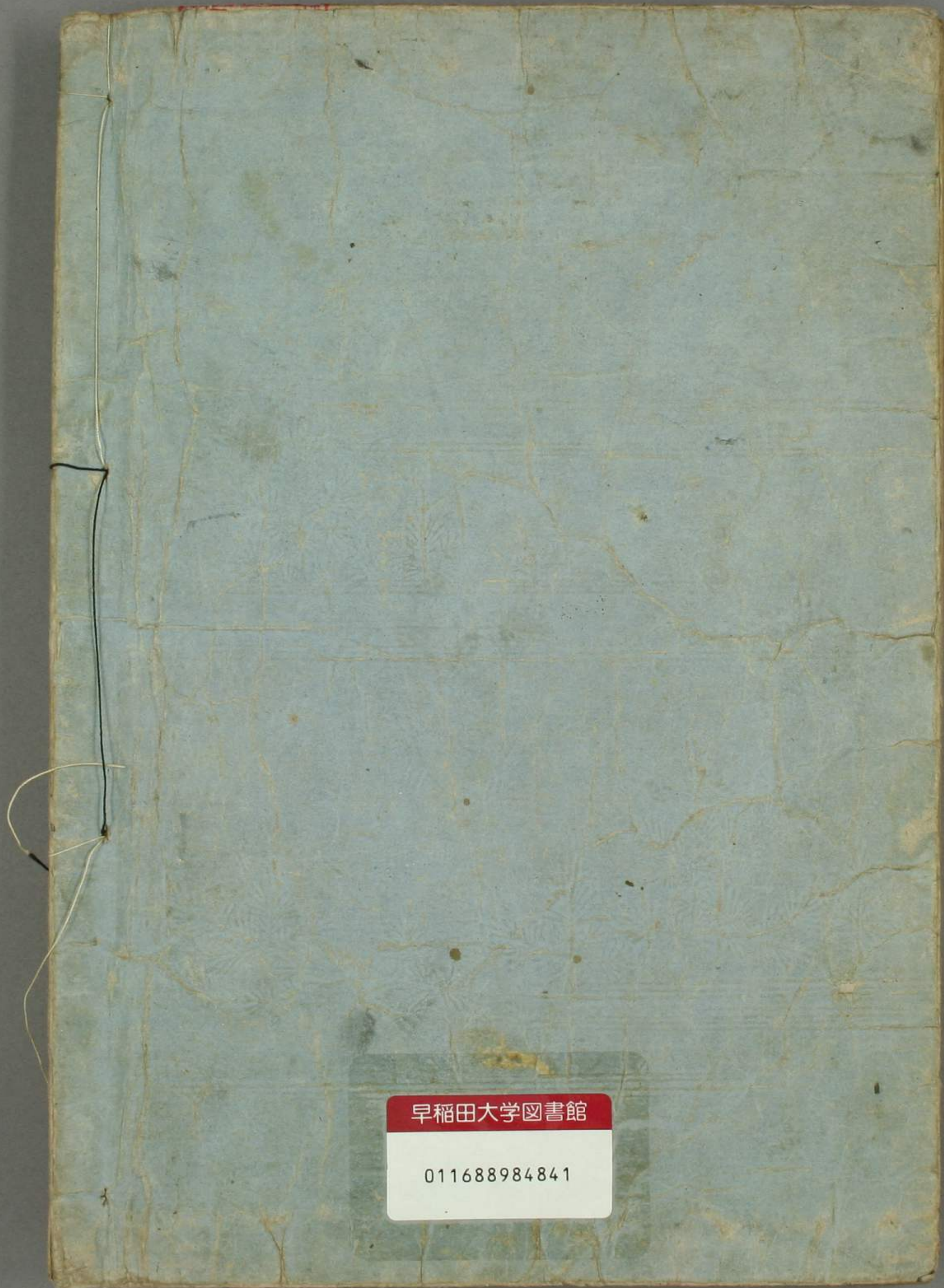


火災の後やき八麴町三丁目の裏へうのされ同十二年の頃跡へ
 新馬場を開くもこのと
 此所の井と米女の井とのゆも彼やききの用水ありかふある名つらあり
 奇舞妓芝居 木挽町五丁目あり今森田勘弥の奇舞妓芝居綿々
 とく相續す 芝居の基源八塚町音屋町 昔ハ此所六丁目山村長太夫
 とのひ一名代の狂言座あり中村市村森田等の芝居とありせし
 まるゝ四座ありしと正徳四年の頃故ありて此芝居を止めらるる
 初ハ岡村長兵衛と云実子なく其子七十郎とありて養て子とす二代岡村
 五郎左衛門是なり後ハ谷と改て山村長太夫との題も女子のありしハ音屋とありて
 相續す此時に至りて断絶せりあり此芝居ハ正保元年申歳始とす東海道名所
 記ハ木挽町喜太夫浄瑠璃外異類異形のものと云ふも此のありハ昔ハ狂言
 座の外ハ此物あり
 織田有樂齋弟宅地 元教寄屋町の地なりと云慶長の頃此地と織田
 有樂齋賜りしと云後ハ空地となりし三四丁々程芝生とあり春を
 摘草夏ハ池水小涼んとて其頃ハ林泉の形も残し殊更櫻楓ホの

二樹多く春秋共遊望の地ゆく寛永の頃迄ハ折ふありしと
 大樹此地ハ遊獵をたむせられしとあり 有樂齋名長益源五郎と
 融覚信長公の弟とて茶道と利休居士と受て一家の風あり元和七年卒
 此人茶室長す故宅地ハ此の地とあり教寄屋と建置れり田跡なりと云
 後世土人教寄屋の唱とありしと云町の名よりなりと云
 新橋 大通り筋出雲町と芝口一丁目との間ハ係正徳元年辛卯朝鮮
 人來聘の前室永七年庚寅此所ハ新津門を津造営ありし
 芝口津門と唱へ橋の名も芝口橋と更らるる享保九年正月廿九日
 の火災ハ燒亡せし後ハ復旧の町家とありしと云此川筋の東木挽町
 七丁目と芝口新町の間ハ架せしと
 汐留と云ふ

正徳四年
 江戸圖





早稲田大学図書館

011688984841